小公女

(フランセス・ホッヂソン・バァネット)

一 印度からロンドンへ

々を眺めていました。
中に乗って、さして急ぐともなく、揺られて行きました。父を、風変りなどこか変った様子の少女が、父親と一緒に辻馬に輝いて、まるで夜が来たかと思われるようでした。その中に輝いて、まるで夜が来たかと思われるようでした。その中の腕に放っために、街筋には街燈が点り、商店の鮹っ窓は瓦斯の光本を、風変りな冬の日のことでした。ロンドンの市中は、非常

気持でいました。しょう。彼女自身も、もう永い永い生涯を生きて来たようなを空想してばかりいましたので、自然顔付もませてきたのでせすぎた眼付をしていました。彼女は年中大人の世界のことしてラ・クルウはまだやっと七歳なのに、十二にしてもま

セエラは父の方にぴたりと身を寄せて、で通っていることさえ、不思議に思われてなりませんでした。さん達のことなど思い起しますと、今この霧の町を妙な馬車大きな船のこと、甲楲のこと、船の上で知り合いになった小母ドンに着いたばかりのところなのです。あの暑い印度のこと、セエラは今、父のクルウ大尉と一緒に、ボムベイからロン

「お父様。」と囀きました。

「何だえ、嬢や?」クルウ大尉はセエラをひしと抱きしめて、

「ねえ、これがあそこなの?」娘の顔を覗きこみました。「何を考えているの?」

「うむ、そうだよ。とうとう来たのだよ。」

い思い出に打たれていることを悟りました。 セエラはほんの七歳でしたが、そういった時の父が、悲.

なのが裕福というのかなと彼女は思っていました。 とか、それはセエラには解りませんでした。裕福とはどんなことなれば裕福になるのだと知りました。裕福とはどんなことが、セエラは皆が彼女に聞えないつもりで話しているのをした。セエラは皆が彼女に聞えないつもりで話しているのをした。セエラは皆が彼女に聞えないつもりで話しているのをした。セエラは皆が彼女に聞えないつもりで話しているのをとか、それはセエラには解りませんでした。裕福とはどんなことが、それはセエラには解りませんでした。裕福とはどんなことが、それはセエラには解りませんでした。裕福とはどんなこは、セエラは皆が彼女に聞えないつもりで話しているのをでががでして、父は裕福なのだと知りました。裕福とはどんなこは、中でもセエラの自由にならないものはありませんので、こんのが裕福というのかなと彼女は思っていました。

ることになるのだろうと思っていました。父が時々してくれるのを、聞いたりしました。で、セエラもいつかは印度を去れた子供達は出来るだけ早く英国へ送られ、英国の学校に入れた子供達は出来るだけ早く英国へ送られ、英国の学校に入は、いつか伴れて行かれる「あそこ」のことだけでありましせ歳になるまでの間にセエラの気がかりになっていたことで歳になるまでの間にセエラの気がかりになっていたこと

ませんでした。が、あそこに行けば、父と一緒にいることがる航海の話、新しいお国の話には惹きつけられないでもあり

尋ねたのは五歳の時でした。「パパさんは、あそこへ一緒に行って下さらないの?」そう出来ないのだと思うと、セエラの胸は痛むのでした。

「一緒に学校へいらっしゃらない? 私、お父さんのおさら

くれる――。」 くれる――。」 くれる――。」 いしてあげてよ。」 いって、一年も経つかたたないうちにすっかり大人になって、故って、一年も経つかたたないうちにすっかり大人になって、敵なお家へ行くのだよ。そして、みんなと遊ぶのだよ。お父いのだよ。それにお前は、小さいお嬢さんのたくさんいる素「でもセエラや、別れているのはそんなに永いことじゃァないしてあげてよ。」

かせることもありました。父もセエラ同様、その物語を喜んなったり、父に本を読んであげたり、一一そんなことを覚えなったり、父に本を読んであげたり、一一そんなことを覚えなったり、父に本を読んであげたり、一一そんなことを覚えなったり、父に本を読んであげたり、一一そんなことを覚えなったり、父に本を読んであげたり、一一そんなことを覚えい。その時のことを考えると、セエラはうれしくなりました。その時のことを考えると、セエラはうれしくなりました。

「ねえ、お父様。」セエラは馬車の中でそっといい出しました。で聞きました。

「もうここに来たのなら、諦めなければならないわねエ。」 「もうここに来たのなら、諦めなければならないわねエ。」 「もうここに来たのなら、諦めなければならないわれたのなら、許があまりませたことをいうので、笑って、そしたのでしたが、セエラにそうと知らしてはならないと思いったのでしたが、セエラにそうと知らしてはならないと思い気な街筋へがらがらと入って行きました。そこに二人の目ざ気な街筋へがらがらと入って行きました。そこに二人の目ざ気な街筋へがらがらと入って行きました。そこに二人の目ざえな街筋へがらがらと入って行きました。そこに二人の目ざるな街筋へがらがらと入って行きました。そこに二人の目ざるな街筋へがらがらと入って行きました。そこに二人の目ざるな街筋へがらがらと入って行きました。そこに二人の目ざるな街筋へがらがらと入って行きました。そこに二人の目ざるな街筋へがらがらと入って行きました。そこに二人の目ざるなければならないわねエ。」

黒でこう彫ってありました。の、正面の扉の上に、真鍮の名札が輝いていました。そこにの、正面の扉の上に、真鍮の名札が輝いていました。そこにその街並は、皆大きな陰鬱な煉瓦建でした。その一つの家

ミス・ミンチン女子模範学校

柱時計まできびしい顔つきをしていました。 は何もかもぶざまでした。椅子も、絨・氈の模様も、真四角で、ていて、造作などもよく出来てはいましたが、家にあるものことなくミンチン先生にそっくりでした。かなりきちんとしうはあとになってよく思い合せたことでしたが、この家はどうにいって、セエラを馬車から抱き下ろしました。セエ「さあここだよ、セエラ。」とクルウ大尉は出来るだけ機嫌よ

くのが、いやになりはしないだろうかしら。」た。「兵隊さんだって、いざとなったら、ほんとうは戦争に行「あたし、何だかいやになったわ。」とセエラは父にいいまし

出しました。 その妙ないいかたを聞くと、クルウ大尉はからからと笑い

れるものがなくなると、わたしも困るね。」「ほんとに、セエラ!」お前のように真面目に物をいってく

「ごった、おり、配質でいった、たれでは、心臓でに同じゃア、なぜ真面目なことをお笑いになるの?」

「だって、お前が真顔でいうと、それがまた茣迦に面白く聞

そこへ、ミンチン先生が入ってきまえるからさ。」

生にとっては願ってもない話だったのです。 大夫人の口から、クルウ大尉が金持で、わけてもセエラのたしました。先生はこの学校をクルウ大尉に推薦したメレディしまった。先生はこの学校をして、魚のような微笑みかたを

とうに嬉しゅうございます。メレディス夫人のお話では、大「こんなお綺麗なお子さんをおひきうけ申しますのは、ほん

変御利発なそうで――」

ていました。 セエラはミス・ミンチンの顔を見つめたまま、静かに立っ

た。そうはいっても、セエラは自分が思っているほど醜い子がどの子供の親にでも同じようなお世辞をいうのを知りましいる。」とセエラは思いました。後々セエラは、ミンチン先生っとも綺麗なんかじゃないのに、あの方は嘘ばっかしいって「私はやせっぽちで、毛は黒くて短いし、眼は緑色だし、ち

色の眼も、見る眼には見事に映るくらいだったのです。(体つきで、人好きのする顔立をしていました。黒い髪も、緑

では決してありませんでした。ほっそりして、しとやかな身

とがあてがわれるはずでした。れから、子馬を一頭と、馬車を一台と、乳母代りの女中一人に美しい寝室と居間とをあてがわれることになりました。そセエラは寄宿生は寄宿生でも、普通の生徒と違って、特別

して下さい。」
「この子の教育については、少しも心配はありませんが。」と、「この子の教育については、少しも心配はありませんが。」と、「この子の教育については、少しも心配はありませんが。」と、「この子の教育については、少しも心配はありませんが。」と、「この子の教育については、少しも心配はありませんが。」と、「この子の教育については、少しも心配はありませんが。」と、「この子の教育については、少しも心配はありませんが。」と、「この子の教育については、少しも心配はありませんが。」と、

こ。「エミリイさんて、どなた?」とミス・ミンチンが訥ねましミリイちゃんは、私の親友になるはずですけど。」仲よしになりきれないほどの数になってしまうでしょう。エ「でもお父様、町へ出るたびにお人形を買ってたら、とても

「お話しておあげ、セエラ。」

て、話し出しました。(父にいわれると、セエラは大変気高く、物優しい眼になっ)

なったら、私エミリイちゃんとお父様のことをいろいろお噂って下さるはずのお人形ですの。お父様がいらっしゃらなく「エミリイちゃんは、まだ買ってないけど、お父様が私に買

「まア、何て御利発な――

するつもり。」

い。」とミス・ミンチンにいいました。愛い子です。どうか私に代って、よく面倒をみてやって下さ「ええ。」と父はセエラをひきよせて、「この子はまったく可

それから五六日、セエラは父とホテルに滞在しました。二

じゃアないかと「囁いき合ったくらいでした。 さな手袋、手巾、絹の靴下 ―― 帳場の後方に坐っていた婦人や、駝鳥の羽根で飾った帽子 ―― 貂の皮の外套、それから小で縁どった天鵞絨の服や、レエスの着物や、刺繍のある衣服人は毎日町へ出ては、「繋」しい買物をしました。高価な毛皮

しているから、私気になってしょうがないの。」形ってものは、何だかいくらお話しても聞いてないような顔「私は、あの子を生きているように見せたいの。でも、お人

が生えていました。

しと縋りつきました。セエラは突然飛び上って、父の腕にひ来かかった時でした。セエラは突然飛び上って、父の腕にひげく、二人は馬車を降りて、軒並に陳列窓を覗いて歩くことエラの『エミリイ』ではありませんでした。失望を重ねたあた人形、裸人形などいちいち覗いて歩きましたが、どれもセ人形、茶色の髪の人形、金色の髪を編んだ人形、衣裳をつけ、二人は方々の人形屋に馬車を走らせ、黒眼の人形、青眼の二人は方々の人形屋に馬車を走らせ、黒眼の人形、青眼の

ソニテン原ニはこう …に、炒、し「あそこに、エミリイちゃんが!」

ました。たった今、大好きなお友達を認めたというような表情が浮びたった今、大好きなお友達を認めたというような表情が浮び、セエラの顔にはさっと紅が刷かれました。青い色の眼には、

んですもの、あの子だってきっと私を知っててよ。」紹介してあげるわ。でも、私はあの子を見た時すぐわかった「お父様が私を紹介して下さるの。そしたら、私もお父様を「おやおや、誰かに紹介してもらわないでもいいのかね。」へ行きましょう。」

みきった藍々のでした。そして、そのふちには、ほんもののたりののできない。マントのようにふさふさと垂れ、眼は深い、澄運びが出来ぬというほどではありませんでした。癖のない金エラが抱きかかえると、エミリイはほんとうに利口そうな眼エラが抱きかかえると、エミリイはほんとうに利口そうな眼エミリイもきっとセエラだとわかっていたのでしょう。セ

さんなのよ。」
ようにしておきたいの。私はこの子のお友達で、そしてお母ようにしておきたいの。私はこの子のお友達で、そしてお母「私は、誰がみてもこの子はいいお母様を持っていると思うりに立派な衣裳を整えました。

クルウ大尉は、真夜中に自分の床を出て、立ってセエラをを想い出すと、たまらなく悲しくなりました。可愛い、愛嬌のある娘から、じきに別れなければならないの父はセエラと一緒にこの買物をよろこびました。が、この

も長い、先のそり上った睫を頬の上に落していました。エミていました。二人ともレエスの襞をとった寝衣を着、二人とした。乱れた黒い髪が枕の上で、エミリイの金髪と縺れ合っ見下ろしていました。セエラはエミリイを抱いて眠っていま

なら何でも叶えてやってくれといいました。に手紙を書くことを約束しました。それから、セエラの望み先生にいろいろ後の事を頼みました。彼は一週に二度セエラました。彼は次の日印度へ立つことになっていましたので、翌日、大尉はセエラをミス・ミンチンのもとに連れて行きリイは真実生きた子供のようでした。

上衣の折返しの所を小さな手で握って、永いことじっと父のお互にさよならをいい合いました。セエラは父の膝に乗り、それから、彼はセエラと一緒に彼女の小さな部屋に行き、外には、何も欲しがらないのですよ。」

「この子は感じやすい子でして、自分でこれと思ったもの以

いました。「私の顔をそらで覚えこむつもりなのかい? セエラ。」とい顔を見つめていました。父はセエラの髪を撫でて、

二人は抱き合って、もう離さないというような接吻をしま胸の内側にいらっしゃるのよ。」「いいえ、私ちゃんともうそらで知ってるわ。お父様は私の

二階の部屋の床の上に坐り、顎を両手の上にのせて、馬車が辻馬車が戸口から駈け出すと、セエラはエミリイと一緒にした。

角を曲るまで、窓から見送っていました。

ミンチン先生が心配して、

妹のアメリア嬢を見にやると、

「あたし、一人で静かにしていとうございますから。」と、扉には中から錠がおりていました。セエラは中から、

ましい小声でいいました。

っていました。彼女はセエラのしうちに吃驚して、階下に降アメリア嬢は膨っちょの背の低い婦人で、姉をひどく怖が

りて行きました。

じこもっているのですよ。ことりとも音をさせずに。」「お姉さん、ませた変な子ね。あの子はまア、錠をかけて閉

えるような騒ぎをするかと、私は思っていたんだよ。」ましさ。あんなに甘やかされているから、家中がひっくりか「他の子のように、暴れたり、泣いたりするより、その方が

の先頭にすると立派でいい。」「まったく莫迦げてるね。でも、教会へ行く時、あれを生徒

分の手を接吻していました。ては手を振り、もうたまらなくなったというように振った自角を見つめていました。馬車の中のクルウ大尉も、ふり返っ二階ではまだセエラとエミリイとが、馬車の消えて行く町

二 フランス語の課業

セエラのことをいろいろ聞いて知っていました。前の晩到着見張って、物珍しそうに彼女を見つめました。生徒達はもう、次の朝、セエラが教室へ入って行きますと、生徒は皆眼を

「あの方、今もあの下」袴 は身をこごめて地理の本の上から、ジェッシイに、囁きました。 どこかの店から着いた箱を開けているのを見たくらいでした。 したセエラ附の女中、 ・ハアバアトなどは、 「レエスの縁飾のついたで、袴で一杯だってよ。」ラヴィニア 開きかけた扉の間から、マリエットが フランス人のマリエットをちらと見た すっかり大人顔をしているラヴィニア 袴を着けてるのよ。 腰をかける時ち

でいいました。「それに、可愛い足ね。」 「まあ、あの方の靴下絹ね。」ジェッシイも地理書越しに小声

ょっと見えたわ。」

方、ちっとも綺麗じゃアないのね。眼だって変な色だわ。」 「綺麗さがちょっと違うのよ。なんだか振り返って見たくな 「でも、足なんて靴次第で小さく見えるものよ。それに あ

の

るような顔よ。そして睫の長いこと!」

るのかしら? いので、静かに皆の方を見返すのでした。皆は何を考えて ませんでした。かえって、自分を見つめている子供達が珍 つきました。セエラは皆に見られても別に羞らう様子もあ セエラは静かにミス・ミンチンの机のそばの、自分の 皆はミンチン先生が好きなのかしら? 席に

何て綺麗なお眼々をしているんでしょう。ほんとに、 も話し合いましょうね。私の顔をごらんなさい。まアお前は 「エミリイ、お父様は今頃もうお船の上よ。仲よくして何で お前お

もみました。セエラはその朝、

エミリイと永いこと父の噂を

んみたいなパパさんを持っているのかしら?

めいの課業に精を出しているの

かしら?

みんな私のパパさ

などと思って

口がきけたらいいのにね。」

面目くさっていいました。 椅子の上のエミリイに本を一冊持って行ってやりました。 服を着せてもらい、 じるのも、その空想の一つでした。セエラは女中に紺の学校 ミリイを生きたものと考えて、そこに限りないよろこびを感 「私が教室へ行っている間、 女中のマリエットが怪訝そうな顔をしたので、セエラは真 セエラは空想や気まぐれな考えを一杯持っていました。 同じ色のリボンを結んでもらってから、 それを読んでらっしゃい。」

行ったりするのよ。そして、私達の足音が聞えるや否や、そ 外へ出かけでもすると、きっと本を読んだり、窓の外を見に も出来ないような顔をしていようというお約束があるのよ。 なるでしょう。だからきっと、お人形さん達の間には、 でも出来るとわかれば、 ただそれは誰もいない時だけなの。なぜって、お人形にも何 な顔してすましているのよ。」 の椅子の中に飛び帰って、 いろんなことが出来るんじゃアないかと、 マリエットが見ているうちは、そこにじっとしているけど、 「私達にはわからないけど、お人形には読んだり、歩いたり、 お仕事やなんかをおしつけるように さっきからそこに坐っていたよう あたし思うのよ。

とか、「ありがとうよ、マリエット」とか、ひどく人を惹きつ 子の世話をしたことはありませんでした。セエラはやさしく けていました。彼女はこれまでに、セエラ程たしなみのいい ました。 て、わかりよい口のきき方をしました。「どうぞ、マリエット」 マリエットは、「おかしなお嬢さん。」とひとりごとをいい 彼女はこの風変りな御主人がすっかり好きになりか

対するように丁寧に私に頭をおさげになる、と自慢しました。速女中頭にセエラの話をしました。お嬢様はまるで貴婦人にけるようにいうのでした。マリエットは階下に降りると、早

「あの小さい方は、まるで宮シ檨ですわ。」

そしてから、こういいました。

「皆さん! 今日は、皆さんに新しいお友達をご紹介したいおごそかに立って、自分の机をとんと叩きました。 セエラが教室に入って二三分間もした頃、ミンチン先生は

お互にお近づきにならなければなりませんよ。」の度からお着きになったばかりなのです。課業がすんだら、て下さいますね。クルウさんは大変遠いところから――ええ、エラも立ち上がりました。「皆さん! クルウさんと仲よくしと思います。」少女達はめいめいの席から立ち上りました。セ「皆さん! 今日は、皆さんに新しいお友達をご紹介したい「皆さん! 今日は、皆さんに新しいお友達をご紹介したい

まじと見つめあうのでした。まんで礼を返しました。それから、皆腰を下して、またまじ少女達は改まって目礼しました。セエラはちょっと「袴」をつ

「セエラさん、ここへお出でなさい。」

「お父さんが、あなたにフランス人の女中を傭って下すったました。セエラは行儀よく先生のところへ出て行きました。ミンチン先生は机から本を取りあげ、ページをめくってい

のは、あなたにフランス語の勉強を特にさせたいお考えから

セエラは少しもじもじしました。

たのでした。

だと思いますが。」

父様が、私あの方が好きとお考えだったからでしょう。ミン「あの、お父様があの方を傭って下すったのは――あの、お

と思いますがね。」 考えでは、お父様はあなたにフランス語を勉強させたいのだも好きだから人がして下さると考えているようですね。私の薄笑いを浮べました。「大変甘やかされていたとみえて、何で「どうも、あなたは・・・」とミンチン先生は少し意地の悪い

礼なように思えて、申し開きも思うようには出来ないのでした。ないこんでいるらしいのでした。が、実はセエラを生んで亡くなってしまった後も、よく赤ん坊のセエラなどはフランス語で話しかけたものでした。で、セエラの母はぶかい時からフランス語は聞きなれていたのでした。が、ミンチン先生にそういわれると、先生の思い違いを懸すのは、フランス人でした。父は母の国の言葉が好きでしたので、母にフランス人でした。父は母の国の言葉が好きでしたので、母にながいました。かんくなな先生は、セエラはただ黙って頬を紅らめました。かたくなな先生は、セエラはただ黙って頬を紅らめました。かたくなな先生は、

は、セエラに何か問われて、ぼろを出してはならないと思っい事実をなるべく匿し終そうとしていました。ですから先生ランス語の出来ないということでした。で、彼女はこの苦しですけど、でも――でも。」 「私――私、ほんとにフランス語の勉強をしたことはないの「私――私、ほんとにフランス語の勉強をしたことはないの

えるはずですから。見えるまでこの本を持って行って、下読なりません。もうじきフランス語の先生のジフアジさんが見「それでよろしい。まだ習わないのなら、早速始めなければ

をしてお置きなさい。」

らなければならないのかと思うと、どうしてもおかしくなる「父」、「ラ・メール」は「母」などということを、今更教わ場合、笑っては失礼だと思ったのですが、「ル・ペール」はセエラは席へ戻って、第一ページを開いてみました。この

「何をふくれているのです。セエラさん。」といいました。ミンチン先生は、セエラの方をちらと探るような眼で見て、

のでした。

「フランス語を勉強するのが、いやなのですか?」

「私、大すきなのです。でも――」

セエラは本を見ました。「ル・フィス」は「むすこ」、「ル・りません。さ、御本を見るのですよ。」「何か物をいいつけられた時、『でも』などというものではあ

と思っていました。「ジュフアジ先生がいらしったら、わかって下さるでしょう。」おかしさを耐えつづけました。セエラは心の中で、フレエル」は「兄弟」。わかりきったことでしたが、セエラはフレエル」は「兄弟」

かれたような様子をしました。としているセエラのしとやかな姿に眼をとめますと、心を惹うな中年のフランス人でした。彼は熟語読本に身を入れよう・ジュフラアジ先生はじき来られました。大変立派な、賢そ

「それはいけませんね、が嬢さん。」彼は親切そうにいいましのですが、この子は何だか勉強したくなさそうなのです。」「この子のお父さんは、大変フランス語を習わせがっているの方へ振り向きました。「うまく行けばいいですがね。」「これが、私の方の新入生ですか?」と、彼はミンチン女史

ているということを、女先生に申し開きしたいのです。」でいるということを、女先生に申し開きしたいのです。」が、セエラは思いました。で、セエラは何の飾りけもなしに、美しと見ました。話しさえすれば、先生はわかって下さるのだとと見ました。話しさえすれば、先生はわかって下さるのだとと見ました。話しさえすれば、先生はわかって下さるのだとと見ました。話しさえすれば、先生はわかって下さるのだとと見ました。「光生が教えて下さるのなら、何でもよろのが、彼女は大きな青鼠色の眼で、ジュフラアジ氏の顔をじっているということを、女先生に申し開きしたいのです。」「一緒にお始めになりさえすれば、きっと面白くなりますよ。」「一緒にお始めになりさえすれば、きっと面白くなりますよ。」

ミンチン女史にいいかけました。 リカラ はいりに驚いて、眼鏡越しに、何か忌々しそうに、セエラがするのでした。暗い霧のロンドンにいると、いつもは故郷がするのでした。暗い霧のロンドンにいると、いつもは故郷がは那のはてのように遠く思われるのでした。セエラの子供ら生の微笑は非常に喜んでいるしるしでした。セエラの子供ららがりに驚いて、眼鏡越しに、何か忌々しそうに、セエラをジンチン女史にいいかけました。 例が記々しそうに、セエラをにかりに驚いて、眼鏡越しに、何か忌々しそうに、セエラをにかりに驚いて、眼鏡越しに、何か忌々しそうに、セエラをにかりに驚いて、眼鏡越しに、何か忌々しそうに、セエラをにかりに驚いて、眼鏡越しに、何か忌々しそがに、セエラをにかりに驚いて、眼鏡越しに、何か忌々しそが、飛び立つ

情を害して、セエラに向き直るのでした。「なぜ、私にいわなかったのです。」ミンチン女史はひどく感語ですよ。アクセントなんぞ素敵なものだ。」はフランス語を覚えたのじゃアない、この子自身がフランス「ねエ先生、もう教えるほどのものはありませんよ。この子

しが掛かったんでしょう。」 「私 ――私、お話ししようと思ったのですけど、私、切り出

法書のかげで忍び笑いをしているのを見ると、急にむらむらた。けれども、女史は、生徒達がセエラの話を聞き、仏語文チン女史に恥をかかさないためだったということも解りましっていました。またセエラがいい出し得なかったのは、ミンミンチン女史にはセエラのいい出そうとしていたことが解

てかかりました。

出しました。「静かになさいったら?」「静かになさい、皆さん。」女史は机を叩いて、きびしい声を

たようでした。 その時以来、女史はセエラに対して、いくらか敵意を感じ

三 アアミンガアド

「父、女」」さえ覚えられずに泣いていたところへ、ふいにているのを感じながら、ミンチン女史のそばに坐ったが、気質は大変よさそうに見えました。亜麻色の髪をかたが、気質は大変よさそうに見えました。亜麻色の髪をかたが、気質は大変よさそうに見えました。亜麻色の髪をかたが、気質は大変よさそうに見えました。亜麻色の髪をかたが、セエラがいきなりフランス語で答えると、少女は吃驚したが、セエラがいきなりフランス語で答えると、少女は吃驚したが、セエラがいきなりフランス語で答えると、少女は吃驚したが、セエラがいきなりフランス語で答えると、少女は吃驚したが、セエラがいきなりフランス語で答えると、少女は吃驚したが、セエラがいきなりフランス語で答えると、少女は吃驚したが、セエラがいきなりました。ジュフラアジ氏がセエラで話しかけた時、その少女はちょっと怯えた眼をしました。

るのを見ると、少女はたまらなくなったのでした。自分の知らぬ単語まで造作なく動詞でつなぎ合せて話してい

しゃくしゃしているところだったので、たちまち少女に喰っミンチン女史に見つかってしまいました。女史はちょうどむ彼女は夢中で見つめながら、思わずリボンを噛んだので、るのを見ると、少女にだまらたくだったのでした

に飛びこんで行きたくなる性癖のセエラでした。中が悩んでいたり、不幸であったりすると、すぐその「諍いの中お友達にでもなってあげたいような気持になりました。他人セエラはそれを見ると、その子がひどく可哀そうになり、さい。口からリボンをお出しなさい。すぐお立ちなさい!」「セント・ジョン!」そのお行儀は何ですか。膨をお直しな

よくお父さんはいったものです。「もしセエラが男の子で、二三百年前に生れていたら。」と、

っている人達を見ると、いつでも戦いたくなるのだから。」ったりしながら、諸国を遍歴しただろうになア。この子は困「抜身をひっさげて、苦しんでいる人なら、誰でも助けたり庇

聞えるのでした。セエラがいうと、それは何かしら情が籠っていて、気持よくんな場合誰でもいうようなことを云っただけなのでしたが、女はしょんぼり窓の下の席に「蹲」っていました。セエラはこ悪業が終ると、セエラは肥った少女を探しに出ました。少悪業が終ると、セエラは肥った少女を探しに出ました。少

「お名前、何て仰しゃるの?」

出た新入生で、馬車や、小馬や、おつきの女中や、身のまわいものである上、セエラは前の晩から皆の間でいろいろ噂の肥った少女は吃驚しました。新入生は初め妙に近づきにく

りのものから考えても、ちょっとよりつきにくい少女なので

「私はセエラ・クルウ。あなたのお名前、ほんとに綺麗ね。「私、アアミンガアド・セント・ジョンって名なのよ。」

ってゝゝkyc。「厶__厶よぁwco岙前大子s。」「あなた、お好き?」とアアミンガアドは飛び上りそうになまるでお伽˙噺の名みたいに聞えるわ。」

と思っているのでした。ところが、セント・ジョンは学校のが、簡単な歴史やフランス語ぐらい覚えるのがあたりまえだ書を暗記しているというような人でした。ですから、父は娘苦しめられていました。父は七八ヶ国語に通じ、何千巻の蔵っていいました。「私――私はあなたの名前大好き。」

駄目です。」と、父はミンチン女史に頼んだのでした。「こいつは、無理にも覚えさせるようにして下さらなければ

中でも一番頭が悪いほどだったのです。

見るより他ありませんでした。解らないという風でした。で、彼女は、セエラを感嘆の眼ですぐ忘れてしまいました。覚えこんでも、何のことだか一向り、泣かされたりしていました。彼女は覚えたかと思うと、こういう訳で、アアミンガアドは、いつでも恥しめられた

「あなた、フランス語お上手なのね。」

足の膝を抱いていました。セエラは大きな、奥の深い窓、際、席に坐り、両手で縮めた

「まア、私なんか駄目よ。私、どうしても話せないの。」って、聞きつければ、きっと話せるようになってよ。」「自家でしょっちゅう聞いていたから話せるのよ。あなただ

「なアぜ?」

アアミンガアドは頭を振りました。下髪がぶらぶら揺れま

「あなたは、お利口なのね。」

いっこ。ところはらようこう見ふうできませんが、ないこの目や、煤けた樹の枝などに、雀が飛びかいながら、「囀っていセエラは窓越しに暗い街を眺めやりました。濡れた鉄の爛干

分は何度となく「お利口だ」といわれたことがある。ほんとました。セエラはちょっとの間心の中で考えてみました。自

にそうなのかしら? ――もしそうだとしたら、全体どうい

う訳でお怜悧なのだろう。—

セエラは相手の丸ぽちゃな、むっくりした顔の上に、悲し「私、わからないわ。」

「あなた、エミリイちゃん御覧になって?」げな眼付を見ると、かすかに笑いながら話を変えました。

「エミリイちゃんて、どなた?」

しました。 アアミンガアドは、さっきのミンチン女史のように聞き返

二人は一緒に窓席から飛び降りて、二階へ上って行きまし「私のお部屋に入らっしゃいな。見せてあげるわ。」

ょう?(それに、人が聞いてると思うと、お話が駄目になっ自分に話してきかすからなの。ひとに聞かれるのはいやでして――ねえ、私、おあそびする時、自分でお話をこしらえて、「ええ。父様がミンチン先生にお願いして下すったの。だっ

てしまうんですもの。」

で、アアミンガアドはふと立ち止って眼をみはり、息を呑んた。アアミンガアドはふと立ち止って眼をみはり、息を呑んるの時二人は、もうセエラの部屋の前の廊下に来ていまし

ほんとに出来て?」んなこと、あなたに出来るの?――フランス語みたいに?んなこと、あなたに出来るの?――フランス語みたいに?「お話を'拵゚゙えるんですって?」と喘ぐようにいいました。「そ

な。」

セエラは驚いて、少女を見返しました。

「誰にだって出来るんじゃないの? あなたやってみたこと

ないの?」

あけるわ。そうすれば、きっと捕まるから。」「そうっと扉のところへ行きましょう。それからさっと戸をセエラは何か前ぶれするように少女の手を握りました。

ことに違いない――アアミンガアドは胸を躍らせながら、爪っかり魅せられてしまいました。何でもいい、きっと面白いだか、さっぱりわかりませんでしたが、セエラの眼付にはすていました。アアミンガアドは、なぜどうして何を捕えるのセエラは笑っていましたが、その眼には神秘な望みが動い

眼を移しました。 アアミンガアドは、セエラから人形へ、人形からセエラへ「いつだってああなのよ。稲萋みたいに早いんですもの。」「あら、もう席にかえっているわ。」とセエラが叫びました。

ちゃんと本を読んでいました。

は穏やかに火が燃えていました。椅子の上には見事な人形が、

くと、小綺麗に片づいた静かな部屋が眼に入りました。

炉に

先立ってセエラの後から戸口に近づきました。不意に扉が開

「あのお人形――歩けるの?」

「いいえ、ちっともないわ。私――ね、お話してちょうだいあなた、いろんなことのつむりになってみたことある?」るつもりなのよ。そう思うとほんとにそう見えるんですもの。「ええ。どうしても歩けるはずだと思うの。歩けると思って

変りなこの新しいお友達の方へ眼を向けました。たが、少女はセエラにすっかり魅せられてしまったので、風エミリイは、少女が今まで見たこともない見事な人形でし

食堂に降りて行くのもしぶしぶなくらいでした。 (大学の)のでいましな。 (大学の)のでした。 (大学の)のでは、 (大学の)のでは、 (大学の)のでは、 (大学の)のでであるが、 (大学の)のででは、 (大学の)のででは、 (大学の)のででは、 (大学の)のででは、 (大学の)のでででは、 (大学の)が鳴って、 (大学の)が鳴って、 (大学の)のでででは、 (大学の)が鳴って、 (大学の)が鳴っな、 (大学の)がい。 (大学の)がい。

ように」自分の席に飛び戻るのだという事などでした。の事、だがそれを秘す必要から、人の気配がすると、「稲妻のでした。お人形が皆のいない間に歩いたり、物をいったりすしてきました。航海の話、印度の話――しかし、アアミンガ々の不思議な話をしました。緑色の目は輝き、頬には紅がさるの一時間の間、セエラは炉の前に身をちぢめて坐り、様

「私達には真似も出来ないわねエ。まア、魔術みたいなもの

ころだが、と思いました。セエラは、しかし、泣きませんでアアミンガアドは、たいていの子なら声をあげて泣き出すと息を吸いこんだので、声も妙に悲しく、低くなりました。そ輝きを消してしまったように思われました。セエラは激しくエラの顔色が変りました。暗い雲が一度とよぎり、眼に発ちた一度セエラがエミリイを探し廻った話をした時、ふいにセ

中の何よりも、お父様がお好きでしょう。」言おうとして、つい小声になりました。「あなただって、世のも、体が痛いのじゃアないのよ。」それから何事かをしっかり「ええ。」セエラはちょっと黙って、それからいいました。「で「あなた、どこかお痛いの?」

徒らしくないと思いました。で、彼女はひどく当惑して、彼女でした。が、そんなことを口に出すのは、模範学校の生ことを避けるためには、どんなすてばちな事でもしかねないのみならず、ほんの十分間でも父と二人きり向き合っているを愛し得るなどと思ったことは、一度もありませんでした。アアミンガアドは微かに口を開けたままでした。彼女は父

「私は世界を十倍したよりかも、お父様の方が好き。だから、ばかりいらっしゃるんですもの。」いました。「お父様は年中お書斎にいらしって――何か読んで「私――私めったにお父様と会うことなんかないのよ。」とい

かと思いましたが、セエラはやはり泣きませんでした。彼女ませんでした。アアミンガアドは、セエラが今にも泣き出すセエラは頭を静かに膝の上にのせ、しばらくは身動きもしもの。」

とはないわ。」とはないわ。」とはないわ。」とはないとは、深傷を負うことだってないとはいえないでは軍人なのよ。戦争でもあると、お父様は喉のひりつくようは軍人なのよ。戦争でもあると、お父様は喉のひりつくようは。兵隊さんたちの我慢なんか大変なものだわ。私のお父様は。近さが入びはでも耐えるってお約束したの。まだ私はやがて顔を上げずにいい出しました。

髪を背後に振り上げました。 ふと、セエラは顔を上げて、妙な微笑を見せながら、黒い少女の胸には、セエラを「憬'れる気持が湧き始めていました。 アアミンガアドは、セエラを見つめるばかりでした。この

らか耐えやすくなるでしょう。」くらか楽なのよ。苦しいことは忘れられないにしても、いく「でも、こうしてつもりになるお話なんかしていると、私い

けど、私はあなたがほんとに好きなのよ。」て?「あなたはお利口で、私は学校中で一番出来ないのですなれればいいと思うの。あなた、私のお友達になって下すっ「ラヴィニアとジェッシイは仲よしなのよ。私達も仲よしに来そうな気がしました。

さらいをしてあげましょうね。」うの顔は輝き出しました。「あたし、あなたのフランス語のおほんとうに、これからお友達になりましょうね。」不意にセエ「私も嬉しいわ。好かれていると思うと、うれしいものね。

四 ロッティ

を持っていました。彼女は時々アアミンガアドにこんな事を打ではセエラを嫌っていました。中エラは幸い利発なよい頭がならないという慾から、事ごとにセエラをほめそやして、学ではセエラを嫌っていましたが、こんな金持の娘を失ってはではもあるように待遇されていました。ミンチン女史は、心の学校で送った生活は、ちっとも彼女のためにならなかったちあけるようになりました。

でも、私は一度もひどい目にあわなかったものだから、どなでしょうね。きっと私は身ぶるいの出るほどいやな子なのよの、気質がよくなるより他ないじゃアありませんか。私がほ父様は何でも下さるし、皆さんは親切にして下さるんですもとうは私、ちっともいい気質じゃアないのでしょうけど、おしたはずみから、あんないいお父様の子に生れたのね。ほん「人はふとしたはずみで、いろいろになるものね。私はふと

たも私のわるい所がわからないのだわね。」

ある時ジェッシイは正直にいったために、かえって仲よしの

んとうにいやな人だわ。」アアミンガアドはのろのろといいました。「でもあの人は、ほ「ラヴィニアだって、ひどい目になんかあわないけど・・・・」

セエラは小さな鼻先を擦って、何かを思い出そうとしまし

「きっとあの人は、大人になりかけているからなのよ。」

がありました。セエラはそれを思い出して、こう云ったのでので、気質まで変り出しているのだろう、といっていたこといつかアメリア嬢が、ラヴィニアに、あまり育ち方が早い

した。

意地悪をするからではなく、 でなりませんでしたが、いつかセエラは、事実上皆の上に立 に歩かされることになりました。セエラは初めはそれがいや の手套を着けたセエラは、 には、中で一番よい着物を着ていたのでしたが、 というと綺麗な方で、生徒が二列に並んで散歩に出る時など ことをきかないと、意地悪く当り散らすので、皆怖がって、 つようになりました。それももちろん、ラヴィニアのように の贅沢な衣裳に押されている形でした。天鵞絨の服や、 仕方なく彼女に従っていたのでした。ラヴィニアはどちらか の学校の首領だと思っていました。彼女は他の生徒達がいう セエラを嫉んでいました。セエラが来るまでは、彼女こそこ かったために、皆から敬われるようになったのでした。 でも、 ラヴィニアはまったく不快な娘でした。彼女は一方ならず セエラ・クルウには一つこんな事があってよ。」と、 いつもミンチン女史と並んで先頭 かえって決して意地悪などしな 今はセエラ

らずにはいられないけど。でも、ミンチン先生が、父兄にセちっとも偉がらないということなの。私がセエラなら、威張ラヴィニアを怒らせたことがありました。「それは、セエラは

エラを見せびらかすのを見ていると、胸がむかむかするわ。」

とよ。それに、お父さんが印度の軍人だからって、ちっともって、フランス語を学校で習ったわけでもないのにね。ただキン夫人にフランス語を聞かしてさし上げるのですよ。』です印度のお話をして上げるのですよ。』 ラヴィニアは、得意なミ『さ、セエラさん、応接室へ行ってマスグレエヴの奥さんに『さ、セエラさん、応接室へ行ってマスグレエヴの奥さんに

ら変ながで物になるんですって。」のないというなは大きくなってかまえるのは莫迦げているって、ありもせぬことをありそうにうヴィニアは、声を高くしていいました。「うちのお母さんが「あの子は、いつでも何かしら莫迦げた事をしているのね。」のの子は、いつでも何かいいかけたりしているのよ。」のでは、頭の所を撫でいるのはそうね。そのお父さんの殺した虎の皮が、セエラの「それはそうね。そのお父さんの殺した虎の皮が、セエラの

たのでした。

たりしていると、母らしく駈け寄って助け起し、ポケットか子供達は、よくがいってやりました。転んで膝小僧をすりむいは、情気もなく分けてやりました。いじめられている小さいやりがあって、「慎しやかな少女でした。で、持っているものセエラの『偉がらなかった』のは真実でした。彼女は思い

らボンボンを出してやるという風でした。

セエラを女神か女王様のように崇めはじめました。 でこともありませんでした。少女達は、人形用の茶道具など見ずめて注がれるのでした。少女達は、人形用の茶道具など見でした。そして、エミリイもやはりお茶の仲間入りをするのました。そして、エミリイもやはりお茶の仲間入りをするのは幾度も嫌われている少女達を自分の部屋に招いて、お茶のだから、年下の少女達はセエラを崇拝していました。彼女

く、学校にでも入れるより他ないと思って、ここに伴れて来我儘をつのらせました。若い父親は彼女をもてあましたあげらなければならないといっているのを聞き、いい気になって別にうるさいとも感じませんでしたが、ロッティも早く母をていました。セエラは母らしい気持を持っていましたので、ロッティ・レエなどは、しつこいほどセエラにつきまとう

偉いことなんかありゃしないわ。」

で喚きはじめました。 て、ミンチンもそれにはたまりかね、室外に聞えるほどの声るとよけい武者ぶりついて泣き立てるのでした。さすがのミチンと、アメリア嬢との声を聞きました。少女はなだめられのことでした。セエラがある部屋の前を通ると、誰かが怒って上まが初めてロッティの面倒をみてやったのは、ある朝

「何で、泣くんです。」

「うわア、うわア、うわア、

わたい

おおお母ちゃんがな

-14-

いイ!」

でね。後生だから。」た。「泣くのはやめてちょうだいね。いい子だから、泣かない「まア、ロッティったら!」アメリア嬢は金切声を上げまし

「こうさは、厠「うこうう。」 ここ、 こうこう はごけ シェンました。 「おおおおおかあちゃん――い――いないィ!」「うわア、うわア、うわア」ロッティは嵐のように吠え立て

た。「鞭で打ってやる。我儘者め。」「この子は、鞭打ってやる。」とミス・ミンチンは宣告しまし

た。あの声を聞かれて困ったのでした。出して来ました。女史はセエラを見ると、困った顔をしましも電のようでした。とふいに、女史は裾を蹴って廊下に飛びロッティは更に大きな声を立てました。ミンチン女史の声

てあげてもよろしゅうございますか? 先生。」子なら鎮めてさし上げられるだろうと思いまして、行ってみりましたの。――それに、私あの、きっと――きっと、あの「私あのロッティちゃんだと思いましたので、立ち止って居「あら、セエラさん。」と、女史はつくり笑いをしました。

るでしょう。お入んなさい。」なたは何でもお出来になるから、きっとあの子の世話も出来ているのを見ると、急に顔をやわらげていいそえました。「あは口を尖らしましたが、セエラが自分の剣幕に、おどおどし「出来るならやって御覧なさい。あなたは利口だから」先生

「まア、可哀そうね、お母ちゃんのないことも知っててよ。て、ロッティの上にのしかかっていました。た脚で猛烈に蹴り立てていました。アメリア嬢は真紅になっロッティは床に転って、ひいひいいいながら、小さな肥っ

また!この根性曲りの憎まれっ子。打ってやるから!」りと変えて、「黙らないと振り廻してやるぞ! そら、そら、可哀そうにねエ――」というかと思うと、今度は調子をがら

ノチノ七目が、こりてみてら、ハニ卯ノやハミノこりで?「アメリアさん。」と、セエラは低声でいいました。「あのミーセエラは静かに二人のそばへ行きました。

アメリア嬢はふり返って、ンチン先生が、とめてみてもいいと仰しゃいましたので。」

「あなたにとめられるつもりなの?」とおぼつかなさそうに

喘ぎました。

ました。ティはむくむくした脚を、またはげしく、じたばたやり出しアメリア嬢はほっと嘆息して、膝を立て直しました。ロッ「出来るかどうか、判りませんけど、まアやってみますわ。」

エラは黙って立っているので、泣くのにも気がのりませんでいと、思ったようでした。が、そこらはあまり静かだし、セセエラでした。ロッティはセエラを認るまで、ちょっとの間でした。涙の眼を開いて見ると、そこに立っているのはあのの音もしませんでした。ロッティにとってこんな事は初めてッティのそばに、黙って立っていました。喚き声の他には何エフはアメリア嬢を送り出すと、しばらく吠え立てるロ

「あたしだって、ないわ。」 「わたい――お――お――おかあちゃんが――ないイ!」

たするのをやめて、寝たままセエラの方をじっと見はじめま思いがけないセエラの言葉に、ロッティはたちまちじたば

し拗ね泣きが出来ただけでした。した。ロッティはまだ泣き足りない気持でしたが、やっと少

「お母ちゃん、どこ?」

達を見ていらっしゃるかもしれないわ。お二人とも、きっとなたのお母様だって、きっとそうなのよ。お二人は今頃、私逢いにいらっしゃるのだわ。私達の眼には見えないけど、あ「お母様は天国へいらしったのよ。でも、きっと時々私達に

震し、このに溶喉感)にしていました。円らな彼女の眼は、た。彼女は美しい巻毛を持っていました。円らな彼女の眼は、ロッティはいきなりしゃんと坐って、あたりを見廻しまし

この部屋にいらっしゃるのよ。」

濡れしとった忘勿草のようでした。

寄りかかれるように低く出来ているのよ。みんなそこから下ういたい、では、では、かんなで出来た壁が立っているの。でも、みんなが行っていを吸っているのよ。小さい子達は花の中を駈け廻って、笑いを吸っているのよ。小さい子達は花の中を駈け廻って、笑いを吸っているのよ。小さい子達は花の中を駈け廻って、笑真珠や金で出来た壁が立っているの。後はぴかぴか光ってる「天国は花の咲いた野原ばかりなのよ。微塵が吹くと、百合「天国は花の咲いた野原ばかりなのよ。微塵が吹くと、百合

ラの方にすり寄って、一言々々に夢中になっているうち、いは、他のどんな話よりも美しいものでした。ロッティはセエやんで、うっとりと聞きとれたことでしょう。ましてこの話セエラがどんな話をしたにしても、ロッティはきっと泣き

界を覗いては、にっこり笑って、そしていいお便りを送って

あまりの残り惜しさに、またしても泣き出しそうな口の尖らつの間にかもうおしまいになってしまいました。ロッティは

せ方をしました。

「わたいも、そこへ行きたいわ。

わたい

-学校、

お母ちゃ

そばへひきよせました。の夢からさめて、ロッティのむっちりした手をとり、自分のの夢からさめて、ロッティがまた泣き出しそうなのを知ると、自分セエラはロッティがまた泣き出しそうなのを知ると、自分

娘、エミリイはあなたの妹よ。」「私、あなたのお母ちゃんになってあげてよ。あなたは私の

ロッティの泣顔に、えくぼが湧いて来ました。

「ほんと?」

「ええ」セエラは飛び起きました。「さ、行って、エミリイち

れているようでした。彼女はセエラと一緒にちょこちょこといたりするのがいやだったからだということも、けろりと忘で小一時間も騒いでいたのは、昼飯前に顔を洗ったり、髪を梳り、あなたのお顔を洗って、髪を結ってあげるわ。」ゃんにも、お姉さんが出来たって話してあげましょう。それ

五 ベッキイ

部屋を出て、二階へ上って行きました。

セエラは養母さまになったのであります。

よっても、たくさんの崇拝者を造りましたが、それにもましセエラは贅沢な持物や、学校の『看板生徒』である事実に

ても、 羨ましがっていましたが、多少の反感を持って近づいて行っ てしまうのでした。ラヴィニアなどはセエラのその力を大変 エラが話すと、 て人を惹きつけたのは、お話が上手だということでした。セ セエラの話の巧さには、つい酔わされてしまうのでし どんなくだらない事でも、立派なお話にな

た。 うこともありました。そんな時、 りまかれて自分でつくったお話をする時、セエラの緑色の 手を当て、自分を嘲笑うかのようにこういうのでした。 た。語り終った時、セエラは興奮のあまり息を切らしてしま 中の妖精達や、王様、 かに忘れてしまいました。セエラの眼に見えるのは、 らず識らず物語にふさわしい声色や身振を始めるのが常でし かりでなく、彼女自身お話をするのが大好きでした。皆にと かこむ所を見たことがあるでしょう。セエラはお話が巧い あなた方も学校で、皆が夢中になって、話の巧い人を取 セエラは少女達が耳を澄ましていることなど、いつの 頬は紅をさすのでした。彼女は話しているうちに知 女王様、美しい貴婦人達などなのでし セエラはどきどきする胸に お話 間 ij ば 眼 の

たりしていました。

まって馬車から降りると、みすぼらしい小娘が、地下室の入 私はお話の中の人になっているような気がするの、何だか変 セエラがミンチン先生の塾に入ってから、二年目の冬でし ある薄霧の日の午後、 セエラが厚い天鵞絨や毛皮にくる

していることの方が、ずっとほんとらしく思えてくるのよ。

お話をしていると、あなた方や、この教室よりも、

話

口に立っていました。

少女は首を長くして、一生懸命にセエ

こり笑いました。 を惹かれました。 ラを見ていました。セエラはおどおどしている少女にふと目 眼が合うとセエラはいつものように、

つ

その少女は重そうな石炭函を持って、こそこそと入って来ま とでした。セエラが教室でいつものお話をしているところへ、 ところでした。が、その少女はあまりみすぼらしく、あまり にひょこりと消えてなくなったので、セエラは危く笑い出す 叱られるとでも思ったらしく、まるでびっくり壁の中の人形 寂しそうなので、笑うことも出来ませんでした。その晩のこ のように、ひょこりと台所の中へ隠れてしまいました。ふい した。少女は炉の前に跪き、火をおこしたり、灰をかき取っ が少女の方は、有名なセエラを竊み見たりしたら、きっと

ことなどを、見てとりましたので、 と石炭を入れたり、火箸を動かしたりしていました。 ないとでも思っているらしく、音を立てないように手でそっ どおどしていました。話を聞きに来たのだと思われてはなら セエラの言葉を聞き洩すまいと、 セエラはすぐ、少女がセエラの話に気を取られていること、 少女はさっきよりはきちんとしていましたが、相変らずお 休み休み火をおこしている セエラは声をはり上げて 。しかし

それを見守っていらっしゃいました。」 中を静かに泳ぎ廻りました。お姫様は白い岩の上に坐って、 「人魚達は、 真珠で編んだ綱を曳いて、青水晶のような水の

は、はっきりと話しつづけました。

それは、 姫は海の底の眩しいような洞穴の中に王子と住んでいた 人魚の王子様に愛されたお姫様の面白いお話 でし

のでした。

りました。彼女は、いつか海の底の立派な御殿に引きこまれ 上にぺたりと腰を落して、酔ったようにセエラの話に聞き入 も繰り返しました。三度目の掃除が終ると、跪いていた踵 少女は一度炉を掃き清めてしまうと、同じ事を二度も三度 の

箒が少女の荒れた手からことりと落ちました。ラヴィニア

ら美しい音楽が聞えて来るような気がしました。

ていました。身の廻りには珍しい海草がなびき、遠くの方か

は少女の方へ振り向きました。

「あの娘、聞いてたのよ。」

えて、怯えた野兎のようにそそくさと出て行きました。 とがめられた少女は、いきなり、箒を取り上げ、石炭函を抱

それを見ると、セエラはむらむらして来ました。

ちゃアいけないの?」 あの娘が聞いているのを知っていたのよ、なぜ聞いて

ラヴィニアは大気取りで頭を振り上げました。

もいいと仰しゃるかもしれませんさ。だけど、私のお母さん 「そりゃア、あなたのお母さんは、女中にお話をしてやって

「私のお母さんですって?」セエラは吃驚したようにいいま そんなことしちゃアいけないと仰しゃってよ。」

した。「ママはきっといけないなんて仰しゃらないと思うわ。

にお話を聞いていいとお思いになってるわ。」 ママは、お嬢さんであれ、女中であれ、誰であれ、同じよう

う。亡くなった方に、どうしてそんなことが解るの?」 「じゃア、ママにそれが解らないって仰しゃるの?」セエラ 「でも、あなたのママは、もうお亡くなりになったんでしょ

は低い、きびしい声でいいました。すると、ロッティがそこ

へ口を出しました。

こも百合の原で、皆百合を摘んでるの。いつだったか、あた いが寝る時、セエラちゃんが話してくれたわ。」 マには何でも解るのよ。往来はぴかぴか光っててどこもかし ――ここでは、セエラがあたいのママだけど、もう一人のマ 「セエラのママは、何でも知ってるのよ。あたいのママもよ。

ました。「天国のことを、お伽噺にして話すなんて。」 「まア悪い人。」ラヴィニアは、セエラの方に向き直っていい

私のお話がお伽噺じゃないことも解るでしょう。さ、ロッテ 友達に対して親切な心持を持ってごらんなさい。そうすれば、 伽噺だか、お伽噺でないか、どうして解るの?(もう少しお あってよ。ちょっと開けて読んで御覧なさい。私のお話がお 「でも、聖書の黙示録の中には、もっと素敵なことが書いて -18-

した。 見廻してみましたが、あの小娘はどこにも姿を見せませんで セエラはロッティと伴れ立って歩いて行く間も、そこらを

ィ向うへ行きましょう。」

「あの火をおこしに来る子は、何ていうの?」 その晩、セエラは女中のマリエットに、

と訊ねてみました。マリエットは、その子についていろいろ のことを話してくれました。

こにでも追い使われているのでした。靴や金具を磨かされた 間日働きに雇われたばかりなのでしたが、台所に限らず、ど マリエットは思いました。あの寂しそうな小娘は、ついこの いかにも、セエラの嬢様のお訊きになりそうなことだと、

で、人から物をいいかけられたりすると、眼が顔から飛び出可哀そうでならないと思っているところでした。ひどく内気十二くらいにしか見えませんでした。マリエットも、少女がけをさせられたり。――身体の発育が悪いので、十四なのにり、重い石炭函の上げ下しをさせられたり、床や窓の雑巾が

ていましたが、そこまで来るとセエラはテエブルに頬杖をついて、マリエットの話を聞いしそうに怯えるのでした。

「何て名前なの?」とまた訊ねました。

セエラは一人になってからしばらくの間、炉の火を見つめなおし。」とかいう声を聞くのでした。おかず、「ベッキイ、これをおし。」とか「ベッキイ、あれを名前はベッキイでした。マリエットは台所で、五分と間を

セエラは思いました。娘は食物さえお腹一杯はあてがわれていないのに違いないと、ベッキイを可哀そうな物語の女主人公にしていました。あのがら、ベッキイの事ばかり考えていました。いつかセエラは、セエラは一人になってからしはらくの間、炉の火を見つめな

た。見すぼらしい帽子は落ちかけていました。ツキイの鼻の先や、前掛のそこここには、炭がついていまし中に、ぐっすり眠りこんでいるベッキイを見付けました。ベ午後でした。居間に帰ってきたセエラは、自分の安楽椅子のそれから二三週間経った頃でした。やはり薄霧のかかった

室はかなりたくさんあったので、それを片付け終って、セエエラの部屋は、一番おしまいに片付けることにしました。寝つけられたのでした。彼女はお姫様の部屋のように美しいセーベッキイはその午後、生徒達の寝室を片付けるようにいい

湛えたまま、つい快い眠りにおちてしまったのでした。暖かな炉のそばに腰を下すと、汚れた顔にものうげな微笑をラの部屋に来た時には、小さな足も痛むばかりでした。で、

ている小娘を見付けたのでした。の足どりで、踊りながら居間に飛びこんで、そしてあの眠っうに、新しい舞蹈の練習をしていたのでした。習ったばかり黒い髪の上には薔薇の冠を載せ、まるで薔薇色の蝶i々のよ舞蹈のお稽古で夢中になっていました。薔薇色の服を着け、ベッキイが足の痛くなるほど働き廻っていた間、セエラは

思いました。ここに眠っているのは、セエラの作ったお話の腹を立てるどころか、かえってベッキイに逢えてよかったとてエラは、大事な椅子に薄汚い子が掛けているのを見ても、に!」

「まア。」セエラは思わず小さい声でいいました。「可哀そう

いました。イの方に歩みよりました。ベッキイは微かにいびきをかいてイの方に歩みよりました。ベッキイは微かにいびきをかいてのお話をすることも出来るのです。セエラは、そっとベッキ主人公で、彼女が眼を覚しさえすれば、セエラはその主人公思しました。ここに即ってしるのに、セコラの代・だす話の

っとの間、そっとしといてあげましょう。」に、らいたいりでもすると、きっと叱られるから、可哀そうだわ。もうち「そっと眠らしといてあげたいけど、ミンチン先生に見つか「自然に眼を覚してくれればいいが。」とセエラは思いました。

ベッキイはきっと叱られるに違いありません。にもアメリア嬢が入って来ないとも限りません。そうすれば、ながら、どうするのが一番いいかと、思いまどいました。今年エラはテエブルの端に腰かけて、細い脚をぶらぶらさせ

「でも、とても疲れているのね。」

みたいなあの評判なお嬢さんと向き合っているのに、気がつたいなあの評判なお嬢さんと向き合っているのに、気がつたいと坐って、身体を暖めていただけなのに――と、こことり、息をはずませながら、大きな眼をあけました。ベッキ件にぶっつかって、音を立てました。ベッキイは怯えて飛びやにぶっつかって、音を立てました。ベッキイは怯えて飛びやエラがそう思ったとたん、 ぱの石炭が燃え砕け、炉

う。きっと私はお給金ももらえずに、逐い出されてしまうのだろきっと私はお給金ももらえずに、逐い出されてしまうのだろゃあしゃあとこの小さい貴婦人の椅子の中で眠ったりして、はとうとう罰を受けるようなことをしでかしてしまった。しベッキイは躍り上って、落ちかけた帽子を掴みました。私

かんにんして下さいまし。」「お嬢様、お嬢様!」か、かんにんして下さいまし、どうか、ベッキイは息もつまるばかりに、欷『歔をはじめました。

い。セエラは椅子から飛び降りて、ベッキイのそばへ行きまし

もかまわないのよ。」にでもいうようにいいました。「ここでは、眠ったってちっと「何にも怖いことはないのよ。」セエラは自分と同じ身分の娘

く寝こんだわけではないのでございますから。」で ――それに私、疲れていたものですから、決して厚かましよ、お嬢様。ただこの火があんまりほかほかといい気持なの「私は、眠るつもりなんかちっともなかったのでございます

セエラはふと親しげに笑って、ベッキイの肩に手をかけま

した

ベッキイはたまげたようにセエラを見返しました。ベッキだ眼が覚めきらないんでしょう。」「あなた疲れていたのね。眠るのも無理はありませんわ。ま

でいったことはありませんでした。 用をいいつけられたり、叱られたり、耳を打ませんでした。用をいいつけられたり、叱られたり、まさあるだ、というような眼でベッキイを見ているのです。セエラはは疲れるのがあたりまえだ――居眠りするのさえあたりまえだ、というような眼でベッキイを見ているのです。そして、ベッキイはっまでした。用をいいつけられたり、叱られたり、耳を打なことをされる気持もベッキイは、まだ、中心に、このでは、このでは、なっとででした。用をいいつけられたり、叱られたり、耳を打なことをされる気持もベッキイは、まだ、味ったことはありませんでした。

「いいえ、そんなことするものですか。」せんの? 先生達にいいつけたりなさりゃアしません?」「あの、あの、お嬢様。怒ってらっしゃるのじゃアございま

いのは、いわば偶シットがよ。」があなたのように幸せでながあなたのように不幸でなく、あなたが私のように幸せでな「だって、あなたも私も、同じ小娘じゃアありませんか。私は見ていられないほど気の毒になりました。 汚れた小娘の顔が、おどおどしているのを見ると、セエラ

人が車に轢かれたり、梯子から落ちたり、あのいやな病院へんでした。ベッキイが『アクシデント』だと思っているのは、ベッキイには、セエラのそういう意味がちっとも解りませ

伴れて行かれたりする、そうした災難のことだったのでした。 ベッキイの解らないのを察しると、 セエラは話題を変えまし

「もう御用すんだの?」もうしばらくここにいても大丈夫?」

た。

「ここにですって? お嬢様、 あの私が?」

けてしまったのなら、ちょっとぐらいここにいてもいいでし 「そこらには誰もいないようよ。だから、ほかの寝室を片付

ようでした。セエラは戸棚から厚く切ったお菓子を一切出し て、ベッキイにやりました。セエラは、ベッキイがそれをが ょう? お菓子でも一つ上らない?」 つがつ食べるのを、うれしそうに見ていました。セエラが心 それから十分ほどの間、ベッキイはまるで熱に浮かされた

のよ。 思いきってこんなことまで問うようになりました。 「あの、そのお召ね? 「まだこんな舞蹈派はいくらもあるけど、 あなたも好き?」 ――それ、お嬢様の一番いいお着物?」 私はこれが好きな

おきなく話しかけるので、ベッキイも、いつか怖れを忘れ、

でしたが、やがてびくびくした声でいいました。 って見ていると、いい着物を着た人達が行く中に、一人桃色 「私いつか、宮)様を見たことがあるの。公園の外の人混 ベッキイは感嘆のあまり、しばらく言葉も出ないような風 に混

のよ。 それが宮様だったのよ。今しがた、あなたがテエブルに腰か けていらっしゃるのを見た時、 づくめの衣裳をした、もう大人になった女の方があったの。 セエラは一人ごとのようにいいました。 お嬢様はちょうど、その宮、様そっくりなのだもの。」 私はその女の人を思い出した

> りたいなアって。宮シ様になったら、どんな気持でしょう。 せんでした。 した。が、相変らず、セエラが何をいっているのだか判りま っともうじき、宮が様になったつもりを始めるのでしょう。」 「私、時々こんなことを考えたことがあるわ。私も宮、様にな ベッキイは眼をお皿のようにして、セエラに見とれていま セエラは、じき我にかえって、ベッキイに問い

う。 」 「ベッキイ、 あなたこの間、 私のお話を聞いてい たんでしょ

かけました。

聞かずにいられなかったの。」 あのお話、あんまり面白くって、私 私、 '聞いてました。' | ベッキイはちょっとまたどぎまぎしました。 聞いたりしちゃアいけないと思ったんだけど、でも、 聞くまいと思っても、

きたくない?」 たい人に話してあげたいものでしょう? あの話のつづき聞

「私も、

あなたに聞いてもらいたかったのよ。

とを入れるのよ。」 話よ。それに私、繰り返して話すたびに、何かしら新しいこ いて、少しずつお話してあげるわ。かなり長くて、綺麗なお からお掃除に来る時間を教えて下されば、私その時お部屋に つけた髪のことや、みんな聞かして下さるのですって?」 「私にも聞かして下さるって? 「でも、今日はもう時間がないから駄目じゃアない? 王子様のことや、白い人魚の子のことや、お星様の飾りを あのお嬢様がたのように?

キイではなくなりました。彼女のポケットには、余分にもら セエラの部屋を出たベッキイは、今までの可哀そうなベッ

-21-

誰だって聞き

ベッキイが出て行ったあと、セエラは、テエブルの端に腰ベッキイを養い暖めてくれたものは、もちろんセエラでした。お菓子や火ばかりではありません。お菓子でも火でもなく、かそうでした。彼女のお腹を梵し、身体を暖めてくれたのは、ったお菓子がありました。いかにも満腹そうです。そして暖

を下し、椅子の上に脚をのせ、脚に肱をついて、それに顎を

ということになるのね。」ということになるのね。」ということになるのと同じだというつもりになろう。は、贈物をするようなものだわ。私は、これから人をよろこは、贈物をするようなものだわ。私は、これから人をよろこは、贈物をするようなものだわ。私は、これから人をよろこは、贈物をするようなものだわ。私は、これから人をよろこは、贈物をするとが出来るんだけどな。宮瀬のつもりになっただそうすると、私は今、ベッキイに一つの贈物をしたばかりだされることは、いろいろあらずると、私は人とうの宮瀬だったら、私は人民に贈物を撒りました。

六 ダイヤモンド鉱山

人が、印度に訪ねてきて、現在採掘中のダイヤモンド鉱山が、に書いてあったのでした。ある日、クルウ大尉の同窓生の一間もの間、寄ると触ると、その話ばかりしていたというほどばかりでなく、学校中の生徒も胸を躍らして、それから何週を躍らすようなことが起りました。セエラ自身胸を躍らしたセエラがベッキイと近づきになってからしばらくの後、心

順調に行けば非常な利益を挙げることになるので、クルウ大

ラビアン・ナイト』を聞いた時のように、耳を、聳てたのでしっぜアン・ナイト』を聞いた時のように、耳を、聳てたので、『アな達は、どんなにお金が儲かるにしても、あまり気にとめずでした。何かほかの事業でしたら、セエラ初め学校の中の少尉もこの事業の仲間入りをしてはどうかと、勧めたのだそう

ました。

・ラヴィニアは、その話をせせら笑って、ジェッシイにいいら中に光っている宝石を掘り出しているのでした。いて見せたりしました。その穴道の中では、黒ん坊が、そこドやロッティに説明するため、地の底の迷園のような道を描ドセエラはそのことで夢中になりました。で、アアミンガア

「セエラさんは、莫迦げたほどのお金持になるのかもしれなお金がありすぎて莫迦げて見えるわ。」なのに、ダイヤモンドの山なんか持ってる人があるとすれば、よ。でも、それだってそんな大きい石じゃアないのよ。それ「私のお母さんは、四百円もするダイヤモンドを持ってるの

「あなた、セエラが嫌いらしいのね。」ゃアないの。」の子は、お金があったって、なくたって、莫迦げた子じ「あの子は、お金があったって、なくたって、莫迦げた子じ

いわね。」

「山がないこするこ、ダイアモノ、はごこから采ってくるりて、私信じられないわ。」「嫌いじゃアないわ。でも、ダイヤモンドの鉱山があるなん「嫌いじゃアないわ。でも、ダイヤモンドの鉱山があるなん

「あなた、ガアトルウドが、何といったとお思いになる?」でしょうね。」ジェッシイはくすくす笑いながらいいました。「山がないとすると、ダイヤモンドはどこから採ってくるの

「知らないわ。 セエラのことなら、もう聞かないでもいいこ

ミンガアドは、宮、様にしては肥りすぎているから駄目だって 「ところが、やっぱりセエラのことなのよ。あの人、この頃宮、様 プリンセスのつもりになれっていうんだそうよ。でも、アア のつもりってのも始めたんですって。アアミンガアドにも、

ぽちときているわ。」 いってるのよ。」 「あの子は、 ほんとに肥っちょね。そして、 セエラは痩せっ

ジェッシイは吹き出しました。

ということが、かんじんなんですって。」 どんなでもかまわないっていうのよ。何を考え、何をするか 「セエラは、そのつもりになるためには、顔とか持物とかは、

思ってるんでしょうよ。これから、セエラを『殿下』と呼ん でやりましょうか。」 「きっとあの人は、自分が乞食であっても、宮、様になれると

開いて、セエラがロッティと一緒に入って来ました。ロッテ いて行くのでした。 ィはまるで小犬のように、 煖炉の前で、ラヴィニアがまだしゃべっている所へ、戸が セエラの行く所へはどこにでもつ

の中に飼っとけばいいじゃないの。いまにまたきっと吠え出 ニアは小声でいいました。「そんなに可愛いなら、自分の部屋 「ほら、セエラが来た。またあのいやな子を伴れて。」ラヴィ

セエラはその時、 ロッティは果して、何程もたたないうちに吠え出しました。 窓のそばでフランス革命の本を、夢中にな

> 持をセエラはいつかアアミンガアドにないしょで話したこと 魔をされると、妙に腹が立ってならない性質でした。その気 本の好きな人は、誰でもそうでしょうが、セエラは読書の邪 夢から覚まされた時には、 って読んでいたのでした。で、ロッティの喚き声を聞いて、 さすがにいやな気持がしました。

私も打ちかえしてやりたくなるの。だから、 つい失礼なことなど口走るといけないから、大急ぎでいろい 「そんな時には、誰かに打たれたような気がするの。すると、 そんな時には、

がありました。

ろの事を思い出さなければならないのよ。」 ロッティははじめ教室の床の上をごり廻ってい たの

ヴィニアがいいました。 「たった今お黙り、泣虫坊主! 早く黙らないか!」と、ラ が、とうとう転んで丸い膝をすりむいたのでした。

セエラちゃアん。」と、ロッティは金切声で喚きました。 「わたい、泣虫じゃない、泣虫じゃアない。セエラちゃアん、

ロッティに、 ジェッシイは、ミンチン先生に聞えると大変だといって、

「五銭玉をあげるから、お黙んなさいね。」といいました。

「五銭玉なんか、欲しかアない!」

「ほうら、ロッティちゃん。セエラに約束したのを忘れたの?」 そこへ、セエラが本を棄てて飛び出てきたのでした。

なたは泣かないってお約束したんじゃアないの。」 「あの人が、わたいを泣虫っていったんだい。」 「でも泣けば、泣虫になるわ。いい子のロッティちゃん、あ

ロッティはその約束は思い出しましたが、それでも泣声を

あげるばかりでした。

んばかしも、ないイ!」 「わたい、お母ちゃんがないイ。わたい、お母ちゃん、 これ

とを忘れたの? お母ちゃんのセエラは、もう要らないの?」 いました。「もう忘れたの? 「いいえ、ありますとも。」と、セエラはにこにこしながらい ロッティはやっと少し笑顔になって、セエラに縋りつきま セエラがあなたのママだってこ

なただけにお話してあげましょう。」 「さ、一緒に窓の所に坐りましょう。そして、小さい声であ

した。

「ほんとにしてくれる? あの、ダイヤモンドのお山のお話、

してくれる?」 それを聞くと、ラヴィニアは

の意地悪の駄々っ子を、打ってやりたいわ。」 「ダイヤモンドの山ですとさ。」と口を出しました。「私、 あ

すものね。」 あなただって、私だって、もう物が解ってもいい年頃なんで のなんかいやだわ。打ってやりたいけど、打つのはよすわ。 ない以上、ラヴィニアまで愛すわけにはいきませんでした。 「あなたをこそ打ってあげたいわ。だけど、私あなたを打つ セエラはいきなり立ち上りました。セエラとても天使では

した。

達の学校も今は有名なものですね。」 すものね。ミンチン先生は、宮、様を生徒にお持ちだから、 すものね。少くとも二人のうちの一人はそうなんでございま 「さようでございますよ、殿下。私共は宮、様なんでございま ラヴィニアは、えたりとそこへつけこみました。 私

> 宮、様のように立派な振舞が出来るかもしれないでしょう。」になったつもりでいるのよ。宮、様のつもりになれば、自然 じっと立っていました。口を開いた時、セエラの声はもう落 で、今話に出た宮が様というのは、どんな宮が様なのかそれを らです。少女達は、実をいうと、皆宮、様が好きだったのです。 周囲の人達が、何かセエラの方に味方しているようだったか 付いて、しっかりしていました。「仰しゃる通り私は、時々宮、様 らないと彼女は思いました。セエラは手を垂れて、しばらく かりにも宮、様と呼ばれるものが、怒りに駆られたりしてはな ちそうでしたが、セエラはやっとのことで怒を耐えました。 り、耳が鳴るのを覚えました。彼女は今にもラヴィニアを打 ど学校中の生徒の前で、嘲ったのでした。セエラは顔がほて れたくないつもりでした。それを、ラヴィニアは今、ほとん もりの中で、一番大切なものでした。大切なだけ、人に知ら もっと詳しく知ろうとして、セエラのそばへ寄り集って来ま エラに何と答えていいかわかりませんでした。というのは、 今までにもよくそんな事がありましたが、ラヴィニアはセ 宮様のつもりになる事は、セエラにとって、たくさんのつ

が、それも奇抜なものではありませんでした。 「あああ、じゃア、あなたが玉座に上る時には、 ラヴィニアはやっと一言、いうべきことを考え出しました。 私達のこと

「忘れるものですか。」

もお忘れにならないでね。」

組んで出て行くのを、黙って見ていました。 セエラはそれだけいうと、ラヴィニアがジェッシイと腕を

た。『宮〉様、宮〉様』というと、この塾が何か貴族の学校のよ史は、生徒の父兄が見えた時、幾度も『宮〉様』の話をしまし『宮〉様』と呼ぶようになりました。それを聞いたミンチン女エラの好きな少女達は、セエラへの愛のしるしに、セエラをりたい時に限って、セエラを『宮〉様』といいました。またセキれ以来、セエラを嫉んでいる少女達は、何か辱しめてや

うわ。」

の部屋に帰る時、ベッキイはいいました。はかりでした。セエラからお菓子をもらって、屋根裏の自分ミンチン女史や、アメリア嬢に隠れて、セエラと親しくなるいものはないと思いました。彼女はいつかの薄霧の日以来、ベッキイは、セエラを『プリンセス』と呼ぶほどふさわし

うに、お上品に見えるだろうと思ったからでした。

うっかりパン屑なんかと一緒に置いとくと、鼠が出てきて、「このお菓子、気を付けて食べないと大変なのよ、お嬢様。

食べてしまうのよ。」

飛び越えたりされると、いやですけど。」のさいけど、慣れれば「雪」しいとも思わないわ。ただ枕の上を鼠や、廿日鼠がたくさんいるわ。ちょろちょろ出て来て、う「どっさりいますよ、お嬢様。」ベッキイは平気でした。「大「鼠が?」セエラは怖くなりました。「あそこに、鼠がいるの?」

は、鼠の方がよっぽどましだわ。」いろんな事に慣れなけりゃアなりませんよ。油虫なんかより「何だって少し慣れれば平気になるのよ。小使娘に生れると、

もしれないけど、油虫となんて、とても仲よくなれないと思「私もそう思うわ。鼠となら、時がたてばお友達になれるか

には、セエラはいいものを見付けてきたと思いました。ベッった食物を探し歩きました。初めて肉饅頭を買って帰った時た。セエラはよくベッキイに与えるために、量のない何か変それからベッキイのポケットに何かを入れてやるのが常でしことがありました。そんな時には、セエラはちょっと話して、時とすると、ベッキイはセエラの部屋に五分といられない

らないかもしれませんけど。」お腹がすいてしまって――お嬢様なんかには、おわかりになに結構ですわ。カステラなんか、それはおいしいけど、じき「まアお嬢様、これはおいしくて、お腹がふくれて、ほんと

キイはそれを見ると眼を輝かせて、

いでした。
いでした。
いでした。
などにいくらいじめられても、午後にセエラの顔さえ見る
と思うと、辛くはありませんでした。セエラの部屋へ行け
した。石炭函もそんなに重いとは思わなくなりました。料理
お腹がすいたり、疲れはてたりするようなことはなくなりま
が、ボロニア腸・詰などでした。で今はベッキイも、

いありませんでした。手紙には、こう書いてありました。しいのでした。ダイヤモンド鉱山の仕事が忙しすぎるのに違が、セエラにはわかりました。父は身体があまりよくないらような子供らしい元気に充ちて書いたのではないということから一通の手紙が届きました。手紙を見ると、父がいつものセエラが十一歳のお誕生日を迎える二三週間前、印度の父

ばにいてくれたら、きっと何かよい忠告をしてくれるにちがいたかと思うと、いやな夢ばかりだ。私の小さい奥さんがそ中まで寝られないで、よろよろ歩き廻っている。やっと寝つ字や、書類はひどく私を苦しめる。熱があるせいだろう、夜「セエラよ、お父さんは、知っての通り事務家ではない。数

さな奥様』と呼んでいたのでした。(セエラはませた様子をしていたので、父はよく戯‐談に『小いないと思う。きっと何かいってくれるだろうねエ。」

した。それに出したセエラの返事は、なかなかふるったもの父はセエラに、人形の贈物は好ましいかどうかと訊ねて来まえたのでした。その人形の衣裳といったら大したものでした。父はセエラの誕生日のため、パリイに新しい人形をあつら

でした。

人形は、 ん。 りませんもの。 さる『最後 う題の詩でも作りたいのですが、でも、私には詩は書けませ がきっと大騒ぎなさるでしょう。人形のきらいな子なんてあ んなお人形も、エミリイの代りにはなりません。が、 ジや、シェイクスピアのように美しくは聞えないのです。ど しか出来ませんでした。 いろいろ考えさせられます。 で生きていられないだろうと思い 「私は、 幾度も書いてみたのですが、吹き出すようなものば 最後のお人形となるでしょう。 だんだん年をとってきたので、 のお人形』は十分大事にするつもりです。 もっとも十五くらいの方達は、 詠んでみても、 出来るなら『最後の人形』とい ます。だから、今度戴くお そう思うと、何だか またお ワッツや、 もう大きく 人形を戴くま コル 今度下 かり IJ ッ

をよむと、幾十日目かで思わず笑い出しました。ょうど割れそうな頭痛に苦しめられていたのでしたが、手紙の度のバンガロウにこの手紙の着いた時、クルウ大尉はちいでですが、その方達だって、好きでないわけはないのです。」

なものでもあげる。」まきついてくるとしたら、そのためには何でもあげる。どん行けるようにして下さい。たった今、あの子の腕が私の首に仕事がひとりでに片付いて、私が自由にあの子の所へ飛んで「あの子は一年ごとに面白くなってくる。神様、どうかこの「あの子は一年ごとに面白くなってくる。神様、どうかこの

の氏に引いて、など、これにのについでいた。 で、ミンチン先生のお部屋で御馳走があるはずでした。朝の中日が来ると学校の中は妙にそわそわとしておりました。朝の中で、ミンチン先生のお部屋で御馳走があるはずでした。その贈物の函は、飾った教室で、皆の目の前で開けられ、その後贈物の函は、飾った教室で、皆の目の前で開けられ、その後

いう字の形に並んでささっていました。 美しくもない赤フランネルに、黒いピンが『お目出度う』といました。そっとといてみると、中は針さしでした。あまりした。誰から贈られたのだか、セエラにはたいていわかってもの紙に包んだ、小さなふくれ上ったものが置いてありまるの朝、セエラが居間に入って行くと、テエブルの上に、

いな文字で、『ミス・アメリア・ミンチン』と書いてありましは何だか狐につままれたような気がしました。名刺にはきれが、針さしの下に着けてある名刺を読んだ時には、セエラ何だか悲しいような気がするわ。」

つ

たから、

お人形となんか遊ばないというような顔をしてお

た。

「アメリアさんですって? そんなはずはないわ。」

そっと押して、ベッキイが顔を出しました。 セエラが名刺を見ながら、そういっているところへ、 扉』を

「それ、お気に入って? お嬢様

た何から何まで自分で作って下すったのね。」 「気に入らないはずがあるものですか。ベッキイさん、 あな

した。眼はうれしさのあまり潤んでいました。 ベッキイは神経的に、しかしうれしそうに、 鼻先で笑いま

お嬢様。それ、私塵箱から拾って来たんだけど、いけなかっ 嬢様はきっとそれを、繻子の地へダイヤモンドのピンがささ てあげたのよ。」 ないと思ったもんだから――それで、アメリアさんのをつけ なんて持ってないし、名刺がなくちゃアほんとの贈物になら たかしら? アメリアさんが棄てた名刺なの。わたし、名刺 のつもりでこさえていたのよ。それから、その名刺はねえ、 ったつもりになって下さると思ったから。 たいと思って、幾晩も幾晩もかかってこさえたんですの。お 「フランネルの古切なんですけどね、お嬢様に何かさし上げ 。わたしだって、そ

セエラはベッキイに飛びついて、ひしと彼女を抱きしめま なぜか、 妙に喉のつまる気がしました。

だくような贈物でもないのに。 「ベッキイちゃん。」セエラは一種変った笑い方をしました。 「私、ベッキイちゃんが大好きよ。それはそれは好き!」 もったいないわ、 あの、 お嬢様。 そんなにしていた あのフランネルは

七 その後のダイヤモンド鉱

贈物の箱を持ってついてきました。 りした前掛を掛け、 ました。次は第二の贈物の箱を持った女中、それからさっぱ セエラのうしろには、『最後の人形』の箱を持った。僕が続き かれ、先頭に立って、柊で飾られた教室に入って行きました。 お誕生日の午後、セエラは着飾ったミンチン先生に手を引 新しい帽子を被ったベッキイが、やはり

って、 なく気はずかしくなるのでした。ミンチン先生は 少女達は肱をつきあいました。小さい少女達はただ嬉しそう た。セエラがぎょうぎょうしく教室に入って行くと、上級の 呼んで、自分と一緒に行列の先頭に立てと仰しゃったのでし のでしたが、ミンチン先生はわざわざセエラを自分の部屋に にざわざわいいはじめました。それを見ると、セエラは何と 「皆さん、静かになさい。」と一応注意してから、僕、莲に向 セエラはほんとうは、そんな仰。山な真似はしたくなかった

ヴィニアやジェッシイはくすくす笑い出しました。 るところでしたので、ミンチン先生の尖った声を聞 ら、ベッキイ!」と急にきびしい口調でいいました。ベッキ っくりして一種滑稽なお辞儀をしました。それを見ると、 イはちょうどロッティと眼を見合せながら、にやにやしてい なさい。エムマ、お前のは椅子の上にお置きなさい。それ 「ジェームス、その箱をテエブルの上に置いて、 |傍見なんかしてちゃアいけません。その箱を下に置くんで 蓋をお開 く と、

すよ。それがすんだら、お前達は向うへ行くんですよ。」

包紙の皺の間に、透いて見えました。上の箱の方へ首を伸しました。青繻子で出来た何かが、薄い一僕と女中が退いてしまうと、ベッキイは思わずテエブルの

キイさんだけは、もうちょっとの間、ここにいてもいいでご「あの、ミンチン先生。」とセエラは突然いいました。「ベッ

「ベッキイなんかを、どうしてここに置くのです。」

ざいましょう?」

って、私達と同じ小さい女の子なのですもの。」「でも、あの娘だって贈物を見たいでしょうから。あの娘だ

――あなた方のようなお嬢さんとは身分が違います。」「まア、セエラさん、ベッキイは下女ですよ。下女なんて

ば、小使娘などというものは、石炭を運んだり、火をおこし比べて考えてみた事はありませんでした。女史の考えに従え、ミンチン女史は、今までに一度も、ベッキイをセエラ達と

たりする機械でしかなかったのでした。

娘をよろこばしてやって下さいませんか。」 今日は私のお誕生日ですから、私のお願いをかなえて、あの「でも私、ベッキイだって、私と同じ女の子だと思います。

セエラさんにお礼を仰しゃい。」「じゃア、今日は特別に許してあげましょう。レベカ、

お 前

忍び笑いをしました。

思うようにお礼の言葉もいえませんのでした。れますと、ひょこひょこ出てきてお辞儀をしました。彼女は前掛の縁をいじくっていましたが、ミンチン女史にそういわこの話の間、ベッキイは、部屋の片隅にしりごみしながら、

「ほんとに、どうも、お嬢様。もううれしくって、私はお人

れから、先生、ありがとうございます。」 さいます。そ形が見たくてたまらなかったの。ありがとうございます。そ

していいました。 「あっちの隅に立ってお出で。」ミンチン先生は出口の方をさ

な隅にでも居残ることを許されたのは、台所で胸をわくわくべッキイはにやにや笑いながらその隅へ退きました。どん

「あんまり皆さんのそばに寄っちゃアいけないよ。」

御存じの通り、セエラさんは今日十一歳になられました。」「皆さんがたにちょっと申し上げておきたいことがあります。ン先生はやがて一ツ咳払いをして、そうしていいました。させているより、どんなにいいかしれませんでした。ミンチな隅にでも居残ることを許されたのは、台所で胸をわくわく

「ひいきのセエラ嬢だ。」と、ラヴィニアがそっと囁きました。

「ダイヤモンド鉱山のことか。」とジェッシイは小声でいって、す。その時が来たら、セエラさんは、世の中のためになるよんはもう少し大きくなると、非常な財産を相続なさるからでお誕生日とは、少し意味が違います。というのは、セエラさるでしょう。が、セエラさんのお誕生日は、それらの方々の「あなたがたの中にも、もう十一になられた方が五六人はあ

んて、生意気なことだとは解っていましたが。――いうような気持になりました。子供のくせに、大人を憎むなていると知ると、私はあの先生が好きだったためしはないとくわっとして来るのを覚えました。先生がお金のことを話しでしたが、青鼠色の眼でじっと先生を見ていると、何となくもエラは先生のいうことを聞いていたわけではありません

「クルウ大尉が、セエラさんを印度から伴れて来て、私に預

立ち上って、 立ち上って、 立ち上って、 立ち上って、 立ち上って、 立ち上って、 立ち上って、 このよががよいです。 がよりません。 で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にこうお答え申し上げたのでなければなりますまい。』と。 今セエラさんは、学校中で一番よくお出来によると で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にとうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にとうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にとうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私のおさいまで、まっとうればなりません。 で、私は大尉にとうお答え申し上げたのです。『私の教す。』で、私は大尉にこうお答え申し上げたのです。『私のお行儀は、学校中で一番よくお出来に、本は、おは、おは、おは、大尉はというに、いっせいに、立ちに、いっせいに、 立ち上って、

しました。もじもじしていましたが、やがて裾をつまんで、優雅な礼をいいながら高く飛び上ったほどでした。セエラは羞しそうに「セエラさん、ありがとう。」といいました。ロッティなどは、

「皆さん、ようこそお出で下さいました。」

をたてましたね。セエラさんが嫉ましいのなら嫉ましいで、とそっくりです。ラヴィニアさん、今あなたは「鼾のような声た。「まるで宮」様が人民から『万歳』をあびせかけられた時「セエラさん、よく出来ました。」とミンチン先生は褒めまし

さんは何でも好きなことをしてお遊びなさい。」もう少し上品に、嫉ましさを表したらいいでしょう。さ、皆

ました。セエラもうれしそうに、箱の一つを覗きました。解かれたように、椅子から飛び出して、箱の周囲に駈け集り先生の背後に扉が閉されるや否や、少女達はまるで呪文を

「これは、きっと本よ。」

すると、アアミンガアドは

「でも、私は本が大好きなのよ。」ちっとも違わないのね。そんなもの開けるのおよしなさいよ。」「あなたのパパも、お誕生日に本を下さるの? 私のパパと

『最後の人形』は実に見事なものでした。少女達はそれを見

「ロッティと大してちがわないくらいね。」ると、声をあげ、息もつまるほど喜びました。

した。 いわれてロッティは手を叩き、笑いこけながら踊り廻りまーロッラッと対してだだれたしくらしれ」

ヴィニアまでいいました。「外套には貂の毛皮がついている「まるでお芝居にでも行くように盛装しているのね。」と、ラ

は前へ出てきました。「あら、オペラ・グラスまで持っててよ。」とアアミンガアド

「トランクもあるわ。開けてみましょうよ。」

踏服、散歩服、訪問服、帽子や、お茶時の服や、扇などが、ペルシャ頭巾の入った宝石函、長い海獺のマッフや手套、舞た。たとえばレエスの衿が飾や、絹の靴下、それから首飾や、一つはずされるごとに、いろいろの珍しいものが出てきましてエラは床に坐って、トランクの鍵を外しました。懸子が

-29-

あとからあとからと出てくるのでした。

セエラは無心にほほえんでいる人形に、大型の黑天鵞絨の

るのかもしれないわね。皆さんにほめられて、得意になって「ことによると、このお人形には私達のいっていることが解帽子をかぶせてやりながら、こういいました。

すると、ラヴィニアは大人ぶっていいました。

いるのかもしれないわね。」

「そりゃアそうよ。私空想ほど面白いものはないと思うわ。「あなたは、いつもありもせぬことばかり考えているのね。」

ものよ。」ていると、ほんとうにその通りになってくるような気がする空想はまるで妖精のようなものよ。何かを一生懸命に空想し

たりしていられるでしょうかね。」るとしたら、それでもあなたは、空想したり、つもりになっよ。でも、万一あなたが乞食になって屋根裏に住むようにな「あなたは何でも持っているから、何を空想しようと御勝手

辛いでしょうねえ。」になったり出来ないことはないと思うわ。でも、辛いことは、「私きっと出来ると思うわ。乞食だって空想したり、つもり

いました。とで思い返して、ほんとうに不思議なとたんだったとよく思とで思い返して、ほんとうに不思議なとたんだったとよく思くのとたんに、アメリア嬢が入って来ました。セエラはあ

御馳走を食べてらっしゃい。その間に姉は、この教室でバアらないことがあるそうですから、あなたがたは客間に行って、らしって、ミンチン先生とお二人きりで御相談なさらねばな「セエラさん、あなたのお父様の代理人のバアロウさんがい

ロウさんとお話を済ますでしょうから。」

ともに教室に残されていました。た。あとには、あの『最後の人形』だけが、〝繋〟しい衣裳とを並ばせ、セエラを先頭に立てて、客間の方へ出て行きましる脚走と聞いて、皆は眼を光らせました。アメリア嬢は皆

しました。

で外にするのを聞き、震え上って、テエブルの下に身を隠て見ている時でした。ベッキイはミンチン女史の声が、戸のベッキイがそっとマフを摘み上げ、それから外套を手に取って、美しい人形や、衣裳を眺め廻しておりました。ちょうどましたので、悪いこととは知りながら、ちょっとあとに残っ、ベッキイだけは、御馳走をいただくことも出来ないと思い

いらした顔つきで、この小柄な紳士を見つめました。ン先生も確かに落ちついていたとはいえません。彼女はいら入ってきました。紳士は何か落ちつかない風でした。ミンチミンチン女史は、骨張った体つきの、小柄な紳士を伴れて

「バアロウさん、どうかお掛け下さい。」

るばかりでした。ことは、一向無頓着に、ただ真直に立って、彼を見返していに、それらのものを見詰めました。『最後の人形』は、そんないるようでした。彼は眼鏡をかけ直し、何か咎めだてるようこらに散らばっている人形や、人形の小道具に眼を惹かれてバアロウ氏は、すぐには腰を下しませんでした。氏は、そバアロウ氏は、すぐには腰を下しませんでした。氏は、そ

ていたとみえるな。」もパリイ製だからな。あの若僧は、めちゃくちゃに金を使っ「千円はするだろうな。皆高価な材料で出来ているし、しか

-30-

とをいう権利はないはずです。ミンチン女史は、セエラとセ ら代理人でも、クルウ大尉のすることに、さし出がましいこ ミンチン女史はむかむかとしました。バアロウ氏は、いく

なクルウ大尉のことを、悪くいわれたくなかったのでした。 エラの学校のために、惜しげなくお金を出してくれる、大事 「バアロウさん、失礼ですが、どうして、そんなことを仰し

ゃるのですか。」 「十一になる子供の誕生祝いに、こんなものを贈るなんて、

まったく気違いじみているじゃアありませんか。」

せんか。ダイヤモンド鉱山だけでも――」 「しかし、クルウ大尉は財産家でいらっしゃるじゃアありま

「ダイヤモンド鉱山なんて、そんなもの、 バアロウ氏は、くるりと女史の方へ向き直りました。

そんなものは、あったためしもない。」 ミンチン女史は、たちまち椅子から立ち上りました。

あるものですか。

「え? 何と仰しゃいます?」

バアロウ氏は、意地悪く答えました。

す。 「とにかく、そんなものは、なかった方がよかったくらいで

「なかった方がよかったって?」

する場合が多いものです。事業に明るくない人が、親友の手 か素敵な夢が消えて行くような気がしました。 「ダイヤモンド鉱山などというものは、富よりも破産を意味 ミンチン女史は、椅子の背をしかと掴んで叫びました。何

の中にまるめこまれて、その親友の鉱山に投資するなんて、

というような気がしました。

るのですね。つまり、

「じゃア、あなたは、

大尉が一文も残さずに死んだと仰

セエラには財産がない。

あの娘は乞食

大間違いです。死んだクルウ大尉にしても――」

「死んだ大尉ですって? 今度は、ミンチン女史が皆までいわせませんでした。 まさか、 あなたはクルウ大尉が

「大尉は亡くなられました。事業が面白くないところへ、マ

ラリヤ熱に襲われて亡くなられたのです。」

りしてしまいました。 ミンチン女史は、どかりと腰を落しました。女史はぼんや

産のためにも、悩まれたようですな。」 「ダイヤモンド鉱山がです。大尉はその親友のためにも、

破

「面白くなかったと申すのは?」

「破産ですって?」

られてしまったのです。女史は何か盗まれたような気がし の生徒と、お自慢の出資者が、一度に模範学校から、浚い ました。こんなひどい目にあったのは初めてでした。お自慢 を口走りながら――が、その娘のためには、一文も残さずに。」 違いありません。大尉は昏々と死んで行きました。娘のこと もう熱病にとりつかれていました。おそろしい打撃だったに ぎるくらいだったのでしたが、その親友がダイヤモンド鉱山 した。クルウ大尉も、セエラも、 でしまったのでした。親友が逃げたと聞いた時には、大尉は に夢中になって、 「一文なしになられたのです。大尉は若いくせに金がありす ミンチン先生は、それでやっと事情をのみこむことが出来 大尉の金まですっかりその事業に注ぎこん バアロウ氏も、

されたのだと仰しゃるのですね。」 だ。お金持になるどころか、食いつぶしとして、 私の手に残

で自分の責任を果してしまった方がいいと思いました。 バアロウ氏は、抜目のない事務家でしたので、もうここら

残されたのにも違いございません。他に身よりというものは 「乞食として残されたに違いありません。またあなたの手に

ないようですからな。」

ら飛び出して、今たけなわな祝、宴をやめさせてしまおうと思 ミンチン女史は急に歩き出しました。女史は今にも部屋か

馳走をしているのだ。」 っているようでした。 「莫迦にしている。あの子は今私の部屋で、 私のお金で、 御

れも、 ウ大尉は、我々への支払いもせずに死んでしまいました。そ 「そりゃアその通りですな。」バアロウ氏は平気でいいました。 「我々代理人は、もう何の支払いも出来ませんからな。クル かなりな額だったのです。」

思わないことでした。 た。こんな災難がふりかかろうとは、 ミンチン女史は、 ますます不機嫌になって、ふり返りまし 今の今までは、夢にも

ってからこっちは、私がみんなその費用を立てかえているの 小馬も持っているし、女中もつけてある。この前の送金があ いわれていたのですからね。あの子は馬車も持っているし、 たのです。あの子のためなら、 々しい人形の代も、衣裳の代も、皆この私が立てかえておい と払ってくれることを、信じきっていたのです。あの莫迦々 「私は、あの娘のために、 どんなにお金を使ったって、きっ 何でも買ってやってくれ、 لح

アロウ氏は、それ以上ミンチン女史の愚痴話を聞こうと

ですよ。」

しませんでした。 「これ以上は、もうお支払いなさらんがいいでしょう。 あの

御令嬢に贈物をなさる思召しなら別ですがな。」

だというように、 「ですが、私は、この際どうしたらいいのでしょう。」 女史は、バアロウ氏に処置をつけてもらうのがあたりまえ 訊ねました。

たたんで、ポケットに入れました。「クルウ大尉は死んでしま いて責任のあるものがあるとすれば、あなたぐらいなもので ったと。子供は食いつぶしになってしまったと。 「どうするも、こうするもないですな。」バアロウ氏は眼鏡を あの娘につ

断然おことわりします。」 「何で、私に責任があると仰しゃるのです。 そんな責任は、 -32-

すな。」

ウ氏は立ちかけて、気のない声でいいました。 ミンチン女史は、 立腹のあまり蒼白くなりました。バアロ

私はこの際どうすることも出来ません。こんなことになって、 お気の毒とは存じておりますが。」 「あなたが、責任をお持ちになろうと、お持ちになるまいと、

ですよ。私は泥棒にあったのだ、 「それで、私にあの娘をおしつけたおつもりなら、大間違い 欺されたんだ。 あの娘は、

おもてに追い出してやるばかりだ。」 バアロウ氏は、平然と戸口に立っていいました。

はずはありませんからね。この学校に関して悪い評判がたつ 「私なら、そんなことはしませんな。世間の眼によく見える

ばかりでしょうからね。それよりもいっそ、あの子を養って 大きくなりさえすれば、 おいて、役に立てたらいかがです。なかなか利口な子だから、 「大きくならないうちにだって、うんとしぼりとってやるか あの子からうんとしぼれますぞ。」

「確かにしぼれるでしょう。では、さようなら。」

ا ک

閉された戸を睨んでおりました。男のいったことはほんとう お金は、 になってしまったのです。今までセエラのために立てかえた す。今までー だと、彼女は思いました。もうどうすることも出来ないので て去りました。ミンチン女史は、しばらく突っ立ったまま、 バアロウ氏は、皮肉に笑ってお辞儀をしながら、戸を閉め もう戻してもらう術もないのです。 番大事な生徒だったセエラは、いきなり乞食娘

う歓声が聞えて来ました。この宴会だけでも中止して、その 女史がその方へ立ちかけたとたんに、アメリア嬢が戸を開け ために使ったお金を取り戻そうと、女史は思いました。が、 て入って来ました。アメリア嬢は姉のただならぬ様子を見る ふと、宴会場にあてたミンチン女史の部屋から、わっとい 思わずあとじさりしました。

「姉さん、どうしたの?」

「セエラ・クルウはどこにいる?」

姉は、咬みつくような声でいいました。

るのにきまってますわ。」 「セエラ? セエラは子供達と一緒に、 姉さんのお部屋にい

あの子は、 黒い服を持ってるかい?」

> かしら、というんだよ。」 「たいていの色の服は持ってるようだけど、 黒いのはあった

アメリア嬢は真蒼になりました。

が短すぎるわ。 「黒いのはないでしょう。 古い黒天鵞絨の服で、あの子が小さい時着て あ、あるわ。 でも、あれはもう丈

脱いで、短くても何でも、その黒い

服を着ろって。

「あの子にそういっておくれ、早くその大それた桃色の服を

いたのですわ。」

どころの騒ぎじゃアないんだから。」 「まア姉さん、何事が起きたの?」

あの気まぐれな我儘娘は、私の居候になったわけさ。 「クルウ大尉が死んだのさ。一文なしで死んじゃったのだよ。

アメリア嬢は、

手近の椅子にどかりと腰を下しました。

ければ。すぐ着物をきかえろっていっておくれ。」 だ。だから、早くあいつのお誕生祝いなんか止めてしまわな てしまったんだよ。もう一銭だって返しちゃアもらえないん 「莫迦々々しい。私はあの子のために何千円ってお金を使っ

「たった今行って話せといってるんだよ。何だい、 「あの、あたし、もう少したってからじゃアいけません?」 鵞鳥みた

いな眼つきをしてさ。早くおいでったら。」

子供達のよろこんでいる最中に出て行って、その会の主人公 けられるのだと、自分でも思っていたくらいでした。でも、 た。鵞鳥みたいな人間だからこそ、 のためちんちくりんの黒い服に着かえなければいけない、 であるセエラに、 アメリア嬢は、鵞鳥と呼ばれることには慣れきっていまし お前はもう乞食になり下ったのだ、父の喪 いやなことばかりいいつ

いうのは、何だかいやでなりませんでした。

とを考えなければならないのでした。とを考えなければならないのでした。妹が出て行ってしまうと、ボのいる部屋から出て行きました。妹が出て行ってしまうと、ボのいる部屋から出て行きました。妹が出て行ってしまうと、アメリア嬢は眼の赤くなるほど、学咋でこすると、黙ってとを考えなければならないのでした。

るかのように、したい放題にふるまっていたのだ。」「ふん、セエラ女王殿下か。あいつは、まるで女王ででもあ

ず一歩身をひきました。かげから、急に微『戯の声が響き出て来るのに吃驚して、思わかげから、急に微『戯の声が響き出て来るのに吃驚して、思わエブルの『傍』を掠め過ぎようとしました。と、テエブル掛のそういいながら、女史は腹立たしげに、部屋の隅にあるテ

「どうしたというんだろう。」

エブル掛を捲り上げました。 すすり泣く声がまた聞えたので、女史は身をかがめて、テ

で。」「こんなところで、立ち聞きしていたな。さっさと出ておい

いらしったので、私吃驚して、この中に隠れてしまったんでも、私、お人形を見ていたんですの。そこへ、奥様が入って「あのう、御免下さい。私悪いとは思ったのですけれど。で出すまいと耐えていたので、真紅な顔をしていました。

「じゃアお前は、そこで「初っから立ち聞きをしていたわけだ」。

ね。」

ともなかったんですけど、でも、聞えたんだから仕方ありまここに隠れていたんです。立ち聞きなんてするつもり、ちっのですけど、とても駄目だと思いましたから、仕方なしに、ん。見つからずに逃げ出せるものなら、逃げ出そうと思った「いいえ、奥様。立ち聞きするつもりなんぞありゃアしませ

れません。わたし、あのセエラ様がお可哀そうで、お可哀そ「お、お、奥様。わたし叱られると知っても申さずにはいら忘れたかのように、わっと泣き出しました。ベッキイは、おそろしい奥様が目の前にいるということも

せん。」

「出て行きなさい。」うで――」

のに。」

「ええ、まいります。でも、ちょっとわたし奥様に伺いたい「ええ、まいります。でも、ちょったがあるんでございますわね。宮、様とさえいわれてらしったら。」ベッキイは更にすすりあげながら、「奥様、セエラ様は、ら、わたしにお勝手の御用がすんだ後で、あの方の御用をしら、わたしにお勝手の御用がすんだ後で、あの方の御用をしら、わたしにお勝手の御用がすんだ後で、あんなに御不自ことがあるんでございますの。セエラ様は、あんなに御不自のに。」

腹を立てました、小使娘の分際で、セエラの肩を持つなんて怪ミンチン先生はベッキイにこういわれて、なぜかよけいに

たような気がしました。先生はがたがたと床を踏み鳴しなが セエラなんかちっとも可愛くなかったのだという事実を悟っ しからん。——するとミンチン先生は、初めてはっきりと、

ばならないのだから。」 の子には自分の用はもちろん、 「あの子の用をしてやることなんて、断じて許さないよ。 ほかの人の用までさせなけ ĥ あ

らいいました。

い出される不幸な宮、様のお話そっくりだわ。」 「まるで、何かのお話の中のようだわ。あの辛い世の中に追 ベッキイは前掛で顔を隠しながら、逃げて行きました。

な、 び迎えられました。その時の先生は、 それから二三時間たつと、セエラはミンチン先生の所に呼 無情な顔をしていました。 今までにないほど冷か

れないはずですものね。」

もうその時セエラには、あのお誕生日の宴会は夢としか あるいはずっと昔生きていた、 誰か別の少女の生涯 に起

ったこととしか、思えませんでした。

付けられてしまいました。先生はじめ生徒達は、平常の着物 いました。 って、ひそひそと囁き合ったり、昂奮して話し合ったりして に着かえてしまいました。少女達は教室のそこここにかたま その間に教室や、先生の居間はすっかりいつものように片

メリア嬢はこういいました。 ミンチン女史が妹に、セエラを呼んで来いといった時、ア

「お姉さん、あの子はずいぶん変ってる子ね。この前クルウ

えだ、というような顔をしていました。あの子が何にもいっ 子はまるで生きている以上、こんなことになるのがあたりま セエラは子供達の泣声になどは耳も藉さない風でした。あの ままでしたが、わなわなと顎がふるえ出したと思ったら、ふ 顔色は真蒼になって来ました。そうしてちょっとの間立った をいってきかすと、あの子はただ黙って、 大尉が印度へ発った時もそうでしたが、今度も私が事の次第 て、ふいにあんなことをいわれれば、何とかいわずにはいら てくれないので、私は変な気持になって困りました。誰だっ いました。ほかの子達がかえって泣き出しましたけれども、 いにくるりとうしろを向いて、部屋を飛び出して行ってしま いるんですの。あの子の眼は見る見る大きくなって、そして 私の顔を見つめて

ます。そういう声も自分の声とは思えないほどでしたが、 りになったのよ。」と、自分にいい聞かしていたのは憶えてい とんど夢中でした。ただ彼女は、 には誰にもわかりませんでした。セエラ自身も、その時 度などは椅子の上からじっとセエラを見守っているエミリイ って、「お父様はおなくなりになったのよ。お父様はおなくな の前に立って、狂わしそうにいいました。 セエラが、二階の部屋の中で何をしていたか、 しきりに部屋の中を歩き廻 セエラ以外 はほ

りになったのよ。」 ったの、 「エミリイちゃん、お前わかって? パパがおなくなりにな わかって? パパはね、 遠い遠 い印度で、 おなくな

は蒼白く、 セエラが呼ばれてミンチン先生の部屋に来た時、 眼のまわりには黒いくまが出来ていました。セエ 彼女の 顔

-35

我慢していました。さっきの薔薇色の胡蝶とは別人としか思ことを、人に見破られるのがいやなので、きっと口をしめてラは、今まで苦しみぬいたこと、いまだに悲しくてならない

われませんでした。

「人形なんか、下にお置きなさい。何のために人形なんか持りと抱いていました。エミリイも何か黒いものを着ていまがリボンがなかったので、短い黒髪が蒼ざめた頬に乱れ落ち、に出たセエラの細い脚が、よけいに細く長く見えました。黒に出たセエラの細い脚が、よけいに細く長く見えました。黒とエラはマリエットの助けも借りず、古い天鵞絨の服を着

す。お父様が私に下すったのですから。」「下に置くのなんかいやです。このお人形だけは私のものでってきたのです?」

るだけ、何か気がとがめるのでしょう。た。殊に今日は、酷い人間らしくないことをしようとしていか御しがたいような気がして、落ち着いていられませんでしいらして来るのでしたが、今もこうきっぱりいわれると、何ミンチン先生はセエラに何かいわれると、いつも妙にいら

間にならなければならないんだよ。」お前は働かなければ――悪い所を直して、役に立つような人「もうこれからは、人形どころのさわぎじゃアないのだよ。

「もう、アメリアさんから聞いて知っているだろうが、何もも口をきかずに立っていました。 セエラは、大きな眼でミンチン女史を見つめたまま、一言

かも、今まで通りだと思ったら大間違いだよ。」

「お前は乞食なんだ。身よりはないし、世話をしてくれる人「よくわかっています。」

なんて、一人もないのだからね。」

「何をそうじろじろ見てるんだよ。乞食になったってことがり何ともいいませんでした。

やらない限りは、誰もかまってくれるものはないのだよ。」かしてあげようか。お前はみなし子で、私がお慈悲で置いてわからないほど、莫迦でもあるまいにね。もう一度いってき

「わかってます。」

こに置きすてられてあったお誕生祝いのお人形を指していい っ呑みこもうとしているようでした。ミンチン先生は、すぐそセエラは低い声でいいました。何か喉に詰っているものを

「その人形も――その莫迦々々しい人形のお金を払ったのも、ました。

セエラは椅子の方に顔を向けて、「最後の人形、最後の人形」

私なんだ。」

「じゃア、どうか、そのお人形を持ってらしって下さい。私、だ。お前の持ってるものは、何もかも私のものなのだよ。」「最後の人形だって?」まったくだよ、この人形は私のものと、思わず口の中でいいました。

して、自分の力を試してみるのが愉快だったのでした。が、をもう少しは、號ってやったかもしれません。女史は人を支配セエラが喚いたり怯えたりしたら、ミンチン女史はセエラそんなもの要りません。」

「勿体ぶった様子なんかおしでないよ。もう、お前は宮が様じ空しく消えて行ったような気がして、口惜しくなるのでした。セエラの凛とした顔を見、『誇』のある声を聞くと、自分の力が

意外にも、セエラの眼には、ふと輝きが――救いのかげが自分で働いて、自分の口すぎをしなければならないのだよ。」ゃアないのだからね。お前は、もう、ベッキイと同じことさ。

浮んで来ました。

しかアありませんわ。何をさして下さいますの?」 「働かして下さいますの? 働けさえすりゃア、何もそう悲

られると思いますわ。小さい人達は私を好いて下さるし、私「おさらい、させて下さいます?(私、フランス語なら教えだから、小さい人達のおさらいもしてあげられるだろう。」いてあげてもいいと思うのだよ。フランス語もよく出来るののつく子だから、役に立つように心がけるのなら、ここに置「何でも、いいつけられたことをするんだよ。お前はよく気

そのつもりでおいで。じゃア、向うへおいで。」に入らないことでもあったら、すぐ逐い出してしまうから、お台所の手伝いをしたりしなければならないのだよ。私の気さい人達のおさらいをするほか、お前はお使いに行ったり、「人が好いてくれるなんて、莫迦なことをおいいでない。小

も小さい人達が好きですから。」

ます、という気はないのかい?」「お待ち!」と先生はいいました。「私に、ありがとうございことを考えていたのでした。やっと立ち去ろうとしますと、生を見つめていました。幼い心の中で、セエラはいろいろの生ういわれても、セエラはまだちょっとの間、ミンチン先

「何のために?」

セエラは小さい胸を波立てながら、二三歩先生の方に進みてさ。」「私の親切に対してさ。お前に家庭を恵んでやる親切に対し

「先生は、御親切じゃアありません。それに、ここは家庭で出ました。

れを止める術もなく、憤りのあまり石のように立って、セエいいすててセエラは、駈け出しました。ミンチン先生はそ

も何でもありません。

ラを見送るばかりでした。

いました。れるばかりでした。彼女はエミリイをしかと脇に抱きしめてれるばかりでした。彼女はエミリイをしかと脇に抱きしめてセエラは、落ち着いて梯子を登って行きましたが、息はき

いいだろう。」 「この子に口がきけたら――物がいえさえしたら、どんなに ヨー「この子に口がきけたら――物がいえさえしたら、どんなに ヨー

うしろめたくてならないのでした。 な顔をしました。嬢は、姉にいいつけられたことをするのが、ないうちに、アメリア嬢がセエラの部屋から出て来ました。 ないうちに、アメリア嬢がセエラの部屋から出て来ました。 の火に見入りながら、考えられるだけいろいろのことを考え と正っていました。が、まだ彼女が二階へ登りきら の火に見入りながら、考えられるだけいろいろのことを考え

「入っちゃアいけないのですって?」「もう、ここへ入ってはいけないのですよ。」

セエラは一歩あとじさりしました。アメリア嬢は少し紅く

「ここは、もうあなたのお部屋じゃアないのですよ。」といい

「じゃア、私のお部屋は、どこなの?」

るんですよ。」 「今晩からあなたは、屋根裏の、ベッキイのお隣の部屋に寝

でのセエラとは別人になっていました。 セエラは、かねてベッキイから聞いていたので、その部屋でのセエラは、かねてベッキイから聞いていたので、その部屋でのセエラは、かねてベッキイから聞いていたので、その部屋でのセエラは、かねてベッキイから聞いていたので、その部屋でのセエラは、かねてベッキイから聞いていたので、その部屋でのセエラは、かねてベッキイから聞いていたので、その部屋

しました。が、セエラは中に入ると、戸に寄りかかって、そこらを見廻が、セエラは中に入ると、戸に寄りかかって、そこらを見廻を根裏の戸を開けた時には、さすがに侘しい気がしました。

きながら、エミリイの上に自分の顔を伏せて、しばらくじっちの薄汚くなっていて、はげ落ちているどうです。その下に、は、物憂い灰色の空がのぞいているばかりです。その下に、には、物憂い灰色の空がのぞいているばかりです。その下に、には、物憂い灰色の空がのぞいているばかりです。その下に、下しました。セエラは膝の上にエミリイを寝かし、両手で抱まりないにだが、それからこちこちな寝床。階下の部屋には下しました。セエラは膝の上にエミリイを寝かし、明りとりの予診でしました。セエラは膝の上にエミリイを寝かし、明りとりのできだいが低くなっていますし、壁は粗末な白塗です。その白塗も、まったく、これは別な世界です。天井は屋根の傾斜で片方

と坐っていました。

り顔が変っていました。きながら、前掛であまり眼をこすったものですから、すっかイの顔が現れました。ベッキイは、さっきから泣きづめに泣ひかえめに戸を叩く音がして、戸の間に泣き濡れたベッキ

しても笑うことが出来ませんでした。が、ベッキイが心からセエラは、ベッキイに笑ってみせようとしましたが、どうけませんか。」

「お、お、お嬢様、ちょっと、あの、ちょっと入っちゃアい

八 屋根裏にて

が起ったって、どうしたって、宮、様以外のものにはなるもん

「お嬢様は、どんなことが起ったって、やっぱり宮)様よ。何

ですか。」

いていいました。

ることは出来ませんでした。夜もすがらセエラは、子供にしセエラはいつまでも、初めて屋根裏に寝た晩のことを忘れ

慣れぬあたりのものに心を「煩っわされました。 が、それはかえ られぬ夜の闇の中で、 ては深すぎる、狂わしい悲しみにひたされていました。が、 まぎれがなかったら、セエラは悲しみのあまりどうなったか って彼女の気をまぎらしてくれたようなものでした。そんな セエラはそのことを誰にも話しませんでした。また話したと 誰にも解る悲しみではなかったでしょう。セエラは、 ともすると、寝慣れぬ堅い寝床や、

なったのだ。」 わからなかったでしょう。 「パパは、おなくなりになったのだ。パパは、おなくなりに

るじゃアないか。」

なきゃアいけないよ。ほら、

ロッティはもうお茶をこぼして

 فر て走る音を聞いて、思わず床の上に飛び起きました。それか らだなと気づきました。セエラは一二度、鋭い爪が床を掻い つかベッキイから話を聞いていましたので、すぐ鼠のいたず がりがりという音が聞こえて来たことでした。セエラは、 に気味の悪いのは、壁の中や、戸棚のうしろから、きいきい、 何か大声に泣き悲しんでいるようなのに気がつきました。更 どく暗いのに気がつきました。それから、風が屋根の上で、 た後のことでした。寝返りを打っているうちに、そこらがひ した。寝床が堅いと気のついたのは、 寝床に入ってしばらくの間は、そのことばかり考えてい 頭から夜具をかぶって横になりました。 寝てからずいぶんたっ い ま

れました。 朝食堂へ出て見ると、ラヴィニアが、 昨日までセエラの坐

すっかり片付けられ、新入生のためのあたりまえの寝室にさ

ットは翌朝暇を出され

ました。

昨日までセエラのいた部屋は

セエラの生活は、

その日からがらりと変りました。マリエ

達と、小さい方のテエブルに坐って、皆さんがお行儀よく食 べるように、見てあげるんだよ。これからもっと早く出て来 エラにいいました。 っていたところに坐っていました。ミンチン先生は冷かにセ 「セエラ、お前は、お前の用をすぐ始めるんだよ。小さい方

寝

ずお使いにやられたり、皆の残為した用事をいいつけられた して、今まで永いことちやほやされていたこの娘っ子を、 りしました。料理番や、女中までが、ミンチン女史の真似を に用事はふえるばかりでした。フランス語を見てあげるのは、 い気持にこき使うのでした。 一番楽な仕事でしたが、そのほかお天気の悪い時でもかまわ セエラの仕事は、この様にして始まりました。 来る日ごと

ことを、悟らなければなりませんでした。 げてくれるどころか、素直にすればつけあがるだけだという だろう、と思っていました。が、やがて彼女も、 に働いているのだということも、そのうちには解ってくれる こき使う人達の心も、そのうちには桑ぐだろうと思っていま した。自分は、お慈悲を受けているのではなく、食べるため セエラは、初めの一二ヶ月の間は、素直に働いてい 皆が心を柔 れ

史も、 ラなら、 るまで、 うが、何分セエラはまだ子供々々していますので、大きくな セエラが、もう少し大人らしくなっていたら、ミンチン女 ・セエラを大きい子達のフランス語の先生にしたでしょ 女中代りに使った方が得だと思ったのでした。セエ むずかしい用事や、こみいった伝言なども、安心し

いし、ちょっとしたお掃除も、器用にやってのけるのでした。て頼むことが出来ました。お金を払いにやっても間違いはな

セエラは、今はもう勉強どころではありませんでした。楽

を続けるばかりでした。から、古い本を抱えて、人気のない教室へ行って、一人夜学しいことは、何も教わりませんでした。忙しい一日がすんで

なくなるわけだわ。でも、私忘れることなんて出来そうもなこれで、何にも知らないとすれば、ベッキイと選ぶところが「気をつけないと、習ったことまで忘れてしまいそうだわ。

を との関係も妙なものになって来ました。 大りもさせてくれなそうでした。セエラが一日中忙しいので、 との関係も妙なものになって来ました。今までは、何か皇族 との関係も妙なものになったことなんか、忘れられないわ。へンリイハ

わ。まるで人を探るような眼をしてさ。」のような変な眼付で黙って見ていられると、たまらなくなるね。今までだって、あの子好きじゃアなかったけど、この頃でるじゃアないの。あの子は、ますます変人になって来たわヴィニアはひやかしました。「ほんとうにお笑い草ってな顔し「あの子が、ダイヤモンド鉱山を持っていたなんて。」と、ラ

「その通りでございますよ。まったく私は、探るために人をそれを聞くと、セエラはすぐやり返しました。

でそのことを考えて見るんですよ。」見るのですよ。いろいろのことを嗅ぎつけて、そして、あと

たのでした。されていたセエラを苛めるのは、殊にいい気味だと思っていした。ラヴィニアはいつも意地悪で、この間まで学校の誇とおかげで、いやな目に逢うことを避けることが出来たからでそういったわけは、ラヴィニアのすることを見張っていた

ていったことはありませんでした。 でいったことはありませんでした。 をしたりすることは、少しもありませんでした。セエラはどんなに辛いことも、決して口に出した。が、セエラはどんなに辛いことも、決して口に出したがみなし子らしくなって来ますと、食事も台所でとるようたが奴隷のように働きました。だんだん身なりがみすぼらしたいったことは、自分で人に意地悪をしたり、人のすることの邪

でしょう。 たら、セエラの心は寂しさのあまり破れたかもしれなかったたら、セエラの心は寂しさのあまり破れたかもしれなかっは私、戦争の一つだっていうつもりなのだから。」がらいうのでした。「私だって、愚痴なんかいうものか。これが写しは愚痴なんかこぼさない。」セエラは歯をくいしばりな

日の中は二人とも用が多くて、言葉を交す折はほとんどありした。その慰めの気持は、夜ごとに強くなって来るのでした。だと思うと、セエラは何となしに慰められるような気がしまた晩も、壁一つ越した向うには、自分のような少女がいるのその友の一人は、あのベッキイでした。初めて屋根裏に寝

でした。初めての朝、ベッキイはセエラに囁きました。けるとか、暇をつぶすとか思われるので、それも出来ないのませんでした。立ち止ってちょっと話そうとすると、すぐ怠

からね。」さい』だのといってるつもりだけど、口に出すと暇がかかるさい』だのといってるつもりだけど、口に出すと暇がかかる心の中では『どうぞ』だの、『もったいない』だの、『御免なそんなことをいってると、きっと誰かに叱られるからね、私、「私が丁寧なことを言わないでも、気にしないで下さいね。

た。そっと戸を叩いて、何かセエラの用をしに来てくれるのでしいろ手伝ってくれるのでした。夜がくると、ベッキイはまた屋にこっそりと入ってきて、ボタンをはめたり、その他いろーしかし、ベッキイは、夜の明ける前に、きっとセエラの部

いきさつがありました。アドがセエラを慰めに来るまでには、いろいろ思いがけない三人のうちの第二は、アアミンガアドでした。アアミンガ

れない、という質の友達ではありませんでした。だからセエタいう風でした。つまり彼女は、どんな事があっても忘れら争われませんでした。彼女は、ただひたむきにセエラに縋りアドは人なつっこい子でしたが、同時にまた頭の鈍いことも自分の方がずっと年上のような気持でいました。アアミンガづきました。二人はいつも仲よくしていましたが、セエラはセエラはしばらくアアミンガアドのことを忘れていたのに気、セエラの心が、やっと少し新しい生活になじんで来ると、

まで教わっていたのでした。セエラは蒼ざめて、人のちがっに一杯繕で物を持っていました。セエラはもう着物の繕い方んでした。二三日目にやっと見付けた時には、セエラは両手時っていましたので、忘れられるのがあたりまえだったので帰っていましたので、忘れられるのがあたりまえだったのでうも、アアミンガアドのことは自然忘れていたのでした。

「まア、セエラさん、あなただったの!」着て、黒い細い脚をにょきりと出していました。

たような顔をしていました。小さくなった、

おかしな着物を

「ええ。」

セエラは衣類を『堆』く重ねて持ち、落ちないように顎で上

セエラは顔を紅らめました。

を押えていました。セエラにまともに見つめられると、アア

なってしまったのではないか?――アアミンガアドにはそうエラは様子が変ったと同時に、何かまるで知らない女の子に、ミンガアドはよけいどうしていいか判らなくなりました。セ

「まア、あなた、どう?(お丈夫?」も思えるのでした。

「わからないわ。あなた、いかが?」

「あなた――あなた、あの、ほんとにお不幸なの?」っと友達らしいことをいわなければならないと思いました。しくてわけがわからなくなって来ました。で、急に、何かも「私は――私は、おかげ様で、丈夫よ。」アアミンガアドは羞

ラの傷いた心臓は、ちょうど昂ぶっている時でしたので、こその時のセエラのしうちは、よくありませんでした。セエ

-4

いと思いました。 んな物のいいようも知らない人からは、早くのがれた方がい

るの?」 るの? 私が、幸だとお思いにな「じゃア、あなたはどう思うの? 私が、幸だとお思いにな

した。 セエラはそういい残して、さっさと去って行ってしまいま

よけいやりそこなうのが常だったのでした。いつも気のきかない子で、心を籠めて何かしようとすると、アアミンガアドの心ない言葉に腹が立ってならなかったのでは、自分の不幸のため、何もかも忘れてしまっていたので、責むべきではなかったと思うようになりました。ただあの時その後、時がたつにつれて、セエラは、アアミンガアドを

りました。
りました。
時とすると、また目礼さえせずに過ぎることもあ来ませんでした。時には、首だけ下げて挨拶することもありアドで、妙にかたくなってしまって、言葉をかけることも出っは傍を向いてしまいますし、アアミンガアドはアアミンガることが出来ませんでした。ふと行きあったりすると、セエることが出来ませんでした。ふと行きあったりすると、セエそれから五六週間の間、二人は何かに「遮」られていて、近よ

女はいつも悲しそうで、そのくせそわそわしていました。彼アアミンガアドは、ますます勉強が出来なくなりました。彼で、自然二人はほとんど顔も会わさないようになりました。しているんだから、避けるのは造作ないわけだわ。」るべく会わないようにしよう。ミンチン先生は会わせまいと「あの子が、私と口をききたくないのなら、私はあの子にな

る時、そこへ通りかかったジェッシイは、立ち止って、怪訝女はいつも窓のそばに蹲まり、黙って外を見ていました。あ

「アアミンガアドさん、何で泣いてるの?」

そうに訊ねました。

「泣いてなんて、いやしないわ。」

先から落ちたじゃアないの。そら、また。」「泣いてるわよ。大粒の涙が、そら、鼻柱をつたって、鼻の

いいのよ。」 「そう。私なさけないの――でも、かまって下さらない方が

ました。と、自分の部屋の扉の下から、ちらと光の洩れていその晩、セエラはいつもよりも遅く、屋根裏へ登って行きしました。

が蝋燭をつけたとみえる。」「私のほか、誰もあそこへ行くはずはないけど、でも、誰かるのを見付けて、吃驚しました。

いました。のまま紅いショオルにくるまって、壊れた足台の上に坐ってのまま紅いショオルにくるまって、壊れた足台の上に坐って寝室につける燭台の火に違いないのです。その誰かは、寝水光は、セエラがいつも使う台所用の燭台のではなく、生徒が誰かが火をともしたのにちがいありません。しかも、その

ました。「あなた、大変なことになってよ。」「まア、アアミンガアドさん!」セエラは怯えるほど吃驚し

へ歩いて来ました。眼も、鼻も、赤く泣き腫らしていました。すぎる寝室用のスリッパをひっかけて、すり足にセエラの方、アアミンガアドはよろよろと立ち上りました。彼女は大き

の?」の?」であすったの?(どうして、私が嫌いになったんとうにどうなすったの?(どうして、私が嫌いになったれよりもセエラさん、お願いだから聞かしてちょうだい。ほ私、叱られたってかまわないわ。ちっともかまわないわ。そ「見付かれば、大変なことになるのはわかっているわ。でも、

う。だから、あなたも、前とは変っちまったんだろうと思っち。だから、あなたが大好きなのよ。」と、セエラはいいまもりなんか、ちっともなかったのに、というような響でした。この数週間の間、よそよそしくするついつか仲よしになってちょうだいといった時の通り、人なついのかたまりがこみ上げて来ました。アアミンガアドの声は、アアミンガアドの声を聞くと、セエラの喉にはまた、いつ

判らなかったの。私がうちへ行って来てから、変ったのはあかけても下さらなかったじゃアないの。私、どうしていいか「あら、変ったのはあなたの方よ。あなたは、私に物をいいアアミンガアドは、泣き濡れた眼を見張りました。

なたよ。」

の。だから、私あなたもきっと、おいやなんだろうと思って、て仰しゃるのよ。皆さんだって、私と話すのはおいやらしいないけど。ミンチン先生は皆さんとお話しちゃアいけないっ「そうよ、私変ったわ。あなたの考えてるような変り方ではセエラは思い返して、自分が悪かったのだと知りました。

なるべくあなたを避けていたのよ。」

「まア、セエラさん。」

アアミンガアドが、身を引こうとすると、セエラはひどく寂ルで襪われたアアミンガアドの肩にじっと乗せていました。セエラはしばらくの間、小さい黒髪の頭を、赤いショオした。二人は眼を見合わせて、そして、お互に抱きつきましアアミンガアドは、セエラを咎めるように泣きじゃくりま

え、アアミンガアドはショオルにからだを包んで、それから、二人は床に坐りました。セエラは手で膝をかか

しい気がしました。

になったの。」 にあやまって、もう一度お友達になっていただこうって気 具の中で泣いていたら、ふと急に、ここへ登ってきて、あなられないのよ。私は生きてる気もしなかったの。今夜も、夜なしでも暮せるでしょうけど、私は、セエラさんなしにはい「私は、もうとてもたまらなかったのよ。セエラさんは、私

のかもしれないわ。」
のかもしれないわ。」
のかもしれないわ。」
とことになりはしまいかと、私気にしまったでしょう。こんなことになりはしまいかと、私気にしまったでしょう。こんなことになりはしまいかと、私気にしまら、いつかもいったように、今度のように辛い目にあってはいから、仲直りしようなんて気にはなかなかなれないのよ。「あなたは、私なんかよりよっぽどいい方なのね。私は我が

わ。」「そんな目にあったって、ちっともありがたくはないと思う

いのよ。でも、私達にはわからないところに、よいものがな「私だって、ほんとうはありがたいと思ってるわけじゃアな

いとも限らないでしょう。ミンチン先生にしたって――。」

ないわ。」 セエラは疑わしげに―― 「いいところが、 あるのかもしれ

ました。 アアミンガアドは、怖々そこらを見廻して、セエラに訊ね

「あなた、こんなところに住めると思うの?」

思っていればね。」 と思ってよ。でなければ、これは、 「こんな所でも、こんなじゃアないつもりになれば、住める あるお話の中の場面だと

出して来ました。ふいに辛い目にあってからこのかた、 ラは一度もまだ、空想によって慰められたことがなかったの セエラは静かに語りました。うまい具合に空想がまた働き 、 セ エ

でした。

ょう。それから、バスティユに抛りこまれた人達だってあるト伯爵はシャトオ・ディフの牢屋に押しこめられていたでし 「もっとひどい所に住んでた人もあるのよ。 モント・クリス

アアミンガアドは口の中で、

話してくれた事がありましたので、アアミンガアドもフラン ス革命の話だけは覚えこんでいました。 「バスティユ。」といいました。いつかセエラが芝居がかりで

いるの。ミンチン先生は監守で、それからベッキイは――」 いたの。 の囚人なの。私は、もう幾年も幾年もここに押しこめられて 「つもりになるのは、バスティユがいいわ。私はバスティユセエラの眼は、いつものように輝いて来ました。 '世の中の人達は皆、私のことなんか忘れてしまって

> ふと新しい光が、セエラの眼に加わりました。 「ベッキイは、お隣の監房にいる囚人なの。」

向きました。 セエラは、昔の通りな顔になって、アアミンガアドの方を

「私、そのつもりになるわ。つもりになってると、 どんなに

まぎれていいかしれないわ。」 アアミンガアドは、たちまち夢中になりました。

今までよりも、もっと仲よしになったような気がすることよ。」 を聞かしてちょうだいね。そんなことをしていると、きっと は、あなたがほんとうにいい方だってことを教えてくれたの しょう? そしたら、あなたが昼間のうちに作っといたお話 「いいわ。何か事が起ると、人の心もわかるものね。私の不幸 「そしたら、私にもつもりのお話をみんなしてちょうだいね! 見付けられそうもない晩には、いつでもここに来ていいで

九

かも、よく解りませんでした。で、若い養母さんの様子がす かり見てあげているのだか、合点が行きませんでした。小さ た。彼女は、 ロッティはまだねんねエでしたので、不幸とはどんなことだ いるのだか、なぜ教室でも自分の勉強はせず、他人の勉強ば しましたが、だからといって、どうしてあんな古い服を着て っかり変ってしまったのを見ると、途方にくれるばかりでし セエラを慰めてくれた二人組の第三人目はロッティでした。 セエラの身の上に何か起ったということは耳に

ういないのだということを、しきりに小声で話し合っていま した。それにセエラに何か問いかけても、ろくに返事もしま い子供達は、あのエミリイのいた美しい部屋に、セエラはも

ロッティは、そっとセエラに尋ねました。 セエラが、 初めて小さい子達のフランス語を見てやった朝、

せん。

なっちゃアいや。」 「セエラちゃん、あなた、ほんとにもうお金持じゃアないの? あなたは、乞食みたいに貧乏なの? 乞食みたいになんか

てロッティをなだめにかかりました。 ロッティは今にも泣き出しそうでしたので、セエラは周章

「乞食には、お家なんかないけど、私には、お部屋があるの

「どこにあるの? 私、行ってみたいわ。」

叱られるわ。」 アないの。あなたにおしゃべりさせたといって、 「おしゃべりしちゃア駄目よ。ミンチン先生が睨めてるじゃ いまに私が

うち、 質の子でした。で、セエラがいる所を教えてくれないなら、 た。二つ並んでいる戸の一つを開けると、セエラは古ぼけた のだということを知りました。その日の暮近く、ロッティは た。ロッティは大きい子達のおしゃべりに耳をすましている 何か他の方法で、セエラのいる所をつきとめようと思いまし 一人、今まであるとも気づかなかった階段を登って行きまし が、ロッティは、一度いい出したら、なかなか諦めない性 ある時、ふとした言葉尻から、セエラが屋根裏にいる

テエブルの上に立って、天窓から外を見ておりました。

「ここからはね、

階下では見えないものが、

たくさん見える

「セエラちゃん、セエラ母ちゃん。」

らでした。 ぼらしく、世の中からあまりかけ離れた所のように思えたか ロッティは景気にとられた形でした。室内があまりにみす

ももうおしまいだ。 したら――泣声がひょっと誰かの耳にでも入ったら、二人と れから、どうなることだろう。もしロッティが泣き出しでも ロッティの方へ走り寄りました。 セエラは振り向くと、これも呆気にとられた形でした。こ ---セエラはテエブルから飛び下りて、

の。ね、この部屋は、そんなにひどくもないでしょう?」 られるからね。でなくても、私一日中叱られ通しなんですも 「ひどくない?」 「泣いたり、騒いだりしちゃア駄目よ。そうすると、私が叱

で、この養母さんのためになら、どんな我慢でもしようと思 彼女は甘やかされてはいましたが、セエラが非常に好きなの 所でもよくなるような気がして来ました。 っていました。すると、セエラの住んでいる所なら、どんな ロッティは唇を噛みながら、部屋の中を見まわしました。

眼を紅くして、窓の外を見つめていたのでした。 には殊に辛い日でしたので、ロッティの入ってきた時には、 ラは何か慰められるような気がしました。その日は、セエラ た。ロッティのむっちりした身体の温かさを感じると、セエ 「ひどいなんてことないわ。セエラちゃん。」 セエラはロッティを抱きしめて、無理にも笑おうとしまし

「どんなものが見えるの?」

るような気がするでしょう――まるで、どこか違った世界にお家の人かしらと思うでしょう。それに、何だか高い所にいよく人の顔がひょいと出て来るのよ。すると、あれはどこの「煙突や、雀や、それからよその屋根裏の窓や。――窓から

「私にも見せて。抱いてみせて!」

来たような。」

こらを見廻しました。立ちました。二人は天井の明りとりの窓から頭を出して、そ立ちました。二人は天井の明りとりの窓から頭を出して、そセエラはロッティを抱き上げ、一緒に古いテエブルの上に

屋根裏部屋の窓も閉っていました。隣家は空家なので、はそこから逐いたてられてしまいました。隣家は空家なので、さそうに飛び歩きながら、「囀っていました。そのうちの二羽さの両樋の方へなだれ落ち、雀等が、そこらを何の怖れもなが映ったか、想像もつかないでしょう。石盤葺の屋根が、左屋根裏の窓から外を見た経験のない方には、二人の眼に何屋根裏の窓から外を見た経験のない方には、二人の眼に何

ように思われました。ミンチン先生も、アメリア嬢も、教室ののういろの事は、煙突にかこまれてこの窓からは、まるで嘘のロッティは恍惚となってしまいました。下界に起っているいれば、屋根から屋根へ行き来も出来ると思うの。」セエラはいいました。「近いから、あそこに娘さんでも住んで「あそこにも誰かが住んでいてくれるといい、と私思うのよ。」

ほんとうにあるのかないのか、判らなくなって来ます。

床の上に坐って、窓から空を見上げるのよ。

すると、窓はま

るのでした。ロッティは思わずセエラの腕にしがみつきまし広場の車馬の響さえ、何か別の世界の物音のように聞えて来

よりよっぽどいいわ。」 「セエラちゃん、私このお部屋好き――大好き。私達の部屋

「私、持っててよ。」 「あら、雀が来てよ。パン屑でもあれば、やりたいのだけど。」

すと、雀はせっかくの御馳走に脅かされたのだと気づいたらましたが、セエラがちゅっちゅっと雀の通りに口を鳴らしまン屑を投げられると、驚いて一つ向うの煙突の先へ飛び退き雀は、屋根裏にお友達がいようとは思わなかったので、パ

「来るでしょうか?」しくくしていたロッティは、耐えきれなくなりました。

しく、首を傾げてパン屑を見下しました。それまで、

おとな

こっちの方は低くて、頭がつかえそうね。私夜が明けると、ってもいいわね。天井がかしいでいるのも面白いでしょう。よって、今まで気づかなかったここの美しさを知りました。たことなど忘れてしまいました。セエラ自身も、ロッティにて、戻って来ました。友はまた友を伴れて来ました。ロッテで、煙突の向うへ飛び去りました。が、じき一羽の友を伴れで、煙突の向うへ飛び去りました。が、じき一羽の友を伴れ後は、しばらくためらって後、大きなかけらを素早く驚ん

ば、素敵じゃないの。ね、そう考えてみると、ここだってずよ。それから、あの小さな炉にしたって、磨いて火を入れれなの。雨の日には雨だれの音が、何かいい事を話してくれてさな薔薇色の雲がふわふわ浮いてて、手を伸したら届きそうるで四角な明るみの継术みたいなのよ。お天気の日には、小

けていいました。ほんとうだと思いこむロッティでした。セエラは、なおつづほんとうだと思いこむロッティでした。セエラは、なおつづ見えるような気がしました。セエラが描くものなら、何でもそういわれると、ロッティも、セエラのいう通りのものがいぶんいい部屋でしょう。」

の上でちんちん煮並ってるの。寝台もすっかり変えなければ。を置くとしましょう。椅子から手を伸すと取れるところに、本箱を置くの。炉の前には毛皮を敷くの。壁は壁掛と額とで本箱を置くの。炉の前には毛皮を敷くの。壁は壁掛と額とで本間といいら、あそこの隅には、クッションを一杯のせた長椅子「床には厚い、柔かい、青の印度絨毯を敷くとしましょう。

「セエラちゃん、私もここに来たいわ。」ように、慣らしてしまうの。」

それから、小雀達は窓に来て入ってもようござんすかという

に坐って、両手で顔をおおうていました。が、前よりひどく思われました。セエラはしばらく足台の上ロッティを送り出してしまうと、セエラには室内の惨めさ

ていました。ロッティの持ってきたパン屑が、そこらに散ら大きな鼠が一匹、後肢で立って、物珍しげに鼻をうごめかしふと、セエラはことという微かな音を聞きました。見ると、さえあるわ。」

のようでした。

かっていましたので、

鼠はその匂いに惹かれて出て来たもの

うな心を持っているとみえ、さっきの雀のように、だんだんじゃアないのね。雀の方に生れたくはないかい? なんて聞は、鼠とは大違いだわ。でも鼠は鼠になりたくてなったわけは、鼠とは大違いだわ。でも鼠は鼠になりたくてなったわけは、鼠とは大違いだわ。でも鼠は鼠になりたくてなったわけはか問うようにセエラをみつめているのでした。眼付が妙におうな心を持って、灰色の頬鬚をはやした侏儒のようでした。何鼠はまるで、灰色の頬鬚をはやした侏儒のようでした。何

いうから、私もお前と仲よくなろうかしら。」 、、、、哀そうに。バスティユの囚人達は、鼠と仲よしになったって「おいで。私は罠じゃアないから。食べてもいいのだよ、可

パン屑の方に寄って来ました。

も、目に見えぬ魂があって、声も立てず、話し合うことが出しれません。ことによると、また世の中の事物には、何にでは言葉でない言葉があって、何にでも、それが通じるのかもかし、動物に物の解るのは事実です。ことによると世の中に、どうして動物に物が解るのか。その訳は解りませんが、しいった。

来るのかもしれません。それはとにかく、鼠はセエラがこう とパン屑の方に行き、それを食べはじめました。彼は食べな すみません、というような眼をしました。セエラは、それに がら、さっきの雀のように、時々セエラの方を見て、どうも いった瞬間、もう安心だと思ったようでした。彼はそろそろ

ひどく心を動かされました。

りしていました。セエラは寝てしまったのかしら、と「訝って と屋根裏へ忍び登って、戸を叩きますと、室内は妙にひっそ ところへお帰り。」 いるところへ、ふいにセエラの低い笑い声が聞えて来ました。 「ほら、メルチセデク、それを持ってお帰り。おかみさんの それから一週間ほどたったある晩、アアミンガアドがそっ

そういうと、すぐセエラは戸を開きました。

「セエラさん、誰? 誰と話してたの?」

しちゃア、駄目よ。」 「お話してもいいけど、あなたびっくりして、声を立てたり

話していたのかと、アアミンガアドは思ったのでした。 見渡したところ、室内には誰もいないので、セエラはお化と アアミンガアドは、その場で、たく声を立てるところでした。

「何か、怖いお話なの?」

でもないわ。」 「怖がる人もあるわ。私だって初めは怖かったけど、もう何

「いやアだ。——鼠よ。」

声は立てませんでしたが、怖さのあまり息をはずませていま アアミンガアドは一飛に飛んで、寝台の真中に坐りました。

> 「鼠 鼠ですって?」

よ。あなたさえ怖くなければ、呼んでみるわ。」 「慣れてるから怖かアないのよ。私が呼べば出てくるくらい

ました。 を見てみたくなりました。彼女は寝台の端にのり出して来て、 初めて出て来た時の話をするのを聞いていると、だんだん鼠 セエラが壁の腰板にある抜穴のそばに跪くのをじっと見てい かりいましたが、セエラが落ち着いた顔で、メルチセデクが アアミンガアドは、初めは怯えて寝台の上で足を縮めてば

たりしやアしなくって?」 「大丈夫。私達と同じようにお行儀がいいのよ。まるで人間 「そ、その鼠、ふいに駈け出して来て、寝台の上に上って来

か呪文を称えるように、四五たび吹きました。すると、それ のようだわ。さ、見てらっしゃい。」 セエラは聞えるか聞えないほどに、口笛を吹きました。何

大きな屑を持って、小忙しげに帰って行きました。 せて、穴から顔を出しました。セエラがパン屑をやると、メ を聞きつけて、灰色の頬鬚を生やした鼠が、眼をきらきらさ ルチセデクは静かに出て来て、それを食べました。 彼は少し

ちゅうにも三通りあるのよ、子供のちゅうちゅうと、メルチ くと、家のもの達が悦んで、ちゅうちゅう大騒ぎよ。ちゅう えらいでしょう。自分は小さいのだけ食べるのよ。帰って行 セデク夫人のちゅうちゅうと、それからメルチセデク君のち ゅうちゅうと。」 「ね、あれは、おかみさんや子供達に持ってってやるのよ。

アアミンガアドは笑い出しました。

「セエラさんは変ってるわね。でも、いい方ね。」

はないわ。」 廻しました。「少くとも、こんなところに住んでいられるはず られないのよ。」セエラはちょっと口を噤んで、部屋の中を見 私のいう出まかせは面白いと、パパは仰しゃってたわ。私、 だわ。でも、私笑われてうれしかったわ。私は変人だけど、 よ。」セエラは小さな手で顔をこすりました。そして、やさし お話を作らずにいられないのよ。お話を作らずには生きてい い少し悩ましい顔になりました。「パパもよく私を笑ったもの 「私変っていてよ。私はまたいい人になりたいと思ってるの

ょう。」 あなたは、 「あなたが話すと、何でも、皆ほんとのように思えてくるわ。 アアミンガアドは、だんだん惹き入れられて来ました。 メルチセデクのことを人間のように仰しゃるでし

吃驚したりするわ。それから結婚して、子供も持ってるわ。 あれに名をつけてやったのよ。」 いでしょう? あれの眼は、人間の眼のようだわ。だから私 だから、あれだって私達のように、何も考えないとはいえな 「人間なのよ。あれは私達と同じように、ひもじくなったり、 いつものように膝を抱えて、床に坐っていまし

「それにあれは、 私の友達としてつかわされたバスティユ鼠

セエラは、

ィユだというつもりでいらっしゃるの?」

「まだバスティユのつもりなの? いつでも、

ここはバステ

殊に寒い日などには。」 りにもなるけど、バスティユのつもりになら、すぐなれるわ。 「たいていそのつもりよ。時とすると、どこか別の所のつも

らでした。 になりました。向うから壁をコツ、コツと叩く音を聞いたか ちょうどその時、アアミンガアドは寝台から、転り落ちそう

「なアに? あれ?」

「あれこそは、隣の監房にいる囚人じゃ。」 セエラは立ち上って、お芝居の口調で答えました。

「ベッキイのこと?」

「そうよ。こうなの、コツ、コツ、と二ツ叩くのは、『囚人よ、

そこにいるのですか?』という意味なの。」 セエラは返事でもするかのように、こちらから壁を三度叩

きました。

いう意味なの。」 「ね、これは、『はいおります。別に変りはありません。』と

四つ叩く音がしました。 すると、ベッキイの方から、 コツ、 コツ、 コツ、 コツと、

う。お休みなさい。』」 「あれは、こうなの、『では、 同 た 胞 よ、 安らかに眠りましょ

「まるで、何かのお話みたいね。セエラさん。」 アアミンガアドは、うれしさのあまり眼を輝かせました。

だって物語だわ。あなただって一つの物語だし――私も一つ の物語よ。ミンチン先生だって、やっぱり物語だわ。」 「みたいじゃアなくて、ほんとにお話なのよ。 セエラはまた床に坐って話し出しました。アアミンガアド 何だってかん

んでした。 降りて、自分の寝室へ行くように、注意しなければなりませこのバスティユに夜通しいてはならないから、そっと梯子をて、セエラの話に聞きとれていました。で、セエラは彼女に、は、自分がいわば脱走囚のようなものだということなぞ忘れ

十 印度の紳士

な気がしました。 時よりも、階下で皆の間にいる時の方が、よけい一人ぼっちエラはたいてい一人ぼっちでした。彼女は屋根裏に一人いるア嬢に見舞われる慎れもないではありませんでした。で、セにいるというわけではありません。セエラはいつ行っても屋根裏で行ったわけではありません。セエラはいつ行っても屋根裏が、アアミンガアドやロッテイは、そう毎晩屋根裏に忍んが、アアミンガアドやロッテイは、そう毎晩屋根裏に忍ん

び出さずにはいられませんでした。 ともありましたが、時とすると顔を紅らめ、唇を噛んで、逃って、形の整わないのはもとよりのことでした。セエラは時した。ぐんぐん脊丈は伸びて行くのに、古い着残りしかない時には、よく通りがかりの人が振り返って見たものでしたが、まく通りがかりの人が振り返って見たものでしたが、ポリンセス・セエラとして馬車に乗り、女中を従えていたプリンセス・セエラとして馬車に乗り、女中を従えていた

たり、テエブルを囲んで話したりしている人達を見て、彼女に暖かそうな部屋を覗いて見るのが常でした。火の前に坐っ日が暮れて、窓の中に灯がともると、セエラは通りがかり

した。 子供と、たくさんの召使と――これが『大屋敷』 さんと、これもまた肥った血色のいいお祖母さんと、八人の した。肥った血色のいいお母さんと、肥った血色のいいお父 くさんの人達は、 ではなく、その家には人がたくさんいるからでした。そのた と呼んでいました。というわけは、その家の人が大きいから 女塾のある一獣には、五つか六つの家族が住んでいました。 は、よくその人達のことを想像してみるのでした。ミンチン た。大屋敷のほんとうの名は、 セエラはそれぞれの家族と、彼女の空想の中で親しくなって いました。その中で一番好きな家族を、 大きいどころか、子供の方が多いくらいで モントモレンシイというので セエラは『大屋敷』 の人達でし

かったかもしれません。もっとも、考えようによっては、ちっとも滑稽なことではならある晩のことでした。非常に滑稽なことが持ち上りました。

とも――何もかも忘れ、もう一目少年を見たい気持で一杯に ラは手籠を持っていることも、自分の身装のみすぼらしいこ こもうとしていました。少年の頬は紅く、眼は青で、丸い可 た。それにつづいて、五歳の少年ギイ・クラアレンスが乗り た。それにつづいて、五歳の少年ギイ・クラアレンスが乗り はどこかの夜会へでも出かけるらしく、ちょうど舗。道を横 はどこかの夜会へでも出かけるらしく、ちょうど舗。道を横

生が救えるものと思っていたのでした。彼が姉につづいて馬思っていたところでした。彼はその二十銭で、貧しい子の一かしてそんな子を見付け、持合せの二十銭銀貨を施したいとその日そんな話を読んで涙ぐんだほどでした。で、彼はどう供達の話をいろいろ聞いていました。ギイ・クラアレンスは、ちょうど降誕祭の前でしたので、大屋敷の人達は貧しい子

いました。で、彼はポケットに手を入れ、銀貨を持って、セ何にも食べなかったから、そんな眼をしているのだろうと思ついて接碗したいからでした。が、少年は、セエラが一日中セエラが餓えたような眼をしていたのは、この少年に抱き

うな眼で自分を見ているのに気づいたのでした。

「可哀そうに。この二十銭を上げるよ。」エラの方へ歩いて行きました。

ような気がしました。
がいのでした。セエラはそのがいのこもった銀貨に、手も出せないたものでした。セエラは一度紅くなってから、また真蒼になきました。セエラも、よくそうした娘達に銀貨を施してやっ分が馬車に乗るのを見上げていた乞食娘にそっくりだと気づせエラはびっくりしました。が、すぐ、今の自分は、昔自

セエラの声は、そこらの乞食娘の声などとは似ても似つかだくわけはございません。」「あら、たくさんでございます。わたくし、ほんとうにいた

馬車の中の少女達はのり出して耳を傾けました。ぬものでしたし、ものごしも良家の令嬢そっくりでしたので、せつきの声は、そこだの会食がの声などとは何でも何です。

思って、

はらはらしていたのよ。乞食でもないのに、

乞食と

のでも買いたまえ。二十銭あるんだからね。」「君、とってくれなくちゃア困るよ。これで、何か食べるもいやでしたので、銀貨をセエラの手の中に押しこみました。が、ギイ・クラアレンスは、せっかくの施しをやめるのが

した。乗ろうとしてクラアレンスは、ふとセエラが餓えたよ 車へ乗ろうとした時にも、その銀貨はポケットの中にありま 折りはしましたが、頬は真赤に燃えました。 拒みでもすると、ひどく気を落しそうなので、 にお金を取らなければ悪いと思いました。で、 少年は、 非常に親切な顔をしていました。セエラがこ ようよう我を セエラは素直 の上

ませんでした。 く知っていましたが、乞食に間違えられようとは思いもよりが妙な恰好をしていること、みすぼらしいことは、前からよい女の眼は霧の中できらきら光っていました。セエラは自分で去がりました。息苦しいけれど、ほほえみたい気持でした。少年が悦ばしげに馬車へとびこむのを見ると、セエラもそ「ありがとう。坊ちゃんはほんとうに御親切な、可愛い方ね。」

ゃべり出しました。 大屋敷の子供達ははしゃいで、しをり出した馬車の中で、大屋敷の子供達ははしゃいで、し

思うわ。」 「あの娘は乞食なんかじゃアないとうアレンスにいいました。「あの娘は乞食なんかじゃアないと「どうして、お金なんかやったの?」ジャネットはギイ・ク

ノラもいいました。

ットはいいつづけました。「私、あの娘が怒りゃアしないかと「それに、おねだりしたわけでもないじゃアないの。」ジャネ食のとは見えなかってよ。」「口の利き方だって、乞食みたいじゃアなかったわ。顔も乞

. E1

見られたら、腹の立つのがあたりまえだわ。」

やったんだもの。」をの通りさ。僕は僕の持ってるだけを愛い方だといったよ。その通りさ。僕は僕の持ってるだけをた。「あの娘はちょいと笑って、あなたはほんとに親切な、可「でも、あの娘は怒ってやしなかったよ。」と少年はいいまし

ジャネットとノラは眼を見合せました。

て、ぴょこぴょこ頭を下げるはずだわ。」とう、旦那様、おありがとうございます』っていう風にいっ「乞食の子なら、そんなことはいうはずがないわ。『おありが

くつも現れました。皆はよく炉のまわりでセエラのことを話た。セエラが通りますと、子供部屋の窓に、子供達の顔がいいるような興味を、セエラに対して持ちはじめていたのでしが、その時以来、大屋敷の人達は、セエラが大屋敷に感じて、セエラはそんな話があったとは、知るよしもありません。

食じゃないことよ。なりは汚いけど。」るものはないようよ。きっと孤児なのだわ。でも、決して乞よ。」と、ジャネットはいいました。「誰もめんどうを見てや「あの子は、学校で小使娘みたいなことをしているらしいの

し合いました。

が急いでいうと、ひどく滑稽に聞えました。と呼ぶようになりました。あまり長い名なので、小さい子達で、それからはセエラを『乞食じゃアない小さな女の子』

るのが、セエラの癖でした。ベッキィにしても、雀達にしてん好きになりました。好きなものは何でもますます好きになを穴に通して、首に掛けました。セエラは、大屋敷がだんだセエラは、あの銀貨に工夫して穴をあけ、細いリボンの切端

れても、返事だけはしませんでした。はしまいかと思われるのでした。が、エミリイは何を訊ねらたのでしたが、時とすると、今にもエミリイが口をきき出しした。セエラは前から、エミリイには何でも解ると思っていも、鼠の家族にしても――エミリイに対しては、殊にそうで

こ。 ミリイまでこんなでは――セエラはがっかりしてしまいました手足を棒のように投げ出しているのです。たった一人のエと、エミリイは今までにないうつろな眼をして、鋸屑を詰め煮えくりかえるような胸を抱いて、屋根裏へ帰って来ました。ある寒い晩のことでした。セエラは空いたお腹をかかえ、

そういわれても、エミリイは、うつろな眼を見開い「私は、もうすぐ死んでしまうよ。」

ている

ばかりでした。

-53

皆は私を嗤うのよ。私は泥まみれになってるのに、 食べさせてくれないの。ぼろ靴のおかげで、 理番の要るものが見付からなかったからといって、 から晩まで、 は死にそうに 「もう我慢が出来ないわ。寒いし、 まア何千里歩いたことだろう。 空いているんだもの。 着物は濡れてるし、お腹 死ぬにきまってるわ。 私が辷ったら、 それなのに、 皆はげら 晩御飯を 料 朝

ことでした。セエラが泣くなどとは、今までにない欲戯きはじめました。セエラが泣くなどとは、今までにないしく振り上げて、エミリイを椅子から叩き落しますと、急にセエラは急にむかむかして来ました。彼女は小さい手を荒々エミリイの硝予玉の眼や、不服もなさそうな顔付を見ると、エミリイの硝予型の眼や、不服もなさそうな顔付を見ると、

げら笑ってるのさ。エミリイ、

わかったかい?」

われました。

口から誰かの頭や肩が出て来たら、

どんなにいいだろうと思

クが誰かを折檻しているのでした。 ふと、壁の中にただならぬ物音が起りました。メルチセデのつまってる人形に、何が感じられるものか。」 「お前はやはり、ただの人形なのね。人形よ、人形よ。鋸屑

出来るだけのことはしているのかもしれないわね。」出来るだけのことはしているのかもしれないわね。」ま上げました。悪かったという気持で、胸が一杯でした。思いました。彼女は顔をあげて、エミリイの方を見ました。思いました。彼女は顔をあげて、エミリイの方を見ました。こたれるのは、いつもの自分らしくない、とセエラは意外にてエラの談『戯はだんだんおさまって来ました。こんなにへ

そういいながら、

セエラはエミリイに接吻し、着物の皺を

屋のすぐ向うにあるからでした。その窓が開かれて、四角いいました。というのは、その家の屋根裏の窓が、セエラの部前からセエラは、隣の空家に誰か住めばいいのにと思って伸して、いつもの椅子の上にかけさせてやりました。

こんな屋根裏には、召使のほかいるはずはないわね。」「立派な顔の人だったら、こっちから挨拶してみよう。でも、

幸福そうに見えるわ。」壁紙の色だって、大屋敷の人達のように温かで、親切そうで、壁紙の色だって、大屋敷の人達のように温かで、親切そうで、むくした肱掛椅子や、寝椅子があるに違いないわ。あの紅いくりだ、と思ったことがあったわ。大屋敷にはきっと、むく「お父様と初めて来た時、ここのお道具はミンチン先生そっ

が一つあったのでした。 先生に取り上げられたものの中にも、彫刻のある麻栗樹の机いた時には、よくそうしたものを見たものでした。ミンチンと、セエラは妙に懐郷がかな気持になりました。彼女は印度に風に縫取の施してある衝立などが下されました。それを見る可越の荷車からは、丹念に加工した麻栗樹の『卓』や、東洋

ないわ。」おかりなところもあるから、お金持なのかもしれお方よ。大がかりなところもあるから、お金持なのかもしれ「綺麗なお道具だこと!」きっとこれを持ってるのは立派な

-53-

に入った仏像が一つ運び出されたのを見ると、この家の人はその家具には、どこか東洋的なところがある上、立派な仏殿

の人とは、何だかもう親しいような気がするわ。」「屋根裏の窓から首を出す人はないかもしれないけど、この家

印度にいたことがあるに違いありません。

出て来て、人夫達に指図をしたりするのでした。きっと大屋しく越してきた家へ入って行くのを見かけました。そのうち夕方牛乳を運び入れる時、セエラは大屋敷の御主人が、新

来るわ。そして、面白がって屋根裏へ登って来ないとも限ら「子供があれば、大屋敷の子供達も、きっとこの家に遊びに敷とこの家とは親しい間柄なのでしょう。

その晩、セエラのところに来たベッキィは、こんなことなないわ。」

いいました。 その晩、セエラのところに来たベッキィは、こんなことを

旦那様は、その方の弁護士なんですって。あまり心配事があ色は黒いかどうか知らないけど。大変なお金持で、大屋敷の「お嬢さん、お隣に越して来たのは、印度の人ですってさ、

私見てよ。」
本や石を拝む邪宗徒なのよ。何か妙な偶像を運んで行くのを、ったので、身体を悪くしてしまったのですって、あの人は、旦那様は、その方の弁護士なんですって。あまり心配事があらに異したと、だちにと、 ブダだす気持て、 ブ屋男の

しったわ。」 うちのお父様も、一ついいのを持ってらてる人があるのよ。うちのお父様も、一ついいのを持ってらいものがあるから、拝むためじゃアなく、眺めるために持っ「でもそれは、拝むわけじゃアないんでしょう。仏像にはい

を開けると、大屋敷の父親や、看護婦が下りました。すると、ある日、一台の馬車がその家の前に止りました。馭者が戸

く、お医者様の馬車が着きました。でいました。大屋敷の主人はひどく心配そうでした。まもなれた印度の紳士は、骸骨のように痩せ衰えた体を毛皮で包ん玄関から下男が二人駈け降りて来ました。馬車から助け下さ

その日、セエラがフランス語の組に出た時、ロッティはそ

支那人かしら?(地理の本には、支那人は黄色い顔をしてい「セエラちゃん、お隣には黄色い顔の小父さんがいるのね。っといいました。

る、と書いてあったけれど。」

そうして、それから印度紳士の話が始まりました。え、私は伯父さんのナイフを持っていません。)」シウ。ジュネ・パ・ル・カニフ・ド・モンノンクル。』(いいが悪いのよ。――さア、練習問題をおやんなさい。『ノン・ム「支那人じゃアないことよ。あの小父さんは、大変おからだ

十一 ラム・ダス

空を眺めている人の頭は見えませんでした。セエラは一人何まるでセエラー人のもののようでした。どの屋根の上にも、の多い階下からそっとぬけて来て、屋根裏部屋の机の上に立の多い階下からそっとぬけて来て、屋根裏部屋の机の上に立いません。台所の窓からは、そのほんの少しも見えはしないが、街からは、屋根や煙突に囲まれたほんの少しの空しか見時とすると、広場で見る夕焼もなかなか美しいものです。

もかも忘れて、いろいろの形にかたまったり、解けたりする

見つめていました。

に金の。潮を流しているようでした。その光の中に、飛ぶ鳥の空を眺めていました。西の空は金色の光に被われ、地球の上ある夕方、セエラはいつものようにテエブルの上に立って、

いがけないことでも起るのじゃアないかしら。」「素敵、素敵。何だか恐ろしいほど素敵な日没だわ。何か思

姿が黒々と浮んで見えました。

ついていました。さっき聞いた妙な音は、小猿の声だったのぐ思いました。――彼の胸もとには、一匹の小猿がまつわりの肩が出て来ました。――「東印度水夫だ。」と、セエラはす隣の窓が開いて、白い頭布を捲いた印度人の頭が、続いて白衣と、いに、何か聞きなれぬ物音がしました。振返ると、お

でした。

みて感じていたのでした。 な、ほほえみかけられるのはうれしいということを、身に心た。セエラは辛い日を送って来た間に、たとい知らぬ人からまっと印度で見なれた太陽を見に上って来たのでしょう。センドンでは、めったに太陽を見ることが出来ないので、男はの顔は悲しげで、故郷恋しいというようでした。霧の多いローを正うが男の方を見ると、男もセエラを見返しました。男

根を飛びこえ、セエラの肩に足をかけて、部屋の中に飛びこ猿は男が挨拶しようとした隙に、ふと男の手を離れて、屋のような顔をぱっと輝かして、白い歯並を見せて笑いました。セエラの微笑は、男を喜ばしたに違いありません。彼は夕闇

セエラは、昔ならい覚えた印度の言葉で、に捕えようとして、逃げ失せられでもすると大変です。で、うはどうして猿を捕えたらいいか、判りませんでした。下手に――返してやらなければならないと思いました。が、セエすぐ猿を主人に――あのラスカアが主人なら、あのラスカアんでしまいました。セエラは面白がって笑い出しました。が、

た。 い。 なかなかいうことを聞かないだろうから、セエラがた。 でい始めました。彼の名はラム・ダスというのだそうでした。 に喜びました。そしてべらべらと、その言葉でしまし、 男は、セエラが自分の国の言葉で話すのを聞くと、ひどく 「あの猿は、私に捕るでしょうか?」と、訊ねました。

「でも、屋根と屋根との間を飛んで来られて?」

「造作ないことです。」

来たり、大騒ぎしているから。」「じゃア来てちょうだい。怯えて向うへ行ったり、こっちへ

げました。が、彼が天窓を閉めて捕えにかかると、戯っ談にち額手礼をしました。猿はラム・ダスを見ると小さな叫っ声を揚らセエラの部屋に辷りこみ、セエラに向き直って、印度流のとセエラの方へ渡って来ました。彼は足音も立てず、天窓かとヤエラの方へ渡って来ました。彼は足音も立てず、天窓からからするりと屋根の上に上ると、生れーラム・ダスは、天窓からするりと屋根の上に上ると、生れ

い眼は、室内の惨めな様子を、一目で見てとったようでしたーラム・ダスは、セエラに厚く礼をいいました。彼のすばやょっと逃げ廻って、すぐラム・ダスの首に噛りつきました。

ございましょう」などと、繰り返しお礼をいいながら。 ました、「病気の御主人は、猿を失ったらどんなに落胆したで 女にでも物をいうように話しかけました。彼はじき暇を告げ が、セエラに向っては何にも気づかぬふりをして、まるで王

思うわ。マリイ・アントアネットは玉座を奪われ、牢に投げ

ら先、 とは、セエラにはどうしても思えませんでした。 着るものなどは先生らしくさせられるかもしれませんが、そ 前には、料理番にまで罵られていた今のセエラが、かつては 真中に立ったまま、思い出に耽っておりました。 れとてきっと女中の着るようなひどいものでしょう。これか るでしょう。その一巻が、今の雑用より楽だとは思えません。 ラが相当の年になるのを待って、たくさんの組を受け持たせ 分にまたなれるとは思えませんでした。ミンチン先生はセエ くらいでした。それはもう過ぎ去った昔のことで、そんな身 たくさんの召使にかしづかれていたのだと思うと、おかし いた時のことを思い起さずにはいられませんでした。一時間 ラム・ダスが去ったあと、 ダスの印度服や、うやうやしげな態度を見ると、 何かよい方に変化が起って、再び幸福な身分になろう セエラはしばらく屋根裏部屋 セエラはラ 印度に

い

を起しました。 眼は輝き出しました。彼女は痩せた身体をしゃんと伸し、顔 ふと、また何かを思いついたので、セエラの頬は紅くなり、

ても、宮、様になりすましていることが出来れば、 のは容易いけど、どんなことがあっても、見ている人がなく プリンセスだわ。ぴかぴかする衣裳を着て宮゙様になっている ら私が襤褸や、 「どんなことがあっても変らないことが、一つあるわ。 古着を着ていても、 私の心だけは、いつでも なお偉いと <

> 返しているのでした。 時など、 慰めていたのでした。ミンチン先生にひどいことをいわれる ともしなかったそうだから、女王は民衆よりずっと強かった こまれたけど、その時になってかえって、 いままででも、 トアネットが大好き。民衆がわアわア騒いでも、女王は も、女王様らしかったっていうわ。だから、 のだわ。首を斬られた時にだって、民衆に勝ってたんだわ。」 この考えは、 セエラは心の中でこういいながら、 今考えついたわけではありません。 辛い時には、いつもこの事を考えて、自分を 宮中にいた時より 黙って先生を見 私マリイ・アン セエラは

の

愚かな、意地悪なお婆さんなのだと思えばこそ、何といわれ にすることだって出来るのですよ。 御存じないのね。 ても、赦してあげているのよ。」 「先生は、そんなことを、宮、様にいってるのだということを 私がちょっと手を上げれば、 私は宮、様なのに、先生は あなたを死刑

んなひどい事をした時も、 いましたので、ミンチン先生はもとより、召使達が彼女にど んでした。 セエラは宮、様である以上、礼儀深くなければ 決して取り乱した様子などしませ け ないと思

でした。 「あの若っちょは、バッキンガムの宮殿からでも来たみてエ いやにもったいぶってやがる。」と、 料理番も笑ったほど

終ると、 下の組の少女達にフランス語を教えていました。 ラム・ダスとお猿の訪問を受けた次の朝、セエラは教室で、 セエラは教科書を片付けながら、 御微行中の皇族方 授業時間が

横面を張りとばされました。牛飼のおかみさんは、あとで自 横面を張りとばしました。今考えていた牛飼の女のした通り 先生はどんなに狼狽るでしょう。——その時のセエラの眼付 がさせられたいろいろの仕事のことを考えていました。 がつくと、思わず笑い出しました。 のことをしたわけです。セエラは夢から醒めて、この事に気 がたまらなかったので、ミンチン先生は、いきなりセエラの もしミンチン先生に、セエラがほんとうの宮様だと解ったら、 分のした事に気づいて、どんなに空恐ろしくなったでしょう。 アルフレッド大帝は、牛飼のおかみさんにお菓子を焼かされ、

すまで、ちょっとまごまごしていました。 「何がおかしいんです。ほんとにずうずうしい子だね。」 セエラは、自分が宮、様だったということをはっきり思い出

「考えごとをしていたものですから。」

「すぐ『御免なさい』といったらいいだろう。」 セエラは答える前に、ちょっと躊躇いました。

ごとをしていたのは、悪いとは思えません。」 「笑ったのが失礼でしたら、 私あやまりますわ。 でも、 考え

えられるというのさ。」 「いったい何を考えていたのだい? え? お前に、 何が考

か変ったことをいい出すのです。 は何と叱られても、少しもへこたれないばかりか、きっと何 かかると、生徒達は皆面白がって見物するのでした。セエラ アと肱をつつきあいました。ミンチン先生がセエラに喰って ジェッシイはくすくす笑い出しました。それからラヴィニ

「私ね――」と、セエラは丁寧にいいました。「私、先生は御

えていたのです。」 自分のなすってることが、何だか御存じないのだろうと、考

それからまた、お気がついたら、先生はどんなに驚いて、お狼狽 耳を打つなんてことは、なさらないだろうと思っていました。 す。それから、私が宮、様だったら、先生は私が何をしようと、 先生をどう処置したらいいだろうか、と思っていたところで なさったら、どんなことになるかしら――私は宮、様として、 「そうです。私が宮゙様で、先生が宮゙様の耳を打ったりなど 「私のしていることが、私に解らないっていうのかい?」

「何、何に気がついたらというんですよ。」 「私が、ほんとうの宮゙様だということに。」 教室にいるだけの少女達の眼は、お皿のようになりました。

になるだろうと一

ラヴィニアは席から乗り出して来ました。 「出て行け。たった今、自分の部屋に帰れ。皆さんは傍見せ

ずに勉強なさい。」

セエラはちょっと頭を下げ、

室を出て行きました。 「笑ったのが失礼でしたら、御免下さい。」といい残して、教

ジェッシイがまず口を開きました。 「皆さん、セエラを見て? あの子の、 妙な様子を見て?」

ったら、どうでしょう。」 っても、 「私だけは、セエラは身分のある子だということが今にわか ちっとも驚きゃアしないわ。 もしあの子がえらくな

いように、壁が厚く出来ていればいいがとも思いました。ど、やかましくはないだろうかと心配しました。音の通らな士の生活を空想して、心を楽しませました。教室と、紳士のセエラの学校と壁一つで「連っていますので、セエラはよく紳うの物音に、つい気をとられるものです。印度の紳士の家は、壁つづきに出来た家並の中に住んでいますと、壁のすぐ向壁つづきに出来た家がの中に住んでいますと、壁のすぐ向

だそうでした。 で、非常な失敗のため、一時は命までも失いかけ した。紳士は何か重い病気が癒りきらない風でした。台所の した。紳士は何か重い病気が癒りきらない風でした。台所の が、印度の紳士は不幸そうに見えたので、好きになったので 敷が好きになったのは、家族が皆幸福そうだったからでした

事ぐらい知ってるさ。」セエラをじろりと睨みました。「わしらは、誰だって、そんなさ。殊に、ダイヤモンドの鉱山なんてものはね。」彼は横眼でいいました。「鉱山なんてものはなかなか当るもんじゃアない「その鉱山からダイヤモンドが出るんだとさ。」と、料理番は「その鉱地からダイヤモンドが出るんだとさ。」と、料理番は

りになったのだわ。ただあの方は生き残ったばかりだわ。」セエラは思いました。「それから、お父様と同じ病気におかか「あの方は、お父様と同様の目におあいになったのだわ。」と、

なさい」といって見たりしました。エラは鉄の格子につかまって、彼に聞かすつもりで、「お休みとなしにいそいそしました。そこらに人影のない時には、セから、あのお友達の姿が見られるかもしれないと思うと、何へ惹き寄せられて行きました。夜お使に出される時など、窓こうしたことから、セエラの心はますます印度の紳士の方

い、安らかに。」

い、安らかに。」

い、安らかに。」

い、安らかに。」

い、安らかに。」

い、安らかに。」

い、安らかに。」

になって慰めてあげたように、私、あなくなるような気がなさりはしない?

私が外で、御病気のよくなるような気がなさりはしない?

私が外で、御病気のよくなるように通じるものだと思うわ。貴方はなぜか、和んで温気持ってものは、窓とか、壁とか、そんな障碍物を越えて、「聞えないにしても、きっと何かお感じにはなるわ。

ない、安らかに。」

が常でした。セエラ自身温められ、慰められるの

別の御心配があるのよ。」の御心配があるのよ。」のだし、御病気だってじきによくおなりになるのだから、あいらっしゃるようだわ。でも、もう失ったお金は戻ってきた「あの方は、今あの方を苦しめているもののことを、考えて

二人の女の子――あのセエラがお金をもらった時、馬車の中夫人も、子供達も、時々紳士を訪問しました。病人は、上のシイ氏は、よく印度の紳士を訪ねました。モントモレンシイは知っているはずだ、とセエラは思いました。モントモレンもし別の心配があるとすれば、あの大屋敷のお父さんだけ

気持を持っているようでした。ジャネットとノラも、非常に にいたジャネットとノラを可愛がっているようでした。病人 子供に対して一 殊に小さい女の子に対して、やさし い

くようにしてあげなければならないわね。」 元気が出るのですって。だから、静かにしていて、元気のつ「小父様は、お気の毒な方なのよ。私達が行くと、小父様は

病人になついていました。

さんしてくれるだろう、と思っていました。するのもジャネットでした。子供達は皆ラム・ダスが好きでム・ダスに頼んでそっといとまを告げたり、そんな気使いを度の話をしてもらったり、疲れたようだと思うと、あとをラ底の話をしてもらったり、疲れたようだと思うと、あとをラーで、気をつけていました。病人の様子を見て、よい時には印ジャネットは長女でしたので、弟や妹が暴れ出さないよう

た。

の話を聞くと、カリスフォド氏は大屋敷の主人にいいました、屋根裏部屋の中の様子を、目に見えるように話しました。更にラム・ダスが、彼女の屋根裏部屋で猿を捕えた話した。更にラム・ダスが、彼女の屋根裏部屋で猿を捕えた話の話をすると、カリスフォド氏はひどく心を惹かれたようでの話をすると、カリスフォド氏はひどく心を惹かれたようでの話をすると、カリスフォド氏はひどくいを惹かれたようでの話を聞くと、カリスフォドといいました。ある時、

私は枕の上に身を投げて、財産という重荷に犇がれ、悩まさ女達は、そんな堅い寝床にねているわけだね。それなのに、っとたくさんあるのだろうね。そして、たくさんの惨めな少「カアマイクル君、この近所には、そんなひどい屋根裏がき

のものじゃアないのだ。」のものじゃアないのだ。しかも、その財産というのは、大部分私れぬいているのだ。しかも、その財産というのは、大部分私

娘みたいな境。涯におちこむようなことも、ないとはいえないが ―― ひょっとして ―― いやほんとに、隣家のその気の毒な「どうだね。あの例の子が ―― 私の忘れたことのないあの子

-59-

んでいました。

カリスフォド氏は、

炉の火をみつめて坐ったまま、

爪

を噛

だろう。」

↑ うにいいました。 埋している娘だとすると ──」カアマイクル氏は、宥めるよい 「もし、パリィのパスカル夫人の学校にいた子が、あなたの

れたかは、ちっとも御存じないのだからな。」「そして、パスカルという女は、あの子がどこへ伴れて行かうので、あの子をもらい受けたという話ですからね。」や人は、非常な金持で、死んだ自分の娘と仲よしだったとい「あの子は、何不自由なく暮しているはずですね。そのロシ

カアマイクル氏は、肩をすぼめました。

「何しろ、あの女は抜目のない、俗物のフランス女ですから

すると、養父母達は、あとかたも見せず行方をくらましてし手離すことが出来たので、大よろこびだったらしいですよ。ね。父親を失って、仕送りの絶えたあの子を、うまい具合に

それに、名前も少し違うっていうじゃアないか。」というんだろう。『もしも』とね。『確かに』じゃアないんだ。「だが、君は、その子が、もし私の捜している子であったら、まったわけさ。」

いうのですか。確かにパリイだったのですか?」 いうのですか。確かにパリイだったのですからね。」カアマイクは破産して死んでしまったというのですからね。」カアマイクは破産して死んでしまったというのですからね。」カアマイクは、ふと発音を間違えただけじゃアないのですかね。境遇は不らパスカル夫人は、カルウと発音したようです。 ――が、ち「パスカル夫人は、カルウと発音したようです。 ――が、ち

カリスフォド氏はいらいらと、切なそうに口を開きました。

それも、今は思い起すことが出来ない。」のおいれた。私には何一つ確かなことはないんだ。私には何一つ確かなことはないんだ。私には何一つ確かなことはないんだ。私には何一つ確かなことはないんだ。私はその子の母というのも見たことはないのだからね。利いか君、私には何一つ確かなことはないんだ。私はその子「いや君、私には何一つ確かなことはないんだ。私はその子

カリスフォド氏は昂奮して来ました。彼は、

病後の頭で、

た。 失敗当時のことを考え出すと、きまって昂奮して来るのでし

「でも、学校は、パリイだとお考えになる理由はあるのです合十分注意して、静かに訊ねなければならないのでした。た。大事なことを訊かなければならないのでしたが、今の場カアマイクル氏は、心配そうに病後の人を見守っていまし

ことがある。」 - れに、母親は、娘をパリイで教育したがっていた、と聞いた「ある。というのは、あの子の母はフランス人だった! そか。」

テエブルを叩きました。 印度の紳士は、身体をのめり出させ、長い骨ばかりの手で、「すると、パリイにいそうですな。」

忘れてしまった。すっかり忘れてしまった。どうしても思いたのだ。あれは娘の学校の話をしたかもしれない。が、私はだが、あの鉱山奴のおかげで、我々は何もかも忘れてしまっ「あれは、いつも娘のことを『小さい奥様』と呼んでいた。ば、一財産渡してやれるのだと思って、お気を静めて下さい。」「いや、そう昂奮なさらないで。あの子が見付かりさえすれ

出せない。」

へ行ってみることにしましょう。」、いってみることにしましょう。」ましたよ。それを手がかりとして、とにかく、私はモスコウあの女は、何だかモスコウにいるような気がするといってい夫人の所謂『御親切なロシヤ人』の捜索を続けるんですな。「しかし、まだその娘を見付けることは出来ます。パスカル「しかし、まだその娘を見付けることは出来ます。パスカル

がどんなことを訊くと思う?」 は、その訊ねたいことを、口でちゃんというのだ。君、あれねているような顔付だ。私はよくあれの夢を見る。夢の中で快活な顔が、私を見返しているような気がする。何か私に訊いるより他ないのだ。何だか火の中から、クルウ大尉の若い、この健康では、こうして毛皮にくるまって、じっと火を見て「旅行の出来る身体なら、私も一緒に行きたいのだけれど、

「よくわかりませんね。」

けてくれ。頼む。」が出来るようにならなければならん。どうか、あの娘を見付が出来るようにならなければならん。どうか、あの娘を見付氏の手をしかと掴んで、握りしめました。「私は、それに返事小さな奥様はどこにいるのだい?』とね。」彼はカアマイクル「あれは、いつでもこういうのだ。『トム、なつかしいトム。

*

チセデクと話していました。 壁の向うでは、セエラが、晩の食事にまかり出て来たメル

ん寒くなって、往来がじめじめして来ると、私の務は辛くなったわよ。いつもどころの辛さじゃアなかったわよ。だんだ「メルチセデクや、今日という今日は、宮茂のつもりも辛か

来なかったわ、私自分の舌を噛んだの。今日はおやずぎから、けにはいきませんものね。でも、舌でも噛まなきゃア我慢出りにも宮、梲が、ラヴィニアみたいな下等な人の相手になるわしてやるところだったけど――でも、やっと我慢したの。かるって、嗤うのよ。私、思わずかっとして、葱く何かやり返るばかりだわ。ラヴィニアったら、私が裾を泥んこにしてい

だと、よく頭を抱えるのでした。ふと、セエラは黒髪を両手の中に埋めました。彼女は一人

とても、寒くなったのね。今夜も寒いわ。」

な奥様』だったのは。」「ああお父様、もうずいぶん昔だわね、私がお父様の『小さ

ったのでした。 同じ日のうちに、壁の向うとこちらとに、こんなことが起

十三 人の子

した。ベッキイはまるで奴隷の子のように逐い使われまりました。ベッキイはまるで奴隷の子のように逐い使われま所の女中達も、気がくさくさするとみえ、ますます辛くあたで、蝋燭なしには、梯子を登ることも出来ませんでした。台

それから、 私も夜具を着るから、 いました。「あなたも、夜具を持って来てくるまるといいわ。 してちょうだいな。あの壁の下へ掘った地下道の話をして。」 の料理番ね、 あれを先生が持っているのが、 なってくるし、私、いつかお嬢様の仰しゃった大きな鍵ね、 スティユみたいじゃない? 日には、私死んじまいそうだわ。この頃はここ、まったくバ スティユだの、 「何かもっと温かいお話がいいわ。」セエラはがたがた震えて 「お嬢様、 あの印度紳士の猿のいた熱帯の森の話をしてあげ あんたでもいなかった日には あれは下まわりの看守よ。お嬢様、その先を話 隣の部屋の囚人だってつもりだのがなかった 寝台の上で、夜具をよくまきつけて、 先生はだんだん看守頭みたい 見えるような気がするわ。 ーあんただの、 あ に バ

かへ気を向けさせるようにすることだと。」のよ。心の職務は、身体が可哀そうな状態にある時、何かほ「話に気をとられて、寒いことを忘れるからよ。私こう思うよ。」 すと、バスティユのお話を聞いてても、何だか温かになるのすと、バスティユのお話を聞いてても、何だか温かになるの「そのお話の方が温かいことは温かいわ。でも、お嬢様が話

もそんな経験をしたので、前よりはずっと出来やすくなった「出来ることもあるし、出来ないこともあるわ。この頃幾度「そんなこと、あんたに出来て?」

私自分にそういってみるの。そうするとなぜだか、いやな事の私を傷けたり、不快にしたり出来るものがあるはずはない。』分は宮、様だと考えてみるの。『私は、「妖・精の宮、様だ、「妖・精わ。何かたまらないことがあると、 私いつでも一生懸命、自わ。何かたまらないことがあると、 私いつでも一生懸命、自

は皆忘れてしまってよ。」

の眼で見られているのも知らず、力の限り『つもり』になろうは、道行く人の同情を惹くくらいでした。が、彼女は同情でした。餓え、凍え、顔まで抓られたような色になったセエン先生は何かの罰だといって、御飯も食べさせてくれませんで、町は肌を刺すように寒く、ぬかるみの上に物憂い霧がたで、町は肌を刺すように寒く、ぬかるみの上に物憂い霧がたそのうち、こんなことが起りました。四五日雨の続いた後

ンを買って、息もつかずにぺろぺろと食べてしまうわ。」する。そしたら、私は店へ入って、ふうふういうような甘パるつもりになろう。それから、それから――焼きたてのパン長い厚い外套を着、毛の靴下を穿き、漏らぬ雨傘を持ってい「私は乾いた服を着ているつもりになろう。満足な靴を穿き、

十銭の銀貨でした。いましたが、それは確かに銀貨でした。二十銭ではないが、ものがあるのを、セエラは目にとめました。泥にまみれては歩道へ渡ろうとしますと、そこの溝の中に、何か光っているそう独言をいいながら、足許に気をつけ、ぬかるみの中を

「まア、ほんとだったわ。」セエラは、思わず呼吸をはずませ

うと努力していました。

ました。

かりの甘パンを――大きくふくれた、乾葡萄の入った甘パンな血色のよい母親らしい様子の女が、竈から今取り出したばと、真向いにパン屋の店があるのでした。店では一人、愉快とまた、嘘のようではありませんか。セエラが眼を上げる

そうな気持になりました。て来るおいしそうな気を嗅いだので、ちょっとくらくら倒れへ、窓に甘パンの出てくるのを見、パン屋の地下室から漂うセエラは、この不思議な出来事にどきどきしているところ

の大皿を、窓をさし入れているところでした。

「でも私、パン屋のおかみさんに、何かお落しになりはしなこの人混の中で、落した人の判ろうはずもありません。ました。もう長いこと、淝濘の中に落ちていたようですし、セエラは、この銀貨を使ったってかまわないのは知ってい

何かをふと目に止め、思わず足を止めました。足で入口の階段を登ろうとしました。その拍子に、セエラはセエラは元気なくそう独言すると、歩道を横切り、濡れた

かって? と訊いてみよう。」

「この娘も、やっぱり人の子なのだわ。そして、この子は私

よりもひもじいようだわ。」

最後「退け!」といわれることも、のみこんでいました。でも道をゆずりつけていたのです。巡査にでも見付かったがをずらせて、セエラの通る隙をつくりました。その子は誰にその子は、顔を上げてちょっとセエラを見つめると、身体

セエラは銀貨を握りしめ、ちょっとためらってから、その

子供にいいかけました。

「ひもじいのなんのって、たまらないの。」「あなた、ひもじい?」

「お午昼を食べなかったの?」

「知るものか、今日は朝から何一つ食べやしない。どこへ行「いつから、食べないの?」「お午飯どころか、朝飯も、晩飯もあったものじゃアないわ。」

ってもくれないの。あたい、下さい下さいって歩き廻ったん

-63-

が、頭の中にはふと、またいつもの空想が働き出して来ましが空いて来ました。セエラは切なくてたまらなくなりました。その子の姿を見ているだけで、セエラは気絶しそうにお腹だけど。」

ないよりかましだわ。」
らいだわ。それに、私の持ってるのは十銭銀貨だけど、でも、十銭で六つ――と、六つばかり一人で食べたって足りないくるわ。私は、そんな話をたくさん知っているわ。甘パンは二自分より貧しい、ひもじい人民にあったら、きっと施しをす「もし、私が宮`様なら――位を失って困っている時でも――

セエラは乞食娘に、しよりがましたれ」

ていました。おかみさんは、ちょうどまた出来たての甘パンへ入って行きました。店の中は温かで、おいしそうな匂がし「ちょっと待ってらっしゃいね。」といい残して、パン屋の店

お落しになりませんでしたか?」「ちょっとお伺いしますけれど、あなたはあの、十銭銀貨をを窓に入れかけているところでした。

買った時にはなかなかよいものだったにちがいない、と思いラの顔を眺めました。ずいぶん汚れた着物を着ているけれど、にさし出しました。おかみさんは銀貨を眺め、それからセエいいながらセエラは、たった一つの銀貨をおかみさんの方

「どう致しまして、私落しはしませんよ、お拾いなすったの?」

「ええ、溝の中に落ちてたの。」

の中に転がってたのかもしれませんからね。誰が落したか、「じゃア、遣ったってかまわないでしょう。一週間ぐらい溝

はないかと思って。」 「私もそう思ったのですけれども、一応お訊ねした方がよく判るものですか。」

「珍しい方ね。」

らと甘パンの方を見たのを知ると、心を惹かれたような表情を浮べました。そして、セエラがち、おかみさんは人のいい顔に、困ったような、同時に、何か

「何かさしあげましょうか。」といいました。

「あの甘パンを四つ下さいな。」

つ入れたのを見て、セエラはおかみさんは、窓から甘パンを出して袋に入れました、六

すから。」といいました。「あの、四つでいいんですよ。私、十銭しか持ってないんで

腹がすいてるんでしょう。」「二つはおまけですよ。あとでまた上るといいわ、あなたお

とうございます。」 「ええ、とてもひもじいの、御親切にして下すって、ありが

三人一度に入って来ましたので、とうとうそれはいわずにしうことを、口に出しかけましたが、あいにくそこへお客がニセエラは、外には自分よりも、ひもじい子がいるのだとい

まいました。

びっくりして、ひびだらけの黒い手の甲で眼を擦りました。顔をしていました。ふいに涙が湧き上って来たので、彼女は、びっと目の前を見つめ、苦痛のあまりぽかんとしたょびしょな襤褸にくるまった彼女は、気味悪いばかりでした。と食娘は、入口の階段の隅にちぢこまっていました。びし

した。 エラの手は熱いパンのおかげで、もう少し温かくなっていま セエラは、袋をあけて、甘パンを一つ取り出しました。セ 何か独言をいっているようでした。

乞食娘は、思いがけないよろこびにかえって怯えたらしく、少しはひもじくなくなるから。」「ほら、これは温かでおいしいのよ。食べてごらんなさい。

「ああおいしい、ああおいしい。ああ、おいしい。」ようにパンを取ると、夢中で口の中につめこみました。セエラの顔を穴のあくほど見ていましたが、じきひったくる

嗄がれた娘の声は、聞くに忍びないようでした。セエラは「ああおしし」あまましし、

甘パンをあと三つ娘にやりました。

って、セエラは五つ目のパンを下に置きました。いました。「でも、私は餓死するほどじゃアないわ。」そういなのだわ。」四つ目のパンを渡す時、セエラの手はわなないて「この子は、私よりもひもじいのだわ。この子は餓死しそう

いたにしたとこで、セエラに一言お礼をいう暇もなかったにいましたが、娘は食べるのに夢中でしたから、礼儀を弁護えて貪り食っているのを見棄てて、セエラは「さようなら。」とい餓えきったロンドンの野恋娘が、夢中でパンをひったくり、

しも知らぬ野獣に過ぎなかったのでした。違いありません。まして彼女は、礼儀などというものは、少

守っていました。で、かじりかけのパンをかみきりもせず、じっとセエラを見で、かじりかけのパンをかみきりもせず、じっとセエラを見っと頭を下げました。娘はそうしてセエラが見えなくなるまに夢中でしたが、かじりかけてふとセエラの方を見て、ちょもう一度娘の方をふりかえって見ました。娘はまだ食べるのセエラは車道を横切って、向う傍の歩道に辿りついた時、

した。ちょうどその時、パン屋のおかみさんが窓から外を覗きま

は食べたくないどころか、あんなにひもじそうな顔をしていは食べたくないどころか、あんなにひもじそうな顔をしていに、この乞食にパンをやってしまったんだね。しかも、自分「おや、こんな事ってないわ。あの娘はくれともいわないの

様子を訊いてみたくなったので、乞食娘のいる方へ出て行きおかみさんは窓の奥でちょっと考えていましたが、何でも、

「そのパンは、誰にもらったの?」

- 娘はセエラの行った方に頭を向けて、こっくりしました。

「あの子は、何といったの?」

「ひもじいかって。」

「その通りだといったの。」「で、何と答えたの?」

「すると、あの子はパンを買って、お前にくれたのだね。」

「で、いくつくれたの?」娘はまたこっくりをしました。

「五つ。」

おかみさんは考えこんで、小声にいいました。

ようと思えば、一人で六つ残らず食べてしまえるくらい、お「自分のためには一つしか残しておかなかったのだよ。食べ

腹がすいてたのにね。」

を見送りながら、いつになく心の乱れるのを覚えました。おかみさんは、向うの方に消えて行くセエラの小さな後姿

いいました。子に十二も上げておけばよかった。」それから、乞食娘の方に「もっとゆっくりしていてくれればよかったのにねえ。あの

「お前、まだひもじいの?」

, いに、ひどくひもじかアないわ。」 「ひもじくない時なんてありゃアしない。でも、いつもみた

「こっちへ、お出で。」

おかみさんはそういって、店の戸を開きました。そして、

「さア温まるといいわ。いいかい、これから一かけのパンも奥の暖炉を指していいました。

得られない時には、ここへ来て、下さいというのだよ。 娘のために、 私はいつでも、お前にパンを上げるから。」 あの

つゆっくりと食べました。 ましでした。セエラは歩きながら、 とが出来ました。とにかく、それは熱かったし、ないよりは セエラは残った一つの甘パンで、どうやら自分を慰めるこ 小さくちぎって、小しず

が下してありませんでしたので、内部の様子をちらと覗くこ日はもう暮れかけていましたが、大屋敷の窓にはまだ鎧戸 母親や子供達とお別れの接吻をしていました。 取りまかれているのでしたが、今日は旅にでも出るらしく、 とが出来ました。いつもは、父親が椅子に坐って、子供達に 食べたら、食べ過ぎてお腹がはちきれそうになるはずだわ。」 たぐらいお腹がふくれるといいな。そうすると、これだけ皆 「このパンが、魔法のパンで、一口食べると、お午飯を食べ

こんな話は聞き洩しませんでした。 の事を思い出し、見つからぬ先に逃げ去ろうとしました。が、 「モスコウは、雪で包まれてるでしょうね。どこも、 玄関の戸が開いたので、セエラはいつかお金をもらった時 かしこ

でした。 露西亚馬車にお乗りになる?」もう一人の娘はい

も、氷ばかりなのでしょうね?」というのはジャネットの声

送ってやろう。さ、もう家にお入り。 いました。「皇帝にもお会いになる?」 「そんなことは手紙で知らせるよ。農民やなんかの絵端書も いやにじめじめしてい

> るね。お父さんは、モスコウなんかへ行くのはやめて、皆と家 にいたいんだけどな。」

した。 彼は、それから「おやすみ」をいって、馬車へ飛び乗りま

いいました。 「お父様、その娘にあったら、よろしくいって下さいね。」 ギイ・クラアレンスは、靴脱のところで跳ねまわりながら

戸を閉めて、室内に戻る道々、ジャネットは、 ノラに

ました。

だと、あの子の着物は誰か大変お金持の人からもらったもの 返って、肩の上から私達の方を見ていたわ。お母さんのお話 見た? のようですって――きっと、もういたんで着られなくなった から、あの子にやったのね。」 「あの『乞食じゃアない小さな女の子』が通って行ったのを ずぶぬれで、寒そうな顔していたわ。 あの子は振

きました。ぞくぞくして、 「ギイ・クラアレンスのいったその娘というのは、 セエラは街を横切って、ミンチン先生の地下室に入って行 倒れそうでした。 誰なのか

十 四 メルチセデクの見聞記 しら?」

出しに出かけて来ていたのでしたが、やっと一つパン屑を見 根裏部屋には奇妙なことが起りました。それを見聞したのは メルチセデクだけでした。 ちょうどこの日の午後、 彼はセエラの出た後へ、 セエラが使に出ている留守に、屋 何か嗅ぎ

きました。 付け出したとたん、屋根の上で何かがたがたというのを耳に い顔はラム・ダスで、もう一人は印度の紳士の秘書役だった や天窓は押し開かれ、黒い顔が一つ、そこから部屋の中を覗 しました。物音はだんだん天窓に近づいたと思うと、不思議 続いてまた別な顔が、その背後に現れました。

のですが、

メルチセデクにはそんなことは判るはずもありま

ころを、ちらと見て、 りこんで来ました。彼はメルチセデクの尻尾をひっこめると ようにして、様子を見ていました。 若い秘書役はラム・ダスと同様、音も立てずに天窓から辷 小声でラム・ダスに訊きました。

帰ってしまいました。彼は穴の口に平たく坐り、眼をお皿 から下りて来るのを見ると、尻尾をまいて、自分の穴へ逃げ せんので、黒い顔の男がかたとも音を立てずに、軽々と窓口

の

「はい、鼠でございますよ。壁の中にどっさりおります。」 ありゃア鼠かい?」

「ヘエ、あの子が怖がらないなんて不思議だね。」

も詳しく語ることが出来ました。 ラと話したことはないのですが、 くり、慎ましやかにほほえみました。彼はまだ一度しかセエ ラム・ダスはそれを聞くと、手を上げてちょっと様子をつ セエラについてなら、 何で

子で、 る小ちゃな子もございます。それから、その子よりは大きい 雀や鼠まで手なずけているんでございますよ。ここの奴隷娘 よ。私がそっと来て、ここから覗いておりますと、あの子は、 「子供というものは、何とでも友達になるものでございます 毎日あの子を慰めに来ます。こっそりあの子に会いに来 あの子の話を倦きもせず聞いている子も一人ございま

> す。 でも、 す。女主人などは、あの子をまるで非人扱いにしていますが、 あの子は王族の血でもひいてるような挙亡をしていま

「君は、だいぶ詳しく知っているようだね。」

ることも、ひもじいことも、夜中まで勉強していることも、 けて行くのも、戻ってくるのも、知っております。凍えてい 「あの子の生活なら、何でも毎日見て知っております。

なら、来て看護してやりたいと思っております。」 でもなったらすぐ判りますから、そんな時には、 と見え、ひそひそと話したり、笑ったりしています。病気に 知っております。子供達が忍んで来ると、 「でも君、大丈夫かい? 誰か来やアしないかい? あの子もうれしい あの子

になるからね。」 う。すると、カリスフォドさんのせっかくの計画も、 ているのを見つけでもしたら、あの子はたまげてしまうだろ 水の泡

がだしぬけに戻って来るようなことはないかい?

僕達が来

登りきらぬうちに聞えるから、大丈夫です。」 それに、ここに立ってさえいれば、誰の足音だって、梯子を って出て行きましたから、なかなか戻っては来ないでしょう。 「あの子の他、誰も来るはずはありません。今日は手籠を持 ラム・ダスはそっと戸口に身をよせて立ちました。

あるものを手早く手帳に書き込みました。彼はまず寝台をお 「じゃア、しっかり耳を澄ましていてくれたまえ。 秘書はそういうと、 部屋の中を静かに歩き廻って、そこに

さえて、思わず声をあげました。 「まるで石だ。あの子のいない間に取りかえておかなければ。

ろうが。一 何か、特別の方法で持ち込むんだね。今夜は、とてもだめだ

ました。 のを書きこんだ一枚を手帳から破り取って、ポケットに入れ 彼は汚れた夜具や、火のない炉などを見廻り、それらの ŧ

「だが、妙なことを始めたものだね。誰がこんなことをする

といい出したんだい?」

と仰しゃるのでした。」 をお話しますと、では、 どんなにいいだろう、といっておりました。話しているうち ておりますと、あの子は、この部屋が居心地よくなったら、 おりましたので、あの天窓の所に身をよせて、中の話を聞 して聞かせます。 すのでね。あの子はよく自分の空想を、忍んで来る友達に話 の子が好きなんでございます。お互に一人ぼっちでござい 「実は、私が初めに思いついたんでございますよ。私は、 あの子はふとその事を思いついたのです。御主人にそれ 。ある晩のこと、私も悲しい思いに打たれて あの子の空想を実現させてやろう、 ま あ

い

かね。 「だが、あの子の寝ている間に、そんなことが出来るだろう もし眼を覚しでもすると――」

魔法使でも来ていたのだろうと思うでございましょう。」 くやりアササ゚せてごらんに入れます。あの子はあとで眼を覚して、 すから、誰かが窓から品物を渡してくれさえすれば、私は巧 つ打たせず、入って行くことが出来たに違いありません。で す。今までとても、 というものは、不幸な時でも、ぐっすり眠るものでございま 「私は、猫の足で歩くように歩いてお目にかけますよ。子供 、入ろうとさえ思えば、あの子に寝返り一

> 落して行きはしなかっただろうかと、そこらを駈け廻りはじ が見えなくなると、メルチセデクはほっとして、パン切でも めました。 二人は、またそっと天窓から脱け出して行きました。二人

紳士は相変らず悩ましげに、頭を抱えて坐っておりました。 こと綺麗な部屋の中に入ったことはないなと思いました。 らと部屋の中を覗きました。覗く拍子に、もうずいぶん長い 鎧戸を閉めているところでした。セエラは鎧戸の間 のかしら?」 「お可哀そうに! 窓の中にはいつものように、赤々と火が燃えており、印度 セエラがお使から帰ってくると、隣家では、ラム・ダスが あんなにして、何を考えていらっしゃる から、ち

ればいいのだろう。」 ても、その娘が我々の捜している子供でなかったら、どうす 「もし――せっかくカアマイクル君がモスコウに行ってくれ 紳士が考えていたのは、次のような事でした。

ひどくセエラにあたりました。 って叱られました。料理番も叱られたあとだったので、殊更 セエラは家に入ると、いきなりミンチン先生に、 遅いとい

「あの、 何かいただけませんか?」

セエラは元気のない声で訊ねました。

て、 「お茶は出からしで、もう駄目だよ。 とっといてやるとでも思っていたのかい?」 お前のために温かにし

「私、お午飯もいただきませんでしたの。」

「戸棚の中にパンがあるよ。」

(常しい部屋が少し温まるようでうれしかったのでした。 かっと登りきろうとすると、屋根裏部屋の戸の下から、あかやっと登りきろうとすると、屋根裏部屋の戸の下から、あかは疲れていました。セエラは少し登っては休み休みしました。 セエラはかいました。 いつまでたっても登りきれぬ気のするほど、セエラモエラは古いパンだけを食べて、長い梯子段を登って行き

ょ。」

こ。 アアミンガアドはセエラを見ると、寝台の上からいいまし

しないこと。」んさせるのですもの、私怖かったわ。メルチイは飛びつきゃんさせるのですもの、私怖かったわ。メルチイは飛びつきゃクが、いくら逐っても、私のそばへやって来て、鼻をくんく「セエラさん、帰って来て下すってよかったわ。メルチセデ

「いいえ。」と、セエラは答えました。

うさ! 「セエラさん、あなた大変疲れてるようね。顔色が大変悪い

たので、お前のことは忘れてしまって、悪かったわね。」何にもなかったといっておくれ。あんまり皆に辛くあたられっていないのよ。帰ったらおかみさんに、私のポケットにはっと御飯をもらいに出て来たのだわ。でも、今夜は一片も残りました。「おや、メルチセデクがいるのね。可哀そうに、き「とても疲れちゃったわ。」セエラは「跋」の足台にぐたりと坐

メルチセデクは、どうやら合点がいったようでした。彼は、

「アアミイ、今夜会えようとは思わなかってよ。」と、セエラして帰って行きました。満足そうではありませんでしたが、諦めたように、脚ずりを

だから、いようと思えば、明日の朝までだっていられるわけ「アメリアさんは、伯母さんの所へ泊りにいらしったのよ。はいいました。

りしたように、その上には、幾冊かの本が積んでありました。彼女はがっかでアアミンガアドは、天窓の下のテエブルを指さしました。

すっかり忘れていました。手早くページをめくり出しました。もう一日の辛さなどは、ラはたちまちテエブルに走りより、一番上の一巻を取ると、「お父様がまた本を送って下すったの。」といいました。セエ

怒られるのよ。パパは、私がお休みに家に帰るまでに、すっ「私ちっともよみたかなかったわ。でも、読まないとパパにね。私、これをよみたくてたまらなかったのよ。」「何て綺麗な本でしょう。カアライルの『フランス革命史』

こ舌してあげるつ。意えさけいようこa゚冖「こうしたら、どう?」私がよんで、あとですっかりあなたょう。」

かり憶えさせようってつもりなのよ。私どうしたらいいでし

じゃアないの。」 「出来ると思うわ。小さい人達は、私のお話をよく憶えてる「あら、うれしい。でも、あなたにそんなこと出来るの?」に話してあげるわ。憶えやすいようにね。」

「もし、あなたが憶えやすいように私に話して下さるなら、

私、何でもあなたに上げるわ。」

この本は欲しいわ。」「私、あなたから何にもいただこうとは思わないけど、でも、

御自分が何でもお出来になるものだから、私だって出来ないなれないのよ。私は利口じゃアないの。ところが、お父様は「じゃアあげるわ。私は本なんか、好こうと思っても好きに

もり?」 「私に本を下すったりして、あとでお父様に何て仰しゃるつ

はずはないと思ってらっしゃるのよ。」

だのだと思うでしょう。」「何ともいわないわ。私がお話を憶えていさえすれば、よん

ゃればいいじゃアないの?」卑しいことよ。だから、御本を読んだのは、セエラだと仰し「そんな嘘をいうものじゃアないわ。嘘は悪いばかりでなく、

「でも、パパは私に読ませたいのよ。」

つ。こえすりゃア、よんだのは誰だって、きっとおよろこびになる「読ませたいよりは、憶えこませたいのよ。だから、憶えさ

頭の悪いのは、とたなくいいかけて、セエラは口を噤みまし「でも、あなたが悪いからじゃアないわ。あなたの――」だったら、きっとそれでいいとお思いになるでしょう。」「どのみち、憶えさえすりゃアいいのよ。あなたが私のパパ

「私が、どうしたの?」

いうのよ。すぐ憶えられたって、ちっとも偉かアないのよ。「すぐ憶えられないのは、あなたが悪いからじゃアないって

――憶えてるでしょう?(いつかお話してあげたロベスピエを持ってたりした人がたくさんあるわ。ロベスピエルだってら皆に嫌われるのよ。頭はよくても悪い事をしたり、悪い心チン先生なんか、いくら何でも知っていたって、あんなだか親切なことの方が、どんなに値打があるかしれないわ。ミン

「そうね、少しは憶えてるけど。」ルのこと。」

れられなくなりました。のこと、ラムバアル姫のことなど、忘れようと思っても、忘り、固唾をのんで耳を傾けました。怖いようでしたが、同時り、固唾をのんで耳を傾けました。怖いようでしたが、同時フランス革命の話を始めました。アアミンガアドは眼を見張れ。この濡れた服を脱いで、夜具にくるまるから。」「忘れたのなら、もう一度話してあげるわ。ちょっと待って「忘れたのなら、もう一度話してあげるわ。ちょっと待って

本は当分セエラの所に置くことにしました。て憶える計画を、正直に打ちあけることにきめました。で、二人は、父のセント・ジョン氏に、セエラに話してもらっ

ったくらいでした。向気のつかないアアミンガアドも、ふとセエラを見てこういくなりはしまいかと思いました。いつもは、そんなことに一ンガアドが帰ってしまったら、ひもじさのあまり、眠られなセエラは話している間も、倒れそうに空腹でした。アアミ

うだし、肱のところには、とがった骨が出ているわ。」たいつもよりも痩せて見えるわね。眼もいつもより大きいよ「私、あなたぐらいに痩せたいと思うわ。でも、今日はあな

-7

「私、小さい時から痩せてたのよ。そして、大きな緑色の眼 セエラは、自然にまくれ上った袖口を、引き下しました。

あなたのその不思議な眼が好きなの。どこか遠いとこ

だったのよ。」

でも、たいていは黒いように見えるのね。」 ろを見ているようで、とてもいいわ。その緑色がとてもいわ。

じゃアないのよ。見えるかと思ってやってみたけど、駄目だ ったわ。暗くても見えるといいわね。」 「猫の眼なのよ。でも、猫のように暗いとこまで見えるわけ

しまいましたが、黒い顔が天窓に現れて消えたのでした。 ふと、天窓の上にかすかな音がしました。二人とも見ずに

上を、そうっと擦って行くような音だったわ。」 「今の音は、メルチセデクじゃアないわね。何かが石盤瓦の

耳の早いセエラは、そういいました。

「まさか。盗んで行くものなんか、何もないじゃア――」 「何でしょう?(まさか、泥棒じゃアないでしょうね。」

ミンチン先生が怒鳴っている声でした。 といいかけた時、また何か物音がしました。今度は二階で、 セエラは寝台から飛

び降りて、火を消しました。

「先生は、ベッキイを叱ってるのよ。」

「ここにやって来やアしない?」

「大丈夫。寝たと思ってるでしょう。 でも、じっとしていて

らいは上って来ないとも限りませんでした。それに、ベッキ にありませんでした。が、今夜は立腹のあまり、中途までぐ ミンチン先生は、屋根裏まで上って来ることなど、めった

> えしました。 イを小突きまわしながら、あとから上ってくるような気配さ

ゃアないそうじゃアないか。」 「嘘つき! 料理番の話だと、なくなったのは今日ばかりじ

そんな、そんな――」 「でも、 私じゃアございません。 私、 お腹はすいてたけど、

り。肉饅頭を半分も食べちゃったんだね。」 「監獄に入れてやってもいいくらいだ。盗んだり、 つまんだ

がら、ぴしぴしベッキイを打っているようでした。 とっておいたものでした。先生は息を切らして階段を上りな ちまうわ。——でも私、指一つさわりゃアしなかったんだわ。」 「私じゃアないんですってば! 食べるくらいなら、皆食べ そのパイは、ミンチン先生が夜おそく食べようと思って、

「嘘なんかつくな。たった今、部屋に入ってしまえ。」 戸がしまって、ベッキイが寝台に身を投げる音がしました。

彼女は泣きじゃくりながらいいました。 「食べる気なら、二つぐらい食べちまうわ。一口だって食べ

うじっとしてはいられないという風でしたが、でも、ミンチ さしのべて、「掌」を開いたり握りしめたりしていました。も やしなかったのに。料理番が、あの巡査に食べさしたんだわ。」 セエラは真暗な室内に立ったまま、歯をくいしばり、手を

あの子は、時々ひもじくてたまらなくなると、塵溜からパン つけてるのよ。ベッキイはつまみ食いなんかするものですか。 「ずいぶんひどいわ。料理番はベッキイに自分の罪をなすり ン先生が降りて行ってしまうまでは、身動きもせずにおりま

の皮を拾って食べてるくらいだけど。」

と――ことによると――彼女の親切な鈍い心の中に、恐ろし テエブルの所へ行き、蝋燭に火をつけました。灯がともると、 い事実がようよう姿を見せはじめました。彼女は手さぐりで のつかなかったことに気のついた気がしました。ことによる セエラは両手をひしと顔に押しあてて、欷歔きはじめまし セエラが泣くとは ――アアミンガアドは、何か今まで気

たけど、あの、失礼だったら御免なさい――でも、あなた、 「セエラさん、あの――あなた、一言も話して下さらなかっ

身をこごめて気づかわしげにセエラを見ました。

ひもじいんじゃなかったの?」

くなってくるの。あの子は私よりもひもじいのよ。」 じいのよ。それに、ベッキイの泣声を聞くと、よけ 「ええ、ひもじいのよ。あなたにでも食いつきたいほどひも 「あら、私、ちっとも気がつかなかったなんて!」 あなたにさとられたくなかったのよ。あなたに知ら いひもじ

もう見たところは乞食も同じですけどね。」 れると、私乞食になったような気がするからいやだったの。

て見えるものですか。お顔が第一、乞食とは違うわ。」 「そんなことないわ。着物はちょっと変だけど、乞食になん 「いつか私、小さい男の子から施しを受けたことだってある

うだったからあの坊ちゃんもクリスマスのお小遣を、 リボンを引き出しました。「ほら、これよ。私の顔が物欲しそ のよ。」セエラは自分を蔑むように笑って、衿の中から細い 下さる

その銀貨を見ると、二人は眼に涙をためながら、 笑い出し

「その坊ちゃんて、だれなの?」

ました。

をたくさん持っているのに、私は何一つ持っていそうもない るまるしてるのよ。きっとあの子は自分は贈物やお菓子の籠 「可愛い坊ちゃんだってよ。大屋敷の子供の一人で、足がま

下りました。 アアミンガアドは、ふと何かを思いついて、 ちょっと飛び

と思ったのね。」

「セエラさん、私莫迦ね、今まであのことに気がつかないな

んて。」

「あのことって。」

行ってくるわ。ここで食べましょうよ。」 だの、チョコレエトだのが入ってるのよ。私ちょっと取りに ム菓子だの、甘パンだの、オレンジだの、赤葡萄酒だの、無花果 箱が届いたのよ。私お腹が一杯だったし、本のことで悩んで いたので、手もつけずにおいたの。中には肉饅頭だの、ジャ 「いいことなの。さっき伯母様から、お菓子の一杯つまった

女はアアミンガアドの腕にしがみついて、 「でも、行って来られる?」といいました。 セエラは食物の話を聞くと、思わずくらくらしました。彼

と這って行って来るわ。」 をすましました。「燈火はすっかり消えてるわ。皆もう眠っち ゃったのね。だから、そっと誰にもわからないように、そっ 「来られるわよ。」アアミンガアドは戸の外に頭を出して、耳

た眼をきらめかせていいました。 二人は手をとりあってよろこびました。 セエラはふと、 ま

てつもりにね。それからあの、 ーアアミイ! ね、またつもりになりましょうよ。宴会だっ 隣の監房にいる囚人も御招待

えやしないでしょう。」 「それがいいわ。さ、壁を叩きましょうよ。 看守になんて聞

しない?」

「これはね、『壁の下の脱道より来れ、 セエラは壁ぎわに行って、四度壁を叩きました。

お知らせしたいことが

ある』という意味なの。」

向うから五つ打つ響がありました。

「ほら、来たわ。」

を拭きはじめました。で、アアミンガアドはいいました。 アアミンガアドがいるのを知ると、気まり悪そうに前掛で顔 戸があいて、眼を紅くしたベッキイが現れました。彼女は

「ちっともかまわないのよ、ベッキイ。<u>」</u>

「アアミンガアドさんのお招きなのよ。今いいものの入った

箱を持って来て下さるんですって。」

「いいものって、何か食べるもの?」 「そうなの。これから、宴会のつもりを始めるの。」

「食べられるだけ食べていいのよ。私、 すぐ行って来るわ。」

アアミンガアドはあまり急いだので、出しなに赤いショオ

た。 ルを落しました。誰もそれには気がつかないほど、夢中でし

たのは、 「お嬢様、 お嬢様でしょう? すてきね。 私を招くようにあの方に頼んで下すっ 私それを思うと、 涙が出て来る

その時セエラは、 眼にいつもの輝きを湛えながら、 辛かっ

> 思議に思い返していました。何か救いが来るものだ、まるで た一日のあとに、ふいにこんな愉快なことが起ったのを、不 魔法のようだと、彼女は思いました。

「さ、泣かないで、テエブルを整えることにしましょう。」

「テエブルを整えるって? 何を乗せればいいの?」 セエラはうれしそうにベッキイの手を握りました。

セエラは部屋の中を見廻して笑いました。テエブル掛も何

ちているのを見つけて、それを古いテエブルの上に掛けまし もあるはずはありません。ふと、セエラは赤いショオルが落 いショオルが掛ると、部屋の中は急にひきたって来ました。 「これで、床に赤い敷物が敷いてあったら、すてきだわね。 、赤は非常にやさしく、心を慰める色です。テエブルに赤

「まア、何て厚くて、柔かなのでしょう。」

にはもうちゃんと敷物が敷いてあるのでした。

敷物のあるつもりになろう。」セエラが床に眼を落すと、そこ

でも踏むように、そっと足を下しました。 セエラはベッキイの方に笑顔を向けながら、 さも何か敷物

思いつくものだわ。魔法の神様がそれを教えてくれるのだわ。」 「今度は何をしましょう。じっと考えて待っていると、 「ほんとに柔かね。」と、ベッキイも真顔でいいました。 何か

ましたが、 見ました。セエラはいつものようにしばらくじっと立ってい ラがじっと立って何を待ち設けているのを、ベッキイはよく いつきが呼び出されるのを待っているというのでした。 セエラのよくする空想の一つは、家のそとでいろいろの思 やがてまたいつものように、 明るい笑顔になりま セエ

「そら来た。私、何をすればいいか判ったわ。私が宮〉様時代 あの古。鞄をあけてみましょう。

いテエブル掛の上に並べました。並べる間も、彼女は何か魔 方に走って行き、レエスの縁がそり返るように工夫して、 っていました。セエラはそれを持っていそいそとテエブルの 鞄の隅には小さな箱があり、その中に小さな手巾が一ずる入 赤

法に動かされているようでした。

キンには手のこんだ刺繍がしてある。スペインの尼さんが尼 寺の中でした刺繍なのよ。ほら、目に見えて来るでしょう。」 「そこにお皿があるの。黄金のお皿よ。それから、このナプ セエラはまた鞄の中から、古い夏帽子を見附け出し、節の

花を引きはがして、テエブルの上に飾りました。 「いい匂がするでしょう。」

がら、石鹸皿を雪花石膏の水盤に見たてて、薔薇の花を盛りセエラは夢の中の人のように、幸福そうな微笑をたたえな 残った紙と花とは、 ました。それから毛糸を包んだ紅白の薄紙で、お皿を折り、 一歩退いて、飾られたテエブルを眺めました。そこにあるの 蝋燭台を飾るのに用いました。セエラは

のでした。ベッキイまで、そこらを見廻していうのでした。 「あの、これが――これが、 赤い肩掛をかけた古テエブルと、 セエラは魔法の力で、奇蹟が行われたのを見る あのバスティユ?―― 鞄から出した塵屑とだ 何かに変

「そうですとも。饗宴場に変ったのよ。」

その時戸が開いて、アアミンガアドがよろよろと入ってき 彼女は肌寒い暗闇の中から、すっかり飾られた部屋

に入って来ると、思わず声をあげました。

いわ。」 「セエラさん、 あなたみたいに何でも上手な方は見たことな

に伺ってみたら、トランクを開けてみろと仰しゃったの。」 「すてきでしょう? 皆、古鞄の中にあったのよ。魔法 の 神

もらいなさい。ね、 にも話しておあげなさいよ。」 「でも、お嬢さん、セエラ嬢さんにいちいち何だか話してお あれはみんな――セエラ嬢さん、この方

どを話して聞かせました。魔法の力の助けで、アアミンガア 天井のこと、燃えさかる丸太のこと、きらめく蝋燭のことな で、セエラはアアミンガアドに、黄金のお皿のこと、まる

ドもそれらのものを 朧。に見る気がしました。 手籠の中から、 寒天菓子や、果物や、ボンボンや、葡萄酒が取り出されるに つれ、宴会はすばらしいものになって来ました。

「女、王様の食卓みたいだわ。」と、ベッキイは吐息をつきま 「まるで、夜会ね。」と、アアミンガアドは叫びました。

した。

「こうしましょう、ね、セエラ。あなたは宮、様で、これは宮・中 すると、アアミンガアドは眼を光らせて、

するものだか、知らないんですもの。だから、 たが宮、様で、私達は女官なの。」 たの方がいいわ。」 「でも、今日の主催者はあなたじゃアないの。だから、あな 私なんか肥っちょだから駄目よ。それに宮、様はどう やっぱりあな

「あなたがそう仰しゃるなら、それでもいいわ。」それから、

で行きました。 またセエラは何か思いついたらしく、さびた煖炉の所に飛ん

と明くなるわ。 「紙屑や塵がたまってるから、これに灯をつけると、ちょっ すると、ほんとうに火のあるような気がする

セエラは火をつけると、優雅に手をあげて、皆をまた食卓

へ導きました。

ら、 しぞ。何じゃ、楽士共か。六絃琴、また低音喇叭を奏でてた におわせど、そなた達を饗宴に招ぜよと、妾に御諚下され れよ。わがやんごとなき父君、国王様には、只今、長の旅路 しょう。」 もれ。」そういってから、セエラは二人にいってきかせました。 「宮、檨方の宴会には、きっと音楽があったものなのよ。だか 「さア、お進みなされ御婦人方。饗宴のむしろにおつき召さ あの隅に奏楽場があるつもりにしましょう。さ、始めま

かもおしまいだと、皆は思いました。 を澄ましました。誰かが梯子を上って来るのです。もう何も ず飛び上って、真蒼な顔を戸口の方へ向け、息をこらして耳 「きっと奥様よ。」ベッキーは思わずお菓子のかけらを取り落 皆がお菓子をやっと手にとるかとらないうち、三人は思わ

しました。 「そうよ。先生に見付かったのだわ。」

セエラも真蒼になって、眼を見張りました。

まり、 「何かこそこそやってるようだとは思ってたけど、こんな大 ミンチン先生は扉を叩きあけて入って来ました。怒りのあ 先生の顔も真蒼でした。

胆不敵なことをしようとは夢にも思わなかった。ラヴィニア

のいったのはほんとうだ。」

チン先生は、足を鳴らして進みよると、 告口をしたのはラヴィニアだと、三人は知りました。ミン またベッキイの耳を

「畜生め、夜があけたら、さっさと出て行け。」

打ちました。

ドはわっと泣き出しました。 くなり、顔色はますます蒼ざめていきました。アアミンガア セエラは身動きもせず立っていました。眼はいよいよ大き

をしていたのです。」 の手籠を下すったので、みんなで、 「どうか、ベッキイを逐い出さないで下さい。 ただあの 伯母さんがこ

ラの仕業なんだ。ちゃんと解ってるよ。ベッキイ、 は朝から晩まで、何にも食べさしてやらないから。」 っさと自分の部屋に帰れ。セエラ、お前の罰は明日だ。 お前はさ

「今日だって、お午も晩もいただきませんでしたよ。」

食物を皆手籠にしまうんだよ。」 ければ。アアミンガアド、ぼんやり立ってるんじゃアないよ。

「そんならなおいいさ。何か心にこたえることをしてやらな

払い落しましたが、 めているのに気がつくと、 ミンチン先生は、自分でテエブルの上のものを手籠の中へ またしてもセエラが大きな眼をして見詰 先生はセエラに食ってかかりまし

るんだよ。」 「何を考えてるんだよ。なんだって、そんな眼をして私を見

「案の定、プリンセス・セエラが上座に坐ってるね。皆セエ

と思っていましたの。」「私、お父様がこれを御覧になったら、何と仰しゃるだろう、

のからだをゆすぶりました。らなくなりました。で、思わずセエラに飛びかかって、彼女らなくなりました。で、思わずセエラに飛びかかって、彼女それを聞くと先生は、いつかの時のように腹が立ってたま

「まア、失敬な! ずうずうしいにも程がある。」

夢はすっかりさめてしまいました。炉の中の紙屑は消えて小突いて先に立てながら、セエラの部屋を出て行きました。先生は手籠や本をアアミンガアドの腕に押しこみ、彼女を

ました。

手で抱き上げました。はエミリイが壁に寄りかかっているのを見付けると、震えるった時のように古ぼけて、床に散らばっていました。セエラ黒い燃殻になり、テエブルの上に飾ったものは、鞄の中にあ

いのよ。バスティユの囚人がここにいるばかりだわ。」「もう御馳走どころじゃアないのよ。宮、様もなにもいやしな

もありませんでした。ち上って寝床の方に行きました。もう何のつもりになる張念セエラはそれには気がつきませんでした。セエラはやがて立その間にさっきの黒い顔が、また天窓の上に現れました。が、セエラはべたりと坐って、両手で顔を被おうとしました。

いました。

ているのだったら、そして、それから――」れが、柔かな寝台で、羊毛の毛布や、ふうわりした枕がついな。それから、あの――」と薄っぺらな夜具をかけながら、「こい椅子テエブルがあって、暖かな晩御飯が乗っているといい「あの炉に火が入っているといいな。火の前には、気持のい

セ

エラは

思っているうち疲れはてて、

いつかぐっすり眠っ

てしまいました。

*

「いい夢だわ。私、覚めなければいいと思うわ。」気持よさに、セエラは何だかまだ夢心地だったのでした。て気持がいいので、すぐには眼を開けませんでした。余りの眠くてたまらないので――それに、何か妙にぽかぽか温かく天窓がぱたりと閉る音を聞いたと思いましたが、セエラは

した。眼を開けて見て、セエラはまだ夢を見ているのだと思ちと火の爆ぜる音を聞くと、眼をあけずにはいられませんでめまいと思って、一生懸命眼をつぶっていましたが、ぱちぱの羽根蒲団らしいものが触るのです。セエラはこの夢から覚まったく夢にちがいありません。温かな夜具もかかっていまったく夢にちがいありません。温かな夜具もかかってい

温かそうな寝衣や、繻子の羽根蒲団がかけてあります。 小さな食卓が据えてあって、茶碗や、土瓶や、 が置いて さな真鍮の茶釜が、ふつふつと煮え立ってい かけた料理のお皿などが並べられてあります。 い緋色の絨毯が、 炉にはあかあかと脂が燃え立っ ります。 炉の前には、痙攣をのせた畳みこみの椅子 椅子のそばには白いテエブル掛をかけた てい ます。 ます。床には厚 炉 小皿や、 寝台の上には 棚 の上に は小

の下には、珍らしい綿入れの絹の服や、綿の入ったスリッパ

には、 セエラは、 小さな本などが置いてあります。それに、テエブルの上 薔薇色傘のついた明るいラムプが点っているのです。 夢の国から妖精の国に来たのではないかと思いま

ともないわ。」 「消えてなくなりもしないようだわ。こんな夢って、見たこ

した。 ていましたが、やがて、夜具を押しのけて、足を床に下しま セエラは、 しばらく寝台の上に肱をついて、部屋の中を見

ゃアないと、夢の中で思っているのだわ。魔法にかかっいい。私はこれがほんとなのだと、夢見ているのだわ。 思っていたいわ。でも、どうでもいいわ。どうでもいいわ。」 ました。火に手を近づけすぎたので、熱さのあまり飛びさが と私はただ見えると思ってるばかりなのよ。いつまでもそう のようだわ。私も何だか魔法にかかっているようだわ。 「夢を見ながら、床から出て行くのだわ。このままであ セエラは、 燃え立つ火の前に跪いて、火に手をかざして見 魔法にかかった夢 きっ 夢じ れば

゙夢で見ただけ の火なら、 熱いはずは ない りました。

れて見ました。それから、 かな綿入の服を取り上げて、 セエラは飛び上って、テエブルや、お皿や、敷物に手を触 寝台の毛布に触ってみました。柔 ふいに抱きしめ、 頬ずりしまし

「温かくて、柔かだわ。本物に違いないわ。」 セ エラはその服をひっかけて、 スリッパを穿きました。

そ

ました。

れから、

よろよろと本の所へ行き、

一番上の一冊を開いてみ

『屋根裏部屋の少女へ、友人より』

せて、泣き出しました。 扉にそう書いてあるのを見ると、 セエラはその上に顔を伏

「誰だか知らないけど、私に気を付けて下さる方があるのだ

ゎ。

私にも、

お友達があるのだわ。」

イは眼を覚して、緋色の綿入服を着たセエラを見ると、吃驚 して起き上りました。昔のままのプリンセス・セエラが立っ セエラは蝋燭を持ってベッキイの所に行きました。ベッキ

ていると、ベッキイは思いました。

「ベッキイ、来て御覧なさい。」 ベッキイは、驚きのあまり口を利くことも出来ず、黙って

が廻りそうでした。 セエラに従いました。ベッキイはセエラの部屋に入ると、 眼

眠っている間に、魔法使が来たのね。」 「みんなほんとなのよ。私、 触って見たのよ。 きっと私達の

お客様

御覧なさい。 それから、その晩二人はどうしたか、 出来るなら想像して

りました。ベッキイのお茶碗はないので、洗面台のうがい いしいスウプや、 した。お皿の中には、二人で食べても食べきれないほどのお 二人は火のそばに蹲って、料理皿 サンドウィッチや、 にかけた布をとって見ま 丸麭麺などが入れてあ

りになどはなれないくらいでした。二人は餓も寒さも忘れ、 りませんでした。これが、お茶でない何かほかのもののつも 碗を使うことにしました。そのお茶のおいしさといったらあ

すっかり楽しい気持になりました。

は急いでサンドウィッチをほおばりました。 ない? 早く片付けてしまった方がよくはない?」ベッキイ ねエ、ベッキイ、その誰かは、きっと私のお友達なのよ。」 のにはちがいないわ。私を想ってて下さる方があるのだわ。 「あの――」と、ベッキイは一度口ごもってからいいました。 「あの、お嬢さん、これみんな、融けてってしまうんじゃア 体、誰がこんなにして下すったんでしょう? 誰かいる

触ってみたのよ。」 「大丈夫よ。私もさっき夢じゃアないかと思って、その火に

い

台や、床を眺めまわしました。それから、ちょっと自分のお 帰りしなに振り返って、貪るように室内を見廻しました。 ベッキイは忘れまいとして、もう一度煖炉や、ラムプや、寝 今夜だけはちゃんとあったんだから、私決して忘れないわ。」 ほどある毛布を、ベッキイに分けてやりました。ベッキイは 「お嬢さま、これが皆朝になって消えちまっても、とにかく おなかが一杯になると、セエラは、一人ではかけきれ な

ろうと、待ちかまえていました。 知っていました。皆は、 て行ったんだわ。」と、それだけは確かそうにいいました。 「こん中には、スウプに、サンドウィッチに、対麴麺が入っ 朝になると、生徒も、召使も、いつの間にか昨夜の騒ぎを セエラがどんな顔をして出て来るだ

腹の上に手をおいて、

ッキイはせっせと茶釜を磨きながら、 んでいました。 セエラは皆の眼を避けて、真直に流し場へ行きました。べ 口の中で何かを口ずさ

て来たわ。」 「お嬢さん、眼がさめたらあってよ、毛布が。昨夜の通りよ。」 「私のもよ。私着物を着ながら、食べ残した冷いものを食べ

に、顔を俯向けてしまいました。そこへ料理番が入って来たので、 「そう、いいわね。」 ベッキイはまた茶釜

の上

どりで入って来ました。ミンチン女史の驚きといったらあり も、今日はしょげて出て来るだろうと思っていました。が、 出て来るだろうと、待ちかまえていました。さすがのセエラ ませんでした。 不思議やセエラは血色のいい顔に微笑を湛え、踊るような足 教室ではミンチン先生が、やはりセエラはどんな顔をして

い ? _ 「お前には、自分が恥しい目にあってるのが、 判らない のか

な顔をするものではない。生意気だよ。それから、 日何にも食べられないのだということを、忘れないがいいよ。」 「はい、 「そんなら、その気で、そんな、 「すみません。私、それはよく知っております。」 忘れません。」 何かいい事でもあったよう 今日は一

さぞひもじかったろうに、と思いました。 「セエラは、大してひもじそうじゃアないわね。」と、ラヴィ いいながらセエラは、魔法 のお かげが なかったら、 今頃は

ニアは囁きました。「まるで、朝飯に何かおいしいものでも食

べて来たような顔をしているわ。」

フランス語を教えているセエラの方を見ながらいいました。「あの子は、普通の人達とは違ってるのよ。」とジェッシイは、

「私、時々セエラが怖くなるわ。」

「莫迦ね。」

「どんなことが起ろうと、私には目に見えないお友達がある当分忍んで来るわけにもいかないでしょう。それに魔法の神た。アアミンガアドやロッティは、見張りがきびしいから、ばおしまいですが、ここしばらくは大丈夫だろうと思いましばおしまいですが、ここしばらくは大丈夫だろうと思いましゃエラはいろいろ考えた末、昨夜起ったことは、誰にもい

子の形に出来ていました。

るのだと思っていました。かも空いて来ましたが、セエラは今にまた御馳走が食べられう何にも怖いとは思いませんでした。夕方までには多少おなとがあるので、よけい辛くあたられました。が、セエラはもその日は、前日よりもお天気が悪い上、セエラは昨夜のこ

のだからいいわ。」

さすがにどきどきしました。 夜更けて、一人自分の部屋の前に立った時、セエラの胸は

しれないわ。でも、借りたのは事実だったのだわ。夢でもなれないわ。昨夜だけちょっと私に貸してくれたものなのかも「ことによると、もうすっかり片付けられてしまったかもし

て、隅々を見廻しました。魔法の神は、留守の間にまたここセエラは部屋に入ると、すぐ戸を閉め、それに背をもたせ

んでもなかったのだわ。」

してあり、その上には、いくつかの座、褥が乗っていて、寝椅れ、 けい のは、すべて垂幡で隠してありました。美しい扇や壁緑をした布が敷いてあり、二三の置物が飾ってありました。 はてありました。しかも、今日はコップも、お皿も皆二人前てありました。低い食卓の上には、またしても御飯の支度がを見舞ったと見えます。昨夜なかったものまでが持ちこまれ

で表がするわ。」 によることが出来るような気がするわ。そして、何でも変えることが出来るよういとになるのを見とどけたいと思っていたのよ。ところが、いとになるのを見とどけたいと思っていたのよ。ところが、んとになるのを見とどけたいと思っていたのよ。ところが、のとになるのを見とどけたいと思っていたのよ。ところが、のとになるのを見とどけたいと思っていたのよ。ところが、のとになるのを見とどけたいと思っていたのよ。ところが、かとになるがするわ。そして、何でも変えることが出来るような気がするわ。ダイヤモンドでも、いといえば出て来るような気がするわ。ダイヤモンドでも、にといえば出て来るような気がするわ。

「ぜんたいどこから来るんでしょう?(お嬢さん、ほんとにキイの寝床に移されていたのでした。 根枕のあるのを見つけました。昨夜のは、いつの間にかベッーセエラは寝に就く時、また新しい厚い敷蒲団と、大きな羽イは、今夜は自分の紅茶茶碗でお茶をいただきました。ベッキセエラは壁を打って、隣の囚人を呼び出しました。ベッキ

「訊くのはよしましょうよ。私、知らないでいた方がいいと

誰がするんでしょう?

-79

思うわ。でも、 いわね。」 その誰かに、『ありがとう!』とだけはいいた

伽噺はうち続きました。たいてい毎日、何かしら新しいこと な美味が置き並べられてあるのでした。 夜帰って来てみると、食べ残しは綺麗に片付けられ、 た。朝出て行く時には、前の晩の食べ残しが置いてあるのに、 らしい贅沢なものの一杯ある美しい部屋になってしまい のでした。そうこうするうち、屋根裏部屋は、いろいろの珍 か新しい装飾が施され、何か少しずつ居心地よくなっている が起りました。夜、セエラが戸を開けるごとに、室内にはタ その時以来、 世の中はだんだん愉快になって来ました。 また別 お 何

辛いとも思いませんでした。 ましたが、どんな時にも、 セエラはこうした幸福と慰めとのため、だんだん健康にな 希望に充ちて来ました。相変らず皆からはひどく扱われ 屋根裏に帰りさえすればと思うと、

と、ミンチン先生は不服そうに妹にいいました。 「セエラ・クルウは、大変丈夫そうになったじゃアないか。」

鳥みたいになりかけていたのに。」 「ほんとに、だんだん肥って来たようですね。まるで餓えた

るはずはないじゃないか。」 餓えただって? アメリア嬢は、へまな口をごらしたと思って、おどおどと、 食べたいだけ食べさしてあるのに、 餓え

そ、そりゃアそうですけど。」と、合槌をうちました。 あんな風なのは、不愉快だよ。」

あんな風なって?」

いわば反抗心とでもいうんだろうね。 たいていの子供は、

> はずなのに、あの子はまるで、 あんな境遇の変化に逢ったら、 まだ宮、様かなんぞのように、 意地も元気もなくなっちまう

しゃんとしているんったもの。」

こういった時のことを。 「姉様、憶えていらしって? あの、いつかセエラが教室で 先生はどうなさるでしょう、 もし私

のじゃない。」 「そんなこと憶えちゃアいないよ。つまらないことはいうも

りました。 を、その人に伝える術はないものだろうか、 だりしました。時とするとまた、じっと炉の火を見詰め、 炉のそばに坐ることが出来るのでした。バスティユの牢獄は 二つ持っています。毎晩温かな御飯を食べ、火の燃えている 怯えようとしても怯えられなくなったのだから仕方ありませ 何か落ちつきが出て来ました。肥るまいと思っても肥り出し、 のお友達は誰だろう、どうかして自分の胸に感じていること た。時とすると、セエラは書物を取り上げ、声を出して読ん に二人の幸せな子供が、よろこびにひたっているばかりでし いつか消え去り、囚人は影も見えなくなりました。その代り ていたからでした。今は彼女も、 ん。彼女もやはり、誰も知らないあのお伽噺のおかげを蒙し 争われないもので、ベッキイも近頃はむくむく肥り出し、 敷蒲団は二枚あるし、枕も などと思いに耽

宛名は、『右手屋根裏部屋の少女へ』とだけ大きく書いてある 男が玄関に来て、 すると、 また素敵な事件が起きて来ました。 いくつかの小包を置いて行きました。その ある日一人の

宛名を眺めていますと、そこヘミンチン先生が入って来まし 女が一番大きい包みを二つ、客間のテエブルの上に置いて、 小包を取りにやられたのは、ほかならぬセエラでした。彼

所に立ってじろじろ見てるんじゃアないよ。」 「宛名の お嬢さんのところへさっさと持っておいで。そんな

「でも、これは私のです。」と、セエラは静かにいいました。

「お前のだって?(何をいってるんだよ。」

から。一 います。私の眠るのは右手の屋根裏です。 「どこから来たのだか存じませんけど、宛名は私なんでござ ベッキイは左です

ミンチン女史は、セエラのそばへやって来て、昂奮した顔

つきで小包を眺めました。

何が入ってるんだい?」

「存じません。」

開けてごらん。」

着心地のよさそうな美しい衣裳でした。靴、靴下、手套、美 セエラはいわれた通りにしました。中から出て来たのは、

ことを書いた紙片が、ピンで留めてありました。 価な品ばかりでした。その上、上衣のポケットには、こんな しい上衣、それから見事な帽子、雨傘――すべて、上等な高

「平常にお着なさい。 換える必要があったら、いつでも換え

て上げます。」

いをしていたのかもしれない。この孤児の背後には、誰か変議なことがあるなとさとりました。あるいは自分は思いちが それを見ると、ミンチン女史は卑しい心の中に、何か不思

> なさい。着かえたら教室に来て、自分の勉強をなさい。今日 というのだから、それに着かえて、きちんとしているように 亡くなって以来使ったことのない、やさしい声でいいました。 した。で、彼女はセエラを横目でちらと見て、セエラの父が ずはありません。ミンチン女史は、妙に不安な気持になりま 人がいて、セエラのひどい様子を見たら、いい気持のするは まって癇癪持で、怒りっぽいものです。だから、もしそんな の様子を見守っていたりするものです。またそんな伯父はき 子供をそばに置くことをいやがって、遠くの方から、その子 です。殊に年とった、金持で独身の伯父などというものは、 をしはじめたのかもしれない。親戚にはよく変人があるもの セエラの居所をつきとめた上、こんな妙な方法で彼女の世話 あるいは誰か今まで知られていなかった親戚があって、ふと りものの、しかし勢力のある友人があったのかもしれない。 はもうどこへも使に行かないでいいから。」 いただいたのだから、それに痛めば新しいのと換えて下さる 「きっとどなたか御親切な方があるのですよ。こんなものを

は驚きのあまり声も出ませんでした。 着がえをすまして、セエラが教室に入って行くと、生徒達

になり戻っちゃったじゃアないの。」 がら、頓狂な声でいいました。「すっかりプリンセス・セエラ 「まア驚いた。」とジェッシイはラヴィニアの肱をつっつきな

ラヴィニアは真紅になりました。

来、今日のように身綺麗にしていたことはありませんでした。 セス・セエラでした。少くとも、 ジェッシイのいった通り、今入ってきたセエラは、プリン セエラはプリンセス時代以

ていました。 彼女は二三時間前までのセエラとは似ても似つかぬ煅装をし

ってたわ。」
イは囁きました。「私、いつでもあの子には何かしら起ると思「きっと誰かが、あの子に財産を残したのね。」と、ジェッシ

で見ると、あの子がいい気になるからおよしなさいよ。莫迦よ。」とラヴィニアは、とげとげしくいいました。「そんな眼よ。」と、ダイヤモンド鉱山でも、また出て来たんでしょう

ふいに、ミンチン先生が太い声でいいました。

「セエラさん、ここへ来てお坐んなさい。」

で、セエラは昔坐っていた名誉の席につき、俯向いて本を

読み始めました。

と、永いこと炉の火を見詰めて黙っていました。セエラはその夜、部屋に帰って、ベッキイと夕飯をすます

「お嬢さん、何かお話を作ってらっしゃるの?」

――どんなに幸福にしていただけたか、ということを、あのしょう。でも私、どんなにあの方をありがたく思ってるかあの方がどんな方だか探り出したりしちゃア、失礼になるで何にも知られたくないのかもしれないでしょう。そんなら、あの方のことを考えずにはいられないのよ。でも、あの方は「いいえ、私、どうすればいいのだろうと考えているの。私

いいかけてセエラは、ふとテエブルの上の文房具箱に眼をものよ。私、私、ほんとに――」はいわれたくなくても、幸福になったかどうかは、知りたい

方に申し上げたくてならないの。親切な人ってものは、お礼

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は、一昨日ここに運びこまれていたものでした。とめました。紙や、封筒や、インクや、ペンの入ったその箱

って下さるわ。」そうすれば、きっと片付けに来る方が、手紙も一緒に持ってそうすれば、きっと片付けに来る方が、手紙も一緒に持ってょう。私お手紙を書いて、あのテエブルの上にのせておくわ。「まア私、どうして、今まであれに気がつかなかったんでし

ありがとう! ほんとうにありがとうございます。 でございましょう。いわねば済まぬような気が致します。 うとしたりなどするつもりはないのでございます。ただ、 これほどまでに御親切にして下さったこと、何もかもお これほどまでに御親切にして下さったこと、何もかもお ません。私も、ベッキイも、それはそれは幸福です。私ません。私も、ベッキイも、それはそれは幸福です。私 ません。私も、ベッキイも、それはそれは幸福です。私 はばいますのに、こんな手紙をさし上げる失礼をお赦し し上げたいのでございます。ただ、 でございましなででざいます。 なれは でいました のに、今は ――あなたはまア、私共のために大変なことのに、今は ――あなたはまア、私共のために大変なことが明確のようにありがとうございます。 ただ、 おいますのに、こんな手紙を書きました。

思うと、一層幸福になりました。その晩、セエラがベッキイうでした。セエラは、手紙が首尾よく魔法使に届いたのだと夕方帰ってみると、手紙は他のものと一緒に持ち去られたよセエラは翌朝この手紙をテエブルの上にのせておきました。

に新しい本を読んで聞かせていますと、天窓のところにふと

「何かいるのよ、お嬢さん。」

何か音がしました。

「そうね、何だか、 またあのお猿が脱け出して来たのかもしれない 猫が入りたがっているような音ね。ひょ

外を覗きました。 セエラは椅子の上に立って、気を配りながら天窓をあけ、 雪の日で、白く積った窓の外に、震えなが

ら蹲っているものがありました。 「やっぱり猿よ。きっと東印度水夫の屋根裏から遺出して、

このがこのかれてここへ来たのよ。」

ベッキイは走り寄っていいました。

「お嬢さん、入れてやるつもり?」

猿は寒さに弱いのよ。私、だまして入れてやろう。」 「ええ、お猿を外に出しといちゃア、寒すぎて可哀そうよ。

そうしているとセエラは、セエラ自身まるで何か小さな人な に、片手をさしのべながら、あやすように話しかけました。 セエラは、いつも雀やメルチセデクに話しかける時のよう

ようでした。 つっこい獣で、 内気で野蛮な獣の気持をよくのみこんでいる

き、髪の毛を親しげに握って、セエラの顔を覗きこみました。 ました。セエラが抱きしめると、猿もセエラの胸にしがみつ を取り、天窓の上にさし上げた時も、されるままになってい 「いいお猿だこと。私、 「お猿さん、入らっしゃいな。私、苛めやしないことよ。」 そんなことは猿も知っていました。で、セエラがそっと手 小さな生物が大好きよ。」

にその中に。埋って眠りこみました。

た。すると、

猿はその巣が気に行ったらしく、

膝の上にのせてやりますと、 猿は火にありついてうれしそうでした。セエラが坐って、 猿は物珍らしげに、彼女とベッ

キイとを見比べました。 「この子は不器量ね、お嬢さん。」

ないでしょう。御親戚のどなたに似てらっしゃるなどとうっ さん、御免なさい。でも、 わ。お前のお母さんは、まさかお前を自慢するわけにもいか かりお世辞をいうわけにもいかないしね。でも私、ほんとに 「ほんとに、不器量な赤ん坊のような顔をしているわ。 お 前、 赤ちゃんでなくてよかった

セエラは椅子にもたれて、思い返しました。

お前が好きよ。」

あるかしら? その事がしょっちゅう心にあるんだわ。でも、猿に心なんて 「この子だって、きっと器量が悪いので悲観しているのよ。 可愛いお猿さん、あなたには心がおありでご 👸

「お嬢さん、この猿、どうするの?」 が、猿はただ小さい手をあげて、頭を掻いただけでした。

ざいますか?」

けどね、でも、お前は帰らなきゃアいけないのよ。お前は家中 で一番可愛がられるようにならなきゃアいけませんよ。」 んの所へ伴れて行くつもり。私はお前を返すのが惜しいのだ 「今夜は、私の所にお泊よ。明日になったら、印度の小父さ セエラは眠る時、自分の足許に猿の巣をつくってやりまし

十七 「この子だ」

達の帰るまでモスコウで待つことにしたのでした。 で、病人の気をひきたてようとしていました。子供達は、特に追いかけて行こうとしても無駄だったので、氏はその人のでした。印度紳士は、ここしばらくの間、生きた心地もないほどでしたが、今日こそは、ある事を熱心に待ち受けておりました。印度紳士は、ここしばらくの間、生きた心地もなたに追いかけて行こうとしても無駄だったので、来て病人を慰めているもの帰るまでした。大屋敷の子が三人印度紳士の書斎に坐っ一整郎の午後には、大屋敷の子が三人印度紳士の書斎に坐っ一、一、

すっていました。でいました。少年はかなり乱暴に頭をゆている虎の頭に「鯵がっていました。少年はかなり乱暴に頭をゆルド(ギイ・クラアレンスのこと)は皮の敷物の飾りについの下に坐っていました。ノラは足台を見付けて坐り、ドウナーカリスフォド氏は安楽椅子に寄りかかり、ジャネットはそーカリスフォド氏は安楽椅子に寄りかかり、ジャネットはそ

カリスフォド小父さん、喧しすぎやしなくて。」いう時には、そんな金切声を出すものじゃアありませんよ。ャネットはいいました。「御病人に元気をつけてあげようって「ドウナルド、そんなに噪ぐんじゃアありませんよ。」と、ジ

「いや、そんなことはない。噪いでくれた方が、考えごとを病人は、彼女の肩を軽く叩いて、

忘れていいのだよ。」

いか。」た。「みんなで、二十日鼠のようにおとなしくしようじゃアなた。「みんなで、二十日鼠のようにおとなしくしようじゃアな「僕は、これから静かにするよ。」と、ドウナルドはいいまし

ドウナルドは手巾で、鐙を造り、虎の頭の上で跳ね躍りまし「二十日鼠が、そんな大きな音をさせるものですか。」

千匹ぐらいいりゃア、するよ。」「鼠がありったけ出て来たら、このぐらいの音はさせるよ。

た。

い、おこなしくしなきやア太目よ。「五万匹集ったって、そんな音しやしないわ。一匹の鼠ぐら・「

「お父様は、もうじきお着きになるのね。あの行方不明の娘のリスフォド氏は笑って、また彼女の肩を叩きました。い、おとなしくしなきゃア駄目よ。」

「私は今、その話よりほか、とても出来そうにない。」

さんの話をしてもよろしくって?」

とを、『妖『女ではないプリンセス』って呼んでるの。」「私達は、その子がそれは好きなのよ。みんなでその子のこの度紳士は、疲れた顔の額に皺をよせました。

ずると、ノラはいいました。いから、『妖"女じゃアないプリンセス』にしたの。」ンセス』といってたんですけど、そいじゃアしっくりいかなたいに、お金持になるのでしょう。初めは『妖"女の国のプリけど、見付かった時には、まるでお伽噺の中のプリンセスみ「こういうわけなの。あの子は、ほんとうは妖"女じゃアない「なぜ、そう呼ぶの?」

「あの、あの子のお父様がダイヤモンド鉱山のために、お金

をすっかりお友達にあげてしまったって話は、ほんとなの? ったので、自分は泥棒のようなものだと思って、逃げ出した そして、そのお友達は、そのお金をすっかり失くしたと思

のですって?」 ジャネットは急いで、

した。 「でも、その方は、泥棒でも何でもなかったのよ。」といいま

「まったく、そうじゃアなかったのだよ。」 印度紳士は、つとジャネットの手を取りました。

っと、お苦しみになったでしょうね。」 よ。そんなことになって、どんなに胸を痛めたでしょう。き いました。「その方は、お金を失くすつもりなんかなかったの 「私、その方がお気の毒でならないの。」と、ジャネットはい

すると、印度紳士はジャネットの手を、ひしと握りしめて、

いいました。

「あなたは、何でもわかる若い御婦人だね。」

ドウナルドが大きな声を立てました。「あの『乞食じゃアない 小さな女の子』の話をさ。あの子がいい着物を着てるって、 「姉さん、カリスフォド小父さんに、あの話をした?」と、 きっとあの子も、 今まで行方不明だったのを、誰

かに見付け出されたのだよ。」 「あら、馬車が来た。」と、ジャネットが叫びました。「宅の

前で止ったわ。 皆は窓の所へ飛んで行きました。 お父様のお帰りだわ。」

ŧ 小っちゃな女の子はいないよ。」 お父さんだよ。」と、ドウナルドが告げました。「で

> はそうして迎え入れるのでした。三人が飛び上ったり、手を拍 の中にいても、はっきり感じられました。 ったり、抱き上げられて接吻されたりしている気配が、部屋 へ飛び出しました。お父様がお帰りになると、いつも子供達 三人はじっとしていられなくなったので、先を争って玄関

に身を落しました。 カリスフォド氏は立ち上りかけて、またどかりと椅子の中

「駄目だ、俺は何というやくざな人間だろう。」

にしてくれ。その間、ラム・ダスと遊んでたらいいだろう。」 「今は、駄目だよ。カリスフォドさんとお話をすましてから カアマイクル氏の声が、戸口に近づいて来ました。

りも血色がよく、活々した顔をしていましたが、眼には失望 はよけい気づかわしげになりました。 の色を湛えていました。病人の待ちかねた眼付を見ると、氏

戸が開いて、カアマイクル氏が入って来ました。氏は前よ

人がひきとったというその子は、どうだった?」 「どうだった?」と、カリスフォド氏が訊ねました。「ロシヤ

シヤ人の家族は、委細を聞かしてくれましたよ。」 ルウ大尉の娘よりは、ずっと年下でしてね。名前はエミリイ ・クルウなのです。私はその子と会って話して来ました。 「その子は、我々の探している娘じゃアなかったのです。ク

まで握っていたカアマイクル氏の手を離して、だらりと自分 の手を落しました。 印度の紳士の失望といったらありませんでした。紳士は今

な。じゃア、やりなおすまでのことだ。まア、そこに掛けた 「それじゃア、また捜索をやりかえさなければならないんだ

まえ。」

ているとは――大屋敷の主人は、病人に元気をつけるようにの子供を不幸にしているという思いのため、絶え間なく悶えしは寂しさもまぎれるだろうに。こうして一人の男が、一人って来るのでした。この家の中に一人でも子供がいたら、少なせいか、この不幸な病人が、気の毒で、だんだん好きになカアマイクル氏は腰を下しました。彼は自分が健康で幸福

「大丈夫、まだ見つけられますよ。」

いいました。

りでも。」か新しい心当りはないだろうか?――何かちょっとした心当か新しい心当りはないだろうか?――何かちょっとした心当れない。」カリスフォド氏はいらいらして来ました。「君、何「すぐまた捜索を始めにゃアならん。ぐずぐずしちゃアいら

部屋の中を歩き廻りました。 カアマイクル氏も落ちつかない風に立ち上り、考えながら

が。」の中で、いろいろ考えているうち、ふと思いついたんです車の中で、いろいろ考えているうち、ふと思いついたんです私にも判りませんが、というのはドオヴァからここまでの汽「何かありそうでもありますな。どれだけの根拠があるかは、

いるわけだ。」「どんなことです?)あの娘が生きてるとすると、どこかに

「ロンドンにも無数の学校がある。」カリスフォド氏はそういンドンに捜索の手を移すというのが、私の思いつきです。」パリイを切り上げて、ロンドンに移るんですな。つまり、ロいう学校は、もう捜索の余地がありません。だから、今度は「その通り、どこかにいるはずなのですよ。パリイの学校と

「そら、隣にだって一つあるじゃアないか。」ってから、ふと何かを思い出して、かすかに身を起しました。

た。黒い眼には隠しきれない昂奮の色を湛えていました。ちょうどその時、あの魔法が――あの手際のいい魔法が、る。だが、その子は生徒じゃアないんだ。ちょっと色の黒い滅児る。だが、その子は生徒じゃアないんだ。ちょっと色の黒い滅児で、とても、クルウ大尉の子供とは思われないけれど。」で、とても、クルウ大尉の子供とは思われないけれど。」で、との通りだ。それに隣には一人私の眼をつけている娘があら始めるとすると、隣より近いところはないわけですからな。」「じゃア、隣から始めることにしたらいかがです。近い所か「じゃア、隣から始めることにしたらいかがです。近い所か

少しはおまぎれになりはしませんでしょうか。」ているように申しておきましたが、会ってお話になったら、屋に来たといって、猿を伴れてまいりました。ちょっと待っが、可哀そうだと仰しゃった娘が。屋根づたいにあの娘の部「旦那様、あの子が自分でやってまいりました、あの旦那様

「あの子とは?」と、大屋敷の父が訊ねました。

もないと、私はつまらなかったのだ。だが、ラム・ダスのあたいから、伴れて来なさい。」そしてまた、カアマイクル氏の方に手を振っていいました。「実は君の留守中、寂しくてたまらないとこたのだよ。子供だましのような。で、ラム・ダスが来て、不幸なあの子の話をしてくれたの方に手を振っていいました。「よろしい、その子に会ってみの方に手を振っていいました。「よろしい、その子に会ってみらで、うム・ダスを共っしているんだ。」印度の紳士はそういうと、今度はラム・ダスしているんだ。」印度の紳士はそういうと、今度はラム・ダスしているんだ。

の軽い足がなかったら、あんな、繋のような計画は実現出来な

でもセエラのそばを離れたくなさそうな顔をしていました。そこへ、セエラが入って来ました。猿は、出来ればいつまかったろうよ。」

くお休みになってるところを、お起しでもすることになるとまり遅いのでやめました。あなたは御病気ですから、せっかましたの。宵の口だと、すぐお返しに上るのでしたけど、あの所に来ましたので、寒いといけないと思って、入れてあげを紅らめ、さわやかな声でいいました。「昨晩、私の部屋の窓「また、あなたのお猿が逃げて来ましたのよ。」とセエラは頼

- 印度紳士のうつろな眼は、セエラの方に惹かれて行きまし悪いと、思いまして。」

「それはどうも。よく気が付いて下すったねえ。」

ました。 セエラは、戸口の近くに立っているラム・ダスの方を向き

「お猿は、あのラスカアの方にお渡ししましょうか。」

「あの男がラスカアだということを、どうして御存じかね?」

セエラは、いやがる猿をラム・ダスに渡しながら、

紳士はほほえみかけました。

印度紳士は顔色を変えて、立ち上りました。セエラはちょ「そりゃア知っておりますわ。私、印度で生れたのですもの。」

「あなたは、印度で生れたと? それは、ほんとですか?

っと吃驚しました。

ちょっとこっちへ来て御覧。」

手をさし出されたので、セエラは紳士の方に行き、紳士の

縁いの眼で不思議そうに紳士の眼を見ました。この人は、手の上に、自分の手を置きました。彼女はじっと立って、

「あなたは、隣に住んでおられるのだね。」どうかしたにちがいない。 ――

「はい、ミンチン女塾におりますの。」

「でも、生徒ではないのだね?」

っとためらってからいいました。 セエラは、口許に妙な微笑を漂わせました。彼女は、ちょ

「私、自分が何なのだか、よく判りませんの。」

「それは、またどうして?」

「はじめは生徒で、特別の寄宿生でしたけれど、今はもう

「生徒だった? そして、今は何なのかね?」

て、料理番の使に出されたり――料理番のいうことは何でも「今は私、屋根裏部屋で、小使娘の隣に寝ております。そしセエラは、また妙に悲しげな微笑を口許に湛っせました。

カリスフォド氏は、力を失ったように椅子の中に身を落し

強も受けもっています。」

聞かなくちゃアならないのです。

それから、小さい人達の勉

ました。

う駄目だ。」「カアマイクル君、君この子に訊いてくれたまえ。私は、も

しい声で、はげますようにセエラに話しかけました。 大屋敷の父親は、小さな娘と話すのが上手でした。彼は美

う意味なの?」「ね、嬢や、その『はじめ』っていうのは、いったいどうい「ね、嬢や、その『はじめ』っていうのは、いったいどうい

-8

「お父様が、あそこへ私を伴れていらしった時のことですわ。」

「そして、そのお父様はどこにおられるの?」

れるものは一人もないし、ミンチン先生にお金を払って下さは、もう何にもなかったのです。それに、私の世話をしてく父様は、何もかも失くしてしまったので、私のいただくもの「亡くなりましたの。」セエラは静かに静かにいいました。「お

「カアマイクル君!」印度紳士は声高に呼びかけました。 「カる方もないので――」

の。

アマイクル君!」

カアマイクル氏は、小声で紳士に、

「この子を怯えさせちゃアいけませんよ。」と耳打ちしました。

それから、声を改めてセエラにいいました。

ったのだね。そういうわけだったのだね。」「じゃア、そんなわけで屋根裏にやられ、小使にされてしま

かったのです。」はちっともありませんでしたし、私は、もう誰のものでもな「誰も、面倒をみて下さる方がなかったものですから。お金

「お父さんは、どうしてお金を失くしたのだね?」

達があって――お父様は、その方がそれはお好きでしたのよ。「御自分で失くしたわけじゃアないんですの。 仲のいいお友の度紳士は、 息をのみながら口をはさみました。

その方なの。お父様は、その方を信じす

印度紳士の息づかいは一層だしくなりました。

ぎたものですから。」お金を取ったのは、

かもしれんよ。何かの手違いからそんなことになったのかも「でも、その友人には、何も悪気があったわけじゃアないの

しれんよ。」

いたら、病気の紳士のためにも、どうかして押し静めようとしているのか、不思議なくらいでした。激して響くと知ってセエラはそれに答えた時、自分の声がどうしてこんなに激

「どのみち、お父様にとって、苦しみは同じことでしたわ。したにちがいありません。

お父様は、その苦しみのためにお亡くなりになったのですも

訊ねました。「お父さんの名は何ていうのだい?(え?」と、印度紳士は

ました。亡くなったのは印度ですの。」「ラルフ・クルウって名ですの。クルウ大尉ともいわれてい

病人のやつれた顔が痙攣しました。ラム・ダスは急いで主

人のそばへ飛び寄りました。

セエラは、紳士が死ぬのではないかと思ったほどでした。「カアマイクル君、これがあの子だ。この子にちがいない。」

ばにふるえながら立っていました。彼女はたまげたようにカラム・ダスは主人の口に薬を注ぎました。セエラは、そのそ

「私が、何の子だと仰しゃるの?」アマイクル氏を見上げました。

いたのですよ。」しちゃアいけません。我々は二年の間、あなたを探し廻ってしちゃアいけません。我々は二年の間、あなたを探し廻って「この方は、あなたのお父様のお友達なのですよ。びっくり

「それなのに、私はその二年の間、壁のすぐ向う側の、ミンた。セエラはまるで夢の中にいるように思わず囁きました。セエラは手を額にあてました。唇はわなわな鷲えていまし

十八 「つもりはなかった」

のでした。カリスフォド氏は、この思いがけない出来事に昂腕に抱きとって、これまでのいきさつを細かに話してくれたすぐ、街を横切って印度紳士の家に来、セエラをその暖かいカアマイクルの奥様でした。カアマイクル夫人は招ばれると委しい話をセエラにしてくれたのは、美しい、感じのいい委しい話をセエラにしてくれたのは、美しい、感じのいい

「私は誓って、あの子を手放したくない。」奮して、病気のからだに障るほどでした。

ル氏にそういいました。という話が出た時、カリスフォド氏は力なげに、カアマイクという話が出た時、カリスフォド氏は力なげに、カアマイク身体に障るといけないから、セエラを別室につれて行こう

した。 ジャネットは、セエラを書斎から伴れ出すと、こういいまいいました。「もうじき、お母様も入らっしゃるでしょう。」「この方のお世話は、私がしてあげてよ。」と、ジャネットは

らないくらいよ。」どんなにうれしがってるか、あなたにはとてもおわかりにな「あなたが見付かって、私達はうれしくてたまらないのよ。

省みて自分を責めているようでした。ドナルドは両手をポケットに入れて立っていました。彼は

えたでしょう。そうすれば、あなたを探す世話もなかったのたらよかったのにね。あなたはきっとセエラ・クルウだと答「僕がお金を上げた時、ちょっとあなたの名前を訊きさえし

きしめて接吻しました。ひどく感動しているようでした。彼女は、ふいにセエラを抱いそこへ、カアマイクル夫人が入って来たのでした。夫人は

議はありませんわね。」「嬢やは、すっかりたまげているのね。でも、驚くのに不思

した。せんでした。彼女は閉った書斎の扉の方をちらと見ていいませんでした。彼女は閉った書斎の扉の方をちらと見ていいま、セエラは、何といわれても、次の一事よりほか考えられま

ほんとうにそうなの?」「あの方ね、あの方が、お父様のその、悪いお友達だったの?

思いました。ら、何度も何度も接吻してやらなければならない、と夫人はぷら、何度も何度も接吻してやらなければならない、と夫人はぷた。この子は永いこと接吻などされたことはなかったのだかカアマイクル夫人は泣きながら、またセエラに接吻しまし

亡くなっておしまいになったのですよ。」 さなのですよ。あの方も、熱病で死にそうだったのよ。けいのですよ。あの方も、熱病で死にそうだったのよ。けいのですよ。ただお失くしになったと思っただけなのですよ。いのですよ。ただお失くしになったと思っただけなのですよ。 に、あの方はお父様を愛していらしったからこそ、悲しながのですよ。ただお失くしになったと思っただけなのですよ。

セエラの頭にはなぜか、こんな近くにいたのにということ

のね。私はこんな近くにいたのに。」

「そうして、あの方は、どこに私がいるかは御存じなかった

が、こびりついていました。

どうかしてあなたを幸福にしてあげようとお思いになったの 通りかかるのを見ていながらも、それが気の毒な友人のお子 探し廻ってらしったんですよ。あなたが、いたましい様子で 思っていらしったのですよ。」カアマイクル夫人は、いって聞 の顔色はみるみる変って来ました。 の天窓から、いろいろのものを持ちこんだわけなのですよ。」 ね。で、あの方はラム・ダスにいいつけて、あなたのお部屋 たもやはり小さい女の子だもので、気の毒でたまらなくって、 だとはお気づきにならなかったのね。でも、 れていらしったんですの。でも、 かせました。「それに、いつもいつも間違った手掛りに迷わさ 「あの方は、 セエラは、うれしさのあまり飛び立つばかりでした。 あなたがパリイの学校にいらっしゃるとばかり あの方は到る所、 あの方は、 あなたを 彼女

あなたのこともお気の毒になったのですよ。」
「そうですとも。あの方は、親切ないい方なのですよ。あのあの方だったのだわね。」
ですって? 私の夢を現にして下すったのは、それじゃア、ですの? あの方がラム・ダスさんにおいいつけになったん「じゃア、あれは皆ラム・ダスさんが持って来て下すったん

から、あなたに来ていただきたいと仰しゃってです。」「カリスフォドさんは、すっかり気持がよくおなりです。だ来いというような様子をしました。書斎の扉が開いて、カアマイクル氏が姿を見せ、セエラに

セエラは、

カアマイクル氏の言葉が終るのを待たず、

書斎

きとはまるで変っていました。に、「ここででは、これで入って行きました。入って行った時のセエラの顔は、さっ

「あなたがあの、美しいものをたくさん下すったのですってて、うれしそうにいいました。セエラは、紳士の椅子の「傍」に立ち、両手を腕に組み合せ

「そうだよ、可愛い嬢や、私が送ってあげたのだよ。」ね。」

ように。

なざしを見ると、すぐ紳士の傍に跪きました。昔父とセエまなざしを見ると、すぐ紳士の傍に跪きました。昔父とセエらなやさしい眼で、セエラを見ました。セエラは父からこれました。が、彼は、セエラを見ました。セエラは父からこれました。が、彼は、セエラを抱きしめてもやりたいというよました。が、彼は、セエラを抱きしめてもやりたいというよ

友達だったのですわねエ。」「じゃア、私のお友達はあなたでしたのね。あなたが私のお

「あの人も、もう三週間とたたぬ中に、きっと元の身体になそれを見ると、カアマイクル氏は細君に囁きました。あてて、幾度も幾度も接吻しました。 そういうとセエラは、紳士の痩せ細った手の上に顔を押し

るだろうよ。ほら、あの様子を御覧。」

徒の一身上に起きた変化を、報告しなければならないでしょンチン先生の問題がありました。一応先生にも面会の上、生何か新しい計画を考えなければなりません。まず第一に、ミてしまいました。『小さな奥様』が見付かったからには、またーカアマイクル氏のいった通り、紳士の様子はすっかり変っ

のところへは、カアマイクル氏が行って、話して来るというた。セエラは紳士の家にとらなければならぬ、ミンチン先生た。印度紳士はその点だけは、何といっても聞きませんでしう。そして、セエラはもう学校には戻らないことになりまし

のでした。

行かないでもすみました。 行かないでもすみました。 だが、そこへちょうどミンチン先生自身が、セエラを探しんわ。なぜって、私の方でも先生が嫌いなのですもの。」私がお嫌いなのよ。でも、それは私が悪いからかもしれませはいいました。「先生は、きっとお怒りになってよ。あの方は、「帰らなくてもいいんですって?」まアうれしい。」とセエラ

*

*

*

て、丸い顔に、妙な表情を浮べながら入って来ました。っていました。そこへ、アアミンガアドが一通の手紙を持っその晩、学校では皆いつものように、教室の煖炉の前に集

「おとなりよ。印度の小父さんの所にいるのよ。」「セエラからですって?」「セエラはどこにいるの?」「私、たった今、セエラさんから、この御手紙いただいたの。」

「どうしたの?」と、二三人一時に叫びました。

「よう、話してったら。」ことを知っているの?」「どうして、手紙なんかくれたの?」「え? あの子は逐い出されたの?」「ミンチン先生は、その「え? あの子は逐い出されたの?」「ミンチン先生は、その

アドはのろのろ説明し始めました。(余りの騒ぎにロッティなどは泣き出しました。アアミンガ

たんですって。」
「ダイヤモンドの鉱山はやっぱりあったのよ。やっぱりあっ

開いた口と、見張った眼とが、彼女の方に向けられました。

スフォドさんももう駄目だと――」「あの話は鄭実だったのよ。何か起って、ちょっとの間カリ

日のお字から、私セエラさんに会いに行くのよ。」 「カリスフォドさんて?」とジェッシイは叫びました。 「カリスフォドさんて?」とジェッシイは叫びました。 「カリスフォドさんですって。それから、カリスフォドさんもをこにいるか判らなかったんですって。それから、お山にはどこにいるか判らなかったんですって。それから、お山にはどこにいるか判らなかったんですって。それから、お山にはアナセデクだけをお友達にして、屋根裏に住んでいたのね。今のはセエラさんのものダイヤモンドがあると判ったの。その半分はセエラさんのものがであると判ったの。その半の。もう決して帰って来ないのよ。先よりも、やっぱりそう思ってかけたがあると判ったの。その半があると判ったの。

あるのでした。 「はど、奇想天外でした。それに、その話はセエラその人と、 手紙の話は、セエラのつくり話などとは比べものにならない がアドをかこんで、セエラの手紙を読み返しておりました。 女達は規則なぞ忘れて、夜半まで教室にとどまり、アアミン あとは、ミンチン女史も静めかねるような騒ぎでした。少

上って行きました。彼女は皆から離れて、もう一度、あの小この話を耳にしたベッキイは、いつもより早めに屋根裏に

ながらお話をしてくれたり、本をよんでくれたりするプリンラムプもないだろう。夕餉もないだろう。火のほてりを受けるのことを思うと、上って行くうちに自然喉がつまり、眼がラのためにはこんなことになってうれしいとは思いましたが、ラのためにはこんなことになってうれしいとは思いましたが、のだろう。」ミンチン先生の手に渡るようなことはなさそうにさな魔法の部屋が見たかったのでした。「あの部屋はどうなるさな魔法の部屋が見たかったのでした。「あの部屋はどうなる

た。たがら戸を押しあけました。と、思わず彼女は声を立てましながら戸を押しあけました。と、思わず彼女は声を立てましべッキイはしゃくり上げて来る欷・歔を、ごくりとのみこみ

セスもいないのだろう。あのプリンセスも!」

女の方を見て立っているのです。ちゃんと出来ています。そしてラム・ダスが笑いながら、彼うムプは室内に照りはえ、火は燃えさかり、夕餉の支度も

ばなりません。」 自分の幸運を、あなたにお知らせしたがっていらっしゃるの れからここにあるものを、 から、あなたはお嬢様のお附きになるはずです。今夜は、こ なたにも来ていただきたいと仰しゃっておいででした。 ないようにとお思いになったのでしょう。御主人は、 きになったのです。 ですよ。このお盆 あなたのことをお話しになりましたのですよ。お嬢様は、 「お嬢様がお気づきになりましてね。ご主人様に、すっかり の上のお手紙を御覧下さい。お嬢様がお書 お嬢様は、あなたが悲しくお休みになら また屋根越しに持って帰らなけ 明日あ 明日 ĥ 御

すやすといろいろのものを運びこんだのだな。」と思いました。した。ベッキイはそれを見ると、「あの人はあんなにして、やをして、身軽に、音も立てずに、天窓から抜け出して行きま輝かしい顔で、こういい終りますと、ラム・ダスは觀手心

しっ

と思われるのが当然です。 あれば、 見える四辺の景色のことなど聞くと、屋根裏部屋は面白い所 さの話なども、気持よく聞くことが出来るものです。また、 が、セエラの身の上話を、繰り返し繰り返し聞きたがりまし とのために、よけい皆から大事にされるのでした。誰も彼も 思いませんでした。セエラは、ひどい苦労をして来ているこ ため、こうまでうれしいことが湧き出て来ようとは、 子供達は『乞食じゃアない小さな女の子』と近づきになった のように思われるのがあたりまえです。そんな面白いことが メルチセデクのことや、雀共のことや、天窓から頭を出すと た。誰しも炉辺で温かにしている時には、 『大屋敷』の子供部屋は、今までにないような大騒ぎでした。 寒くても、 殺風景でも、 そんなことは気になるまい 屋根裏のひどい寒 夢にも

その話をしたのでした。印度の紳士も、セエラを見守りながたり、蹲ったりしていました。そこで、セエラは例の調子で、大屋敷の人達はお茶に招ばれ、セエラと一緒に炉の前に坐っに見つけられた翌日、初めてこの話をしたのでした。その日、になって現れて来たところでした。セエラはカリスフォド氏子供達が一番よろこんだのは、あの饗宴と空想とがほんと

見上げ、紳士の膝に手をかけていいました。ら、耳を傾けていました。話し終るとセエラは印度の紳士を

お話は、まだ伺いませんのね。きっと立派なのにちがいないは紳士を『アンクル・トム』と呼んでいました。「小父さんの聞かして下さいな、アンクル・トム。」紳士の望みで、セエラ「私のお話はこれだけですの。今度は小父さんの方のお話を

わね。」

見付けて来るのでした。ラム・ となども話して聞かせました。 憂く、いらいらしている時でした。一人寂しく坐っていると、 けば、造作なく天窓からその子の部屋に入れるということも んなこともございましたよと、 の様子が召使になどされる下層社会の子らしくないというこ ました。ラム・ダスはその娘の顔色の悪いこと、またその子 った時の話を聞くと、何かその子に心を惹かれるように感じ にラム・ダスから、 らぬ小さい娘のことを絶えず考えていたところでした。 気をかえようとしました。 ラム・ダスはよく外を通って行く人の品定めをして、 そこで、 一人の女の子でした。カリスフォド氏はちょうど見付 カリスフォド氏はこう語り出しました。 そこからすべての計画が始まったわけでし 猿を逃がして、その子の部屋に捕えに行 中でも一番よく前を通って行 その子の生活の惨めな事実を ラム・ダスは話すたびに、こ ダスはまた、 屋根を伝って行 病気 病人の 。それ < で物 。 の か

しておいてやることも出来ると存じます。あの子は濡れ凍え使に出た留守に、屋根から入って、あの子の部屋に火をおこ「旦那様!」と、ある日ラム・ダスは申しました。「あの子が

しておいてくれたのだと思うでございましょう。」(ないたのだと思うでございましょう。」(て帰って来て、火を見ると、きっと留守の間に魔法使がおこ)

問してこれだけのこと―― 中で受け取ったのでした。 見ていました。で彼は、 ら、折角の饗宴がめちゃめちゃにされるところも、 ラムダスは持って行くものをすっかり自分の部屋に用意して、 宴を、始めない先にミンチン先生に見付けられたあの晩 でした。 スフォド小 たく身を伏せたりしました。——子供達は、 セエラの部屋に忍びこみ、助手が天窓の外からさし出す品を、 でしまったのを知ると、 えておりました。 天窓から様子を見ていたのでした。彼の背後には、 屈な永い日が、愉快に飛びすぎて行くようでした。折角の した。ラム・ダスの思いつきや計画は、子供じみていて愉快 のこともやろうと思えば造作なく出来ます、と主人に話 と、ラム・ダスは夢中になって、 も、暗い顔に輝かしい微笑を湛えたほどでした。 にこの冒険に夢中になっている人が、彼を手伝うためにひか この思いつきは、非常に奇抜でしたので、 それを実行する準備に忙しかったので、 父さんから、 ラム・ダスは燈籠の火を隠して、床の上に平 彼は石盤瓦の上に腹這いになって、 火を細くした燈籠を持って、そっと 聞き出したのでした。 セエラが疲れはててぐっすり寝こん セエラが寝ながらちょっと身動き いやまだいろいろのことを、 火をおこす他に、 後から後から質 カリスフ それを見る いつもは退 彼と同じ ちゃんと これこれ 天窓か 、オド氏 は、 しま カ

ないわ。」のお友達が小父さんだったのだと思うと、うれしくてたまら「私、ほんとにうれしいわ。」と、セエラはいいました。「私

た。二人はいろいろのことで、不思議にしっくりと気が合う セエラと小父さんとは、たちまち非常な仲よしになりまし

のでした。印度紳士は、今までにこんなの気の合う人とめぐ

ることは、いくらでもあるのです。二人は戯談に、紳士を魔 ある晩のこと、セエラが小父さんと坐っていると、ふと戸の 考えていました。セエラはふと部屋の中に、美しい花が咲い になりすまして、何かセエラを吃驚させるようなことばかり うでした。あんなに重荷にしていた財産も、今は持っていて りました。紳士はいつも愉快そうで、気がひきたっているよ りあったことはありませんでした。一月とたたぬうち、彼は アの猪狩犬が立っていました。しかも、金銀で造った首輪に 下から思いもつかなかったような小さな贈物が出て来ました。 ているのを見つけたこともありました。と思うと、また枕の 法使だということにしていました。で、彼はすっかり魔法使 よかったと思っていました。まだまだセエラのためにしてや カアマイクル氏が予言したように、 次のような字が、浮き上っていました。 セエラが戸を開けてみますと、大きな犬――見事なロシ 強い前脚で戸を掻くような音がしました。何かと思っ 、まったく別人のようにな

は、いろいろ面白いことが起りました。は、いろいろ面白いことが起りました。二人で過す時間の間に読んだり話し合ったりする時間は、何か二人きりのものだとた。大屋敷の人達や、アアミンガアドやロッティの来る日も、印度紳士の一番好んだのは、襤褸を着た宮、様の思い出でし『我名はボリス。プリンセス・セエラの「僕。』

ました。が身じろぎもせず、じっと火を見つめているのに、気がつきが身じろぎもせず、じっと火を見つめているのに、気がつきある晩、カリスフォド氏は、書物から眼を上げて、セエラ

セエラは頬をぽっと輝かせました。「セエラ、何のつもりになっているの?」

た日のことよ。」
「あなたは、御存じなかったのね。あの夢が、まことになっ印度の紳士は悲しげな声でいいました。「どの日だったの?」「でも、たいていの日はひもじかったんじゃアないのかい?」いたのよ。ある日大変ひもじかった時、私の見た子のことを。」「こういうつもりだったの。 ――こういうことを思い出して

た。 まらなくなったらしく、眼に手をかざして、床を見つめまし出来るだけあっさりと話したつもりでしたが、印度紳士はたじそうな子に会ったことなど、セエラは何の飾りけもなく、溝の中から銀貨を一つ拾ったこと、拾ってから自分よりひもセエラはそういってから、パン屋の話をして聞かせました。

お好きなことを遊ばしませ。」「どういうことをしてあげたいのだね? 女王殿下。何でも、いってつもりになっていたのよ。」「で、私、こういうことを考えていたのよ。何かしてあげた「セエラは語り終ると、こういいました。

ういおうかしらと思っていましたの。ひもじそうな子が――だから、私あの、あのパン屋のおかみさんの所へ行って、こ「私、あの――私には大変なお金があると仰しゃったわね。 セエラは、ややためらいながらいいました。

_

くれって。そして、その書付は、私の方に廻してくれって。ら覗いていたりしていたら、呼び入れて、食べさしてやって殊にひどいお天気の日などに、店の前に来て坐ったり、窓か

「いいとも。早速、明日の朝行って来たらいいだろう。」

―そんなことをしてもいいでしょうか?」

ひもじさを忘れることは出来ないのよ。」いるでしょう。ひもじい時には、何かつもりになったって、「うれしいわ。ね、私、ひもじい苦しみは身に沁みて味って

パンや、甘パンを恵んでやることが出来るのですものね。」「そうね。」と、セエラはほほえみました。「私、人の子達に、嬢やはプリンセスだということだけ考えている方がいい。」れる方がいいよ。私の膝のそばに来て坐っておくれ。そして、「そうとも。うむ、そうだろうな。でも、もうそのことは忘

tr。 このでは、実に見るにたえないようなことが眼に映りました。 では、実に見るにたえないようなことが眼に映りました。 の間にかベッキイは血色もよく、むっちりと肥っていまし が間域になりすまして、いそいそ若い御主人に従い、膝掛や いうまでもなくそれはベッキイでした。ベッキイはすっかり いず間域になりすまして、いそいそ若い御主人に従い、膝掛や いず間域になりすまして、いそいそ若い御主人に従い、膝掛や いず間域になりすまして、いそいそ若い御主人に従い、ととを思い起 のの間にかベッキイは血色もよく、むっちりと肥っていました。 のの間にかベッキイは血色もよく、むっちりと肥っていました。 のの間にかベッキイは血色もよく、むっちりと肥っていました。 のの間にかベッキイは血色もよく、むっちりと肥っていました。 が見いるによっては、実に見るにたえないようなことが眼に映りました。 ないまうなことが眼に映りました。

馬車はまもなく、パン屋の店先につけられました。馬車か

ていました。の時のように、おかみさんが出来たてのパンを窓にさし入れの時のように、おかみさんが出来たてのパンを窓にさし入れら二人が出て来た時には、不思議にもまた、ちょうどいつか

い顔はじき、はればれとして来ました。間、穴のあくほどセエラの顔を見つめていましたが、人のいらかして、帳場の中に坐りました。おかみさんはしばらくのセエラの方を見ました。セエラを見ると、甘パンはうっちゃセエラが店に入って行きますと、おかみさんは振り返って

でも――」 「確かに、お嬢様にはお目にかかったことがございますわ。

ンを六つも下さいましたわね。それから――」「ええ、お目にかかりましたわ。あの時あなたは、私に甘パ

次の朝、ミンチン女史が窓の外を見ていますと、女史にと ど _ _ せんでしたの。初めは、何だかわけがわかりませんでしたけ っておしまいになりましたのね。 「それから、あなたは六つのうち五つまで、あの乞食娘にや 私はそのことが忘れられま

しかけました。 おかみさんは、今度は印度紳士の方に向き直って、こう話

――それに、あの、以前よりはずっとお丈夫そうに、そして、嬢様、でも、あなた様はまア、お顔色がよくおなりですことざいますわ。私、そのことを、幾度も幾度も考えてみたのでごがひもじいかどうかなんて気のつくお子は、お珍しゅうござ「失礼でございますが、旦那様。こんなお小さいのに、他人

「おかげさまで丈夫よ。それに――以前よりはずっと幸福にお立派に――」

「私に、お願いですって?」と、おかみさんはうれしそうになったのよ。――で、私、あなたにお願いがあって来たの。」

、「そこで、セエラは帳場によりかかって、お天気の悪い日、いますの?」

頼みました。ひもじそうな宿無の子を見たら、パンを恵んでやってくれと、ひもじそうな宿無の子を見たら、パンを恵んでやってくれと、そこで、セエラは帳場によりかかって、お天気の悪い日、

今どこにいるか、御存じ?」

くて、ひもじそうでいらっしゃいましたわね。それなのに、 あなた様のことを思い起して、少しずつパンを恵んでやるこ 出来ないんでございますの。気の毒な人はそこら中におりま 下さるなんて、うれしゅうございますわ。御覧の通り、 なく甘パンを施しておしまいになりましたのね。」 あなた様は、まるでプリンセスかなにかのように、惜しげも とにしているのでございますよ。―― ておきたいことがございますの。あの日以来、雨の日には、 すのにね。でも、失礼か存じませんが、ちょっとお耳に入れ ほんのもうその日暮しで、自分の力ではとても大したことは したような顔をしていました。が、聞き終るとまた. 「まア、それはそれは。」といいました。「私に施しをさせて おかみさんは話の間、 セエラをじっと見つめて、 あの日は、ほんとに寒 びっくり 、私は

くれますの。|

「私よりもひもじそうだったわね。」「あの娘は、ひもじそうだったわ。」と、セエラはいいました。中でつぶやいたことを思い起して、ちょっと微笑しました。セエラも、あの子のぼろぼろな膝にパンを置きながら、心のブリンセスと聞くと、印度の紳士は思わず微笑しました。

゙もう死にそうにお腹がすいていたのでございますよ。

あの

「あら、それじゃアあなた、あれから、あの子に会ったの?分のお腹の中で、狼がはらわたを食い裂いているような気がが――ぐしょぐしょになって坐っていると、可哀そうに、自子は、あれからよく私に、あの時のことを話してくれました

台所でも、乞食をしていたとは思えないほど、手助けをしてりそうでございますよ。思いの他役に立ちましてね、店でも、れに、あの子は、なかなかきちんとした、いい性質の子にな様、あの奥の部屋に、もう一月もいるんでございますよ。そのよさそうな顔をして笑いました。「そらあそこに、ね、お嬢「存じておりますとも。」おかみさんは、いつよりもよけい人

エラの顔を見つめておりました。

エラの顔を見つめておりました。
はふと見るとすぐ、セエラがいつかパンをくれた人だと知っめか、あの野蛮な眼付はすっかりなくなっていました。少女は立をしていました。少女は羞しそうにしていましたが、可愛いはふと見るとすぐ、セエラがいつかパンをくれた人だと知ったらしく、じっと立ったましたが、あの乞食娘にはちがいあたらしく、すぐ一人の娘が、おかみさんの。後から、帳場に出てたらしく、すぐ一人の娘が、おかみさんの。後から、帳場に出てまかみさんは、奥の戸口に歩みよって、声をかけました。

ございますから、この子はよく店に来るようになりました。した。「ひもじい時にはいつでもおいで、と私が申したもので「ね、こうなのでございますよ。」と、おかみさんは説明しま

来ると、私は何か用をしてもらうようにしたのでございますよ。」来ると、私は何がますようになりました。お行儀もよいし、の手伝いをしてくれるようになりました。お行儀もよいし、で、私は何だか、だんだんこの子が好きになってまいりましよ。ところが、この子は何でもいやがらずにしてくれますの来ると、私は何か用をしてもらうようにしたのでございます

ました。アンヌはその手を握りました。二人はまたお互に眼を見合せから手を出して、帳場の向うのアンヌの方にさし出しました。お互の顔を見合っていました。やがて、セエラはマッフの中セエラとアンヌとは、ちょっとの間、ただ黙って、じっと

「はい、お嬢さん。」と、少女は答えました。い味はよく知ってらっしゃるのですものね。」たにパンを施させて下さると思うわ。あなただって、ひもじがた、いいことを考えていたの。きっとおかみさんは、あな「私、うれしくてよ。」と、セエラはいいました。「私、今し

見送っていました。紳士と一緒に店を出、馬車に乗って去って行くのを、じっとました。アンヌは、いつまでもそこに立って、セエラが印度したが、セエラには、アンヌの気持がよく解るような気がし、アンヌは、それぎり何もいわず、つっ立っていたばかりで